

山形県立博物館研究報告

第 5 号

BULLETIN

OF

THE YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

No. 5

山 形 県 立 博 物 館

YAMAGATA PREFECTURAL MUSEUM

Kajo Machi, Yamagata City, Japan

March, 1 9 8 4

序

当博物館の研究報告第5号を発行いたします。当博物館は、地学・植物・動物・考古・歴史・民俗・教育資料館（分館）の7部門をもつ総合博物館で、山形県を中心に広く自然・人文の両面にわたり、博物館資料の収集・保存・展示・調査研究・教育普及等の活動を行っております。

当館の研究報告書は昭和47年度に第1号を発行し、以後第4号（昭和50年度）まで継続しましたが、これ以降は館内改装（展示替え）事業をはじめ各種事業および予算等の関係で中断の止むなきに至り、まことに脾肉の嘆をかこって参りました。

幸い本年度は職員の体制もととのい、また、館内改装事業等は今にして関係資料を整理記録しておかなければ、悔いを千載に残すおそれのあるとの考えから、この関係記録の整理収録をはかり、他の研究を併せ、研究報告第5号を発行することとしました。

本号所載の「草木塔の調査報告」は当館の初代館長結城嘉美先生が長年にわたってすすめられてきた草木塔に関する基礎的調査の集成であります。草木（供養）塔は、本県置賜地方に集中してみられる供養塔ですが、先人の敬虔な自然観を物語るまことに特色ある資料です。

繁忙な日常業務の中でこれらの調査研究をすすめられた職員の労を多とするとともに、本研究書が、山形県の自然や人文の研究にいささかでも裨益するところがあれば幸いです。

昭和59年2月

山形県立博物館長 大友義助

目 次

展示改装整備事業報告： 1

草木塔の調査報告：結 城 嘉 美 右1

展示改装整備事業報告

業 務 課[※]

I はじめに

本館は、昭和46年4月、山形県総合学術調査会が収集した資料を基礎にして設立された。

山形の自然と地域の生活を共通して理解できるようにという目的で構想が立てられたが、結果的には、地学、動物、植物、考古、民俗、一部歴史の部門別の展示になった。開館以来3年目にして、館内外から、本館の部門別展示は、自然環境、生活環境に対する県民の意識、関心が変化し、時代の要求にマッチしているかどうかという疑問が出され、展示計画委員会、展示協力委員会が組織され、展示改装の構想が検討された。この事業は足掛け7年にわたりおこなわれ昭和55年度で完了した。

この展示改装整備事業の報告は、以前に何らかの機会に発表すべきではあったが、諸般の事情よりその機会を得なかった。

この度、報告する機会を得たが、詳細な事項までまとめることは、当事者の転出等があり不可能であった。記録、今後の参考資料にする意味において、その経過の概要を報告するものである。

II 展示替の基本方針

県民が山形県という郷土を正しく理解できるように、自然のしくみや、そこに育った文化の流れが全体的にわかるように展示内容を検討する。

(1) 県民が山形県の豊かな自然を守り育てるために、知らなければならない自然の法則を明らかにする。

(2) 県民の生活や心を豊かにするために、山形

の歴史から学ばなければならない先人の知恵や生き方を明らかにする。

1 展示替えの必要性

(1) 当博物館は、開館以来5年目(昭和46年開館)を迎え、その間資料の収集に努め、現在約4万点(未整理資料6万点)の資料を保存することができ、県民のため山形県の自然や歴史、民俗に関する資料を展示し、その理解を深めてきた。

(2) しかし、最近における社会の動向から、本県の豊かな自然を保全し、県民の自然保護思想を涵養するとともに、急激な社会変貌のなかで、失われつつある伝統的な生活態度や心を育成していくことが、今日における県民の重要な課題になっている。

(3) 当博物館では、これまで、動物、植物、地学、考古、歴史、民俗の部門毎の展示によって、部門毎の啓発に重点をおいてきたが、これらの方法によっては、県民のかかえている重要な課題や要請に応えることができなくなっている。

(4) 県民が厳しい自然とたたかいながら、長い歴史と伝統のなかで築きあげてきた生活や文化をさらに発展させていくためのエネルギーを培うために山形県の自然と歴史の全体構造のなかで、重要な課題について系統的に編成替えをする必要がある。

2 展示替えの目的

(1) 県民が山形という郷土を正しく理解できる

※ °奥山武夫(業務課長) °金山耕三(学芸員) °高橋静夫(学芸員) 高橋信弥(研究員) 野口一雄(学芸員) 尾形典典(学芸員) °印 文責任者

とともに、将来いかにあるべきかを考えられるようにする。

(2) そのため、県民が山形県の自然のしくみやそこに育った文化の流れが理解できるようにする。

(3) 山形県という郷土を、日本全体とのつながりのなかで、その位置づけが理解できるようにする。

(4) 県民が、豊かな自然を守り育てるために知らなければならない自然の法則性や、郷土の歴史のなかで学ばなければならない先人の知恵と生き方を明らかにする。

(5) このことによって、県民の地域的な連帯感や地域社会に対する所属感が培われるようにする。

III 展示計画の策定

1 展示計画委員、展示協力員の組織

これまで述べた基本的な構想のもとに、展示計画委員会、展示協力委員会を組織した。

(1) 展示計画委員の構成

- (ア) 研究者 3名
- (イ) 学識経験者 5名
- (ウ) 教育行政関係者 5名

(2) 展示協力員

- (ア) 人文関係 7名
- (イ) 自然関係 6名

2 協議の経過

- (1) 第1回 昭和50年4月30日
 - 博物館の役割と展示替の必要性について。
 - 常設展(旧)の解説案内。
 - 展示替の基本方針と展示構想について。
 - 展示の具体的構想について。
 - 展示計画案の作成までの手続きについて。
- (2) 第2回 昭和50年5月27日
 - 展示テーマの全体構成について。
 - テーマ毎の構成内容について。
 - 具体的な展示方法について。
 - 展示資料の所在について。

◦ 展示計画案作成の手順について。

- (3) 第3回 昭和50年7月9、10日
 - 展示の全体計画について(全体会)
 - 展示の具体的計画について(分科会)
 - 全体計画の確認について(全体会)

3 検討された展示構想

(1) 第1回委員会

- (i) テーマ展示を重視し、分類展示を併用する。
- (ii) テーマの設定は、自然のしくみ、法則性、自然史等の関連や人間とのかかわりあいを重視して設定する。
- (iii) 展示の方法は、その時代の庶民の生活や心が浮き彫りにされるように工夫するとともに、自然環境が構造的にとらえられるようにする。

(2) 第3回委員会

- (i) テーマ展示を重視し、分類展示を併用する。
- (ii) 山形県の特徴が日本史や世界史とのつながりのなかで、その位置がわかるように展示する。
- (iii) 山形県の豊かな自然のしくみを、法則性やなりたちがわかるように展示する。
- (iv) 山形県の歴史の全体的な流れと、その時代の庶民の生活や心がわかるように工夫する。
- (v) 特に、米づくりの歴史と農民のくらしや文化を中心に厳しい自然とのたたかひの過程やそこから生みだされた伝統的生活様式が明らかになるように工夫する。
- (vi) 分類展示は、その視点やねらいを明確にして、系統的に展示し、学術研究のための資料は、必要に応じて公開する。
- (vii) 展示方法は、資料のもつ価値が明らかになるように生活や環境との関連を重視して展示する。

4. 検討された展示の具体的構想

(1) 第1回委員会

(i) 自然部門

(ア) 山形県の現地形のなりたちを地史的に明らかにする。

(イ) 山形県の豊かな自然を構成している環境的条件を明らかにする。

(ウ) 生物と自然環境とのかかわりあいを明らかにする。

(エ) 生物の適応を気候との関連で明らかにする。

(オ) 自然環境と人間生活とのかかわりあいを植生の変化から明らかにする。

(カ) 環境と生物の共存関係を食物連鎖から明らかにする。

(ii) 人文部門

(ア) 人間の住みはじめを自然との関連のなかで明らかにする。

(イ) 山形県の歴史の変革期を政治的に明らかにする。

(ウ) 厳しい自然環境のなかで生きてきた庶民の生活を信仰との関連のなかで明らかにする。

(エ) 山形県の文化的、経済的発展の基礎を最上川舟運との関連のなかで明らかにする。

(オ) 山形県の風土のなかで生きてきた庶民の暮らしを、民俗資料との関連で明らかにする。

(カ) 山形県の近代化を峠の開発との関連で明らかにする。

(2) 第3回委員会

(i) 自然部門

(ア) 山形県の現地形のなりたちを地史的に明らかにする。

(イ) 山形県の豊かな自然を構成している環境的条件を明らかにする。

(ウ) 自然環境と生物の共存関係を食物連鎖から明らかにする。

(エ) 自然環境と人間生活とのかかわりあいを植生の変化から明らかにする。

(ii) 人文部門

(ア) 人間の住みはじめを自然との関連のなかで明らかにする。

(イ) 山形県の歴史の変革期を文化史的に明らかにする。

(ウ) 厳しい自然環境のなかで生きてきた農民のくらしや文化を明らかにする。

(エ) 山形県の文化的、経済的発展の基礎を最上川舟運との関連で明らかにする。

(オ) 山形県の明治以後の動きを世界の歴史のなかで明らかにする。

5. 検討された展示の構成内容

第1回、2回、3回の委員会で検討されたが以下第3回委員会で検討された事項について掲げる。

1-1 山形のなりたち

山形県の現地形のなりたちを地史的に理解させる。

<展示項目>

- ① 山形の基盤
- ② 激しい海底火山
- ③ 海成層のたい積
- ④ 出羽奥羽山脈の形成
- ⑤ 内陸盆地の湖沼時代
- ⑥ 現地形の完成

1-2 象のいたところ

ナウマン象がすんでいた新生代第四紀の自然環境を理解させる。

<展示項目>

- ① 第四紀の植生
- ② 第四紀の動物相
- ③ 第四紀の気候変化
- ④ 大陸との関係

1-3 豊かな自然林と動物たち

山形県の自然植生の地理的分布を理解させるとともに、動物と植物は、互いに助けあ

② 豪族のいる村

③ 戦国時代の山形

2-4 諸藩の成立と藩政改革

藩政の変遷を通して近世における庶民のくらしを理解させる。

<展示項目>

① 諸藩の成立と城下町

② 藩校と養蚕の奨励

③ 庄内の砂防林

④ 飢饉と一揆

2-5 にぎわう最上川舟運

最上川の舟運が山形の経済の発展や文化の交流に果たしてきた役割と当時の農民や町人のくらしを理解させる。

<展示項目>

① 紅花の里

② 大石田の河岸

③ 商人の活躍

2-6 山形県の誕生と近代化へのあゆみ

山形県の近代化の過程を日本の歴史との関連で理解させる。

<展示項目>

① 藩から県へ

② 三島県令と道路の開さく

③ 近代学校の成立

④ 鉄道の開通と近代産業

2-7 激動の時代

明治初期から戦後まで激動期のなかで生き抜いてきた県民の生活を理解させる。

<展示項目>

① 昭和の不景気

② 戦時下のくらし

③ 戦後の諸改革

2-8 米づくりと農民の文化

山形の農民がきびしい自然とたたかいながら米づくりをしてきた歴史的な過程と、そこから生れた豊かな文化を理解させる。

<展示項目>

① 自然とのたたかい

② 米づくりと農具の発達

③ 農家のくらし

④ 主婦のしごと

⑤ 年中行事

⑥ 農民の文化

3-1 分類展示

<自然部門>

① 山形の化石

② 山形の地下資源

③ 山形の岩石

④ 山形の鉱物

⑤ キノコ、山菜、海草、薬草、毒草

⑥ 最上川の魚貝類

⑦ 庄内浜の魚貝類

⑧ 代表的な県内の野鳥

⑨ 両生類とハ虫類

<人文部門>

① 石器、土器の変遷

② 昔の子供の遊び具

③ あかりの歴史

④ 山形のやきもの

⑤ 山形のいもの

⑥ 山形のこけし

⑦ 山形の土人形

⑧ ろうそく作り

IV 基本計画の策定

1 全館の構成

展示替のねらいを達成するために、全館の構成をつぎのとおりにする。

(1) 相談コーナー

県民や見学者の疑問や質問に応えるために相談コーナーを設置し、入館者の興味や関心の拡大をはかる。

(2) 学習・休憩コーナー

見学者の休息をはかるとともに、展示室で学んだことを整理や復習、さらに自発的な学

習の発展のために学習テーブルを設けてその利用の便をはかる。

(3) ギャラリー

山形県の自然やその心を探るために、フォトギャラリーを設け、展示効果の拡大をはかる。

(4) 第一展示室

「豊かな自然とそのめぐみ」というテーマで展開する。

(5) 第二展示室

「山形の大地に刻まれた歴史」というテーマで展開する。

(6) 第三展示室

「激動する山形100年」[※]というテーマで展開する。なお、第三展示室は、特別展や催し物展の会場として利用するため、可動的な展示場として利用する。

※その後、検討を重ね、第三展示室のテーマは「近代山形くらしのうつりかわり」に変更された。

2. 展示システム

(1) テーマ展示

各展示区分は、テーマに基づいて展開し、テーマのもつ意味を理解させるようにする。

(2) 分類展示

自然分類および人為分類によって、豊富な資料を提供し、系統的な理解を深めるようにする。

(3) 研究展示

とくに選定されたテーマについて研究成果を具体的に解説し、研究者や教育者の知的欲求に応えるようにする。

(4) アテンションゲッター

各コーナーの中心的な課題を象徴する展示物によって見学者の注目をひき、興味や関心をいだかせるとともに、疑問を投げかけるようにする。

(5) エピソードコラム

テーマ内容に関連のある興味深い挿話を資料、イラスト、図表などによってスポット的に紹介し、知的関心や豊かな情操を培うようにする。

(6) 映像

表現不可能な内容については、映像によって展開し、イメージーションをかきたてるようにする。

3. 展示の展開

(1) 対象

(ア) 小学校4.5年から中学1年ぐらいの児童生徒が見てもわかることを原則とするが、内容によっては、専門的な研究や学術的な研究にも役立つようにする。

(イ) 情報の質を区分し、対象によって必要な情報が選択できるように展示内容を構成する。

(ウ) 学校における教育過程の補助的な役割を担うのではなく、社会を構成している一員としての子供の自主性や創造力を培うことをねらいとして展開する。

(2) 展示の視点

(ア) 学問的に体系づけられた知識を教えるという展開でなく、現在の県民生活を考える素材としての自然や歴史を取扱うという基本的な視点で展開する。

(イ) 県民が直接体験できる日常生活に関連する身近な問題から展開する。その場合、県民の要求や関心は何かということをとらえて、その問題から語りかけていくようにする。

(ウ) それぞれのテーマは、県民のために何を触発し、何を感じさせ、何を考えさせようとするのかということを確認にして展示内容を構成する。

(エ) テーマの構成は、県民に訴える価値のあ

るものを精選し、その相乗効果があがるように構成する。

- (オ) 模型、ジオラマ、パノラマ、図表等は、何をわからせようとするかというねらいを明確にして作製する。
- (カ) 展示効果を高めるための視聴覚機器等は、その機能とねらいを明確にして使用する。

(3) 展示の構成(テーマ)

1-0 豊かな自然とそのめぐみ

(ア) 構成

- 1-1 山形のなりたち(テーマ展示、分類展示)
- 1-2 森林の科学(テーマ展示)
- 1-3 植物の世界(テーマ展示、分類展示)
- 1-4 昆虫の世界(テーマ展示、分類展示)
- 1-5 野鳥の世界(テーマ展示、分類展示、研究展示)
- 1-6 暖流と雪の山形(テーマ展示、分類展示、研究展示)
- 1-7 心のふるさと山形

(イ) ねらい

- (i) 「山形のなりたち」では、「山からヒトデが」これは何故だろう?と見学者にひとつの意外性を感知させ、山形のなりたちに対する関心と科学する心を育てることにある。
- (ii) 「森林の科学」では、何気ない自然の姿とそこに厳として貫かれている法則性を強調し、自然愛護の精神を涵養する。
- (iii) 生物と環境のつながりについては「植物の世界」「昆虫の世界」「野鳥の世界」の各コーナーで具体的な例を掲げ理解させる。
- (iv) 「暖流と雪の山形」では、「暖流と生物」「雪と生物」との関係を知り、山形県の豊かな自然について理解させる。

2-0 山形の大地に刻まれた歴史

(ア) 構成

- 2-1 山形のあけぼの～狩猟・採集から稲作へ～(テーマ展示、研究展示)
- 2-2 ひらかれる出羽国～進む開拓と出羽国のなりたち～(テーマ展示、研究展示)
- 2-3 武士の動きと農民の願い～中世武士と農民信仰～(テーマ展示)
- 2-4 藩政と庶民の暮らし～藩のなりたちと藩政下の人びと～(テーマ展示)
- 2-5 最上川のにぎわい～最上川のもたらしたもの～(テーマ展示)
- 2-6 米づくりのくらしと心～きびしい自然の中で～(テーマ展示)

(イ) ねらい

- (i) 「山形のあけぼの」では厳しい自然とたたかひながら生活の場を切り開いてきた原始人のくらしを、狩猟・採集から稲作への変遷を中心に理解し、人間の生きる知恵を感じさせる。
- (ii) 「ひらかれる出羽国」では、古代山形における稲作の発達と律令制度のもとにくみこまれてゆく山形のすがたを通して、古代の人びとの生活を理解させる。
- (iii) 「武士の動きと農民の願い」では、村むらを開いてきた農民の姿と豊作を祈る農民の心を、出羽三山信仰などによって理解し、敬けんな中世農民の心情を今日との関わり合いで考えさせる。
- (iv) 「藩政と庶民の暮らし」では、近世諸藩の成立と庶民のくらしを通して、県内各地域の歴史的風土の形成を考えさせる。
- (v) 「最上川のにぎわい」では、かつて山形の経済、流通の大動脈として、人びとの生活を支えた最上川のはたらきを、大石田町のパノラマを通して理解させる。
- (vi) 「米づくりのくらしと心」では、米作

県山形の基盤が築かれてきた経過と農民の労苦を理解し、今日の農業を理解させる。

3-0 激動する山形100年

(ア) 構成

3-1 明治維新と山形県の誕生

3-2 暮らしのうつりかわり

3-3 イラストマップ山形100年

(イ) ねらい

- (i) 近代100年の激動の中で生きてきた県民の生活を国際的視野のもとに理解し、明日の山形県を展望する。

4. 変更した展示構成(テーマ)

(ア) 2-3の「武士の動きと農民の願い」のテーマについては、農民の願いを表現する展示資料の不足、展示効果などいろいろ検討を加え、「武士の動き」のテーマに変更した。

(イ) 山岳信仰、特に三山信仰についても扱う必要があるが、展示スペースの面から大きくは扱うことは不可能である。概説的な扱いとし「三山信仰への道」のテーマを設定する。

(ウ) 2-6「米づくりの暮らしと心」を「米づくりの暮らしと心」に変更する。

(エ) 3-0「激動する山形100年」については県政の変遷的な展示を通し、明日の山形を考えるコーナーであるが、県政を芯においた点には、いろいろな問題があるので、このコーナーは、明治以降の風俗史的な扱いのテーマとし、民俗の分類展示にし、可動的な展示場として利用する。以下のテーマに決定する。

3-0 近代山形暮らしのうつりかわり

3-1 街かどの風俗(テーマ展示)

3-2 あかりのうつりかわり(分類展示)

3-3 山形のやきもの(分類展示)

3-4 山形の郷土玩具(分類展示)

3-5 雪と山形(分類展示)

(オ) 2-5「最上川のにぎわい」、2-6「米づくりの暮らしと心」については、歴史的に逆のぼると、2-4以前のテーマと重なり、扱いが困難なため、通史的扱いからはずして展示する。

V 実施設計

～最終的な展示構成(テーマ)展示項目～

1-0 豊かな自然とそのめぐみ

1-1 山形のなりたち

1-1-0 山からでたヒトデ(アテンションゲッター)、VTR、日本列島のおいたち

1-1-1 古生代の山形「海底に眠る山形」

1-1-2 中生代の山形「海底から陸へ」

1-1-3 新生代新第三紀の山形「ふたたび海底へ」

○ソロバン玉石(エピソード)

1-1-4 「静かな海底で」

○田川の魚化石(エピソード)

1-1-5 「海から湖沼へ」

1-1-6 新生代第四紀の山形「くりかえす氷期」

1-1-7 「火をふく山やま」

○ナウマン象の化石(エピソード)

1-1-8 「最上川と郷土のすがた」

○美しい鉱物(エピソード)

1-1-9 進化の系統樹

1-1-10 化石にみる山形の植物

1-2 森林の科学

1-2-0 鳥の王者-イヌワシ(アテンションゲッター)

1-2-1 コナラ・ブナ林の動物たち(ジオラマ)

- 1-2-2 自然林のしくみ(テーマ展示)
- 1-2-3 動物と植物のつながり(テーマ展示)
- 1-3 植物の世界
- 1-3-1 植物の分布とひろがり(テーマ展示)
- 1-3-2 北からの植物、南からの植物(テーマ展示)
- 1-3-3 生き残った植物(テーマ展示)
- 1-3-4 外国からきた植物(テーマ展示)
- 1-3-5 植物のなかまわけ(テーマ展示)
- 1-4 昆虫の世界
- 1-4-1 山形のチョウ(テーマ展示)
- 1-4-2 昆虫のすみかとからし(テーマ展示)
○昆虫のチエ・ミツバチ(エピソード)
- 1-4-3 昆虫のなかまわけ(分類展示)
- 1-5 野鳥の世界
- 1-5-1 鳥のすみかとからし(ミニジオラマ)
- 1-5-2 鳥の渡り(テーマ展示)
- 1-5-3 鳥のなかまわけ
- 1-5-4 庄内海岸の野鳥(研究展示)
- 1-5-5 飯豊連峰の野鳥(研究展示)
- 1-6 暖流と雪の山形
- 1-6-0 庄内海岸にくる南のカメ(アテンションゲッター)
- 1-6-1 暖流と生物(テーマ展示)
- 1-6-2 雪と生物(ジオラマ)
- 1-6-3 生物の冬ごし(テーマ展示)
- 1-6-4 トウホクノウサギの体色変化(研究展示)
- 1-6-5 最上川の魚類(分類展示)
- 1-6-6 山形の淡水貝と陸産貝(分類展示)
- 1-6-7 庄内浜の海岸生物(分類展示)
- 1-6-8 特殊な分布を示す山形の動物(テーマ展示)
○テンサラバサラ(エピソード)
- 1-7 心のふるさと山形
- 2-0 山形の大地に刻まれた歴史
- 2-1 山形のあけぼの
- 2-1-1 人のすみはじめ(メイン・イメージ)
- 2-1-2 縄文時代のくらし(メイン・イメージ)
- 2-1-3 日向洞穴の人びと(ジオラマ)
- 2-1-4 山形の縄文土器
○縄文人のねがい(エピソード)
- 2-1-5 縄文人の四季
- 2-1-6 縄文人の交易
- 2-1-7 山形の遺跡分布
- 2-1-8 弥生時代のくらし(メイン・イメージ)
- 2-1-9 古墳時代のくらし(メイン・イメージ)
- 2-1-10 山形の古墳
- 2-1-11 古墳のひろがり
- 2-2 ひらかれる出羽国
- 2-2-1 嶋むらのくらし(メイン・イメージ)
- 2-2-2 出羽国の成立と条里制(メイン・イメージ)
- 2-2-3 出羽の国衙
○古代農民のあしあと(エピソード)
- 2-2-4 出羽国の古社寺(メイン・イメージ)
- 2-3 武士の動き
- 2-3-1 武士の台頭(メイン・イメージ)
- 2-3-2 豪族のいる村
○平和を願う人びと(エピソード)
- 2-4 藩政と庶民のくらし

- 2-4-1 最上氏の統一と諸藩の分立(メイン・イメージ)
 - 駒姫(エピソード)
- 2-4-2 城下町の暮らし(メイン・イメージ)
- 2-4-3 藩政下の村(メイン・イメージ)
- 2-4-4 飢饉と一揆
- 2-4-5 生産の高まり
 - べにばな歳時記(ロータリービジョン)
- 2-4-6 山形の人物
- 2-5 最上川のにぎわい
 - 2-5-1 最上川の舟運(メイン・イメージ)
 - 2-5-2 最上川舟運の繁栄
 - 芭蕉(エピソード)
 - 河岸の町・大石田(パノラマ)
- 2-6 三山信仰への道
 - 2-6-1 信仰の山(メイン・イメージ)
 - 2-6-2 出羽三山と庶民信仰
 - 古鏡と鏡池(エピソード)
- 2-7 米づくりの暮らしとところ
 - 2-7-1 米づくりの一年(メイン・イメージ)
 - 2-7-2 農家のいろいろばた
 - 農家の居間の復元
 - 2-7-3 農家の冬仕事
- 3-0 近代山形暮らしのうつりかわり
 - 3-1 街かどの風俗
 - 3-1-1 文明開化と暮らし
 - 3-1-2 大正の暮らし
 - 3-1-3 昭和の暮らし
 - 3-2 あかりのうつりかわり(分類展示)
 - 3-3 山形のやきもの(分類展示)
 - 3-4 山形の郷土玩具(分類展示)
 - 3-5 雪と山形(分類展示)

VI 展示の実際

全面展示替工事ではあるが、既存の展示ケースは出来る限り生かし、島展示を設けて、有効な展示スペースをとり、テーマに沿った動線を設定した。

第一展示室は、自然部門の展示室であるが、展示ケース、展示台等は白色をベースにし、明るく広さを感じられるように工夫した。

第二展示室は、人文部門の展示室で、展示ケース、展示台はセピア色にし、床にカーペットをはり、おちついて、じっくり観覧できるような雰囲気にするよう工夫した。

第三展示室は、特別展などの会場として利用することが可能なように、移動可能な展示にするため、演示具を工夫した。

音響については、できるだけ交錯しないように工夫した。

予算措置の関係で、以下のような年次計画のもとに工事を行った。

昭和50年度(予算 3,550,000円)

○企画書 ○基本設計

昭和51年度(予算 1,650,000円)

○第一展示室実施設計

昭和52年度(予算 4,200,000円)

○第一展示室工事

山形のなりたち、植物の世界、昆虫の世界、野鳥の世界、森林の科学

○相談コーナー工事

昭和53年度(予算 4,059,000円)

○第一展示室工事

森林の科学(ジオラマ)、暖流と雪の山形、心のふるさと山形

○学習・休憩コーナー工事

○第二・第三展示室実施設計

昭和54年度(予算 6,000,000円)

○第二展示室工事

山形のあけぼの、ひらかれる出羽国、武士の動き、藩政と庶民の暮らし、最上川のに

ぎわい、三山信仰への道、米づくりのくらしとこころ、近代山形くらしのうつりかわり

昭和55年度(予算 32,000,000円)

○第三展示室工事

山形のあけぼの(ジオラマを含む)

展示替工事中も平常開館にして、各年度毎に完成したコーナーは、順次公開した。

施工業者は株式会社乃村工芸社である。

1 展示の構成

第一展示室は、周囲にある既設の壁面ケースをできるだけ生かすこととし、展示室の中央部に展示パネルや独立展示ケースをセットして展示スペースの不足を補い、展示に変化をもたせるように工夫した。

第一展示室の展示は、テーマ展示を主体とし、分類展示、研究展示も併用した。

テーマ展示は、テーマごとに解説パネル、バックパネルで壁面を構成し、展示台上に標本資料や模型を展示するのを原則とし、分類展示・研究展示は解説パネルと標本資料とで構成するのを原則とした。以上のほか、大テーマの導入部にアテンションゲッターを配置し、また、ジオラマやエピソードコラムを設けた。

第二展示室は、第一展示室の反省から既設の壁面ケースに必ずしもとらわれず、木組みを取り入れるなど動線を明確にし、また変化に富む展示を心掛けた。

第二展示室の展示は全てテーマ展示とし、テーマごとに、解説パネル、バックパネルで壁面を構成し、前に展示台、展示ケースを据えて実物資料やレプリカ資料を展示するのを原則とした。以上のほか、テーマにより、アンドンボックスを利用して絵図の写真を展示したり、ジオラマやパノラマ模型を製作展示し、また、民家の一部を再現しさらに、第一展示室同様エピソードコラムを設けた。

第三展示室は、特別展示室の半分を、移動可能な間仕切りパネルで仕切って常設展示室としたもので、全室を特別展示室に利用できるように、可動展示とした。

第三展示室の展示は、テーマ展示と分類展示を併用し、壁面の解説パネルを展示台上の実物資料で構成するのを原則としたが、壁面に実物資料を展示したコーナーもある。

2 解説パネルの構成

第一展示室の解説パネルは、テーマ展示と分類展示、研究展示とで、形態、構成等に差をつけ、テーマ展示の中でも、テーマにより多少の差がある。

「山形のなりたち」のメインパネルは横90cm、縦130cmで、内容は、テーマ名、メインコピー、古地理図、サブコピー、それにテーマにより分布図や解説イラスト等を盛り込んだ。サブパネルはテーマにより多少差があるが、メインパネルより小さい、横60～75cm、縦75～90cmのパネルを使用し、内容は解説コピーやイラスト等で構成した。

「植物の世界」以下の解説パネルは横90cm、縦135cmで、メインパネルは、テーマ名、メインコピー、サブコピー、写真、イラスト、図等で内容を構成し、サブパネルはサブコピー、写真、イラスト、図等で構成した。

分類展示および研究展示のパネルは横90cm、縦240cm(壁面ケース内は220cm)を原則とし、メインコピー、図、写真等で構成した。

コピーは横書きとし、メインコピーは、「山形のなりたち」が1行16字で8行、130字以内、「植物の世界」以下は1行26字で4行、100字以内とし、サブコピーは、図や写真等の情報との関連もあり一定しなかった。分類展示、研究展示のメインコピーも1行26字で4行、100字以内とした。

第二展示室の解説パネルは、原則として横90

cm、縦267cm（壁面ケース内は233cm）のパネルを使用し、観覧者の視線の高さを考慮して、床190cmから65cmまで（パネル上方より90cmから215cmまで）の中に情報を盛り込んだ。上方90cmの部分には、メインパネルには、イラストをシルクスクリーン印刷した銅板（80cm×80cm）をはりつけ、サブパネルは空白のままとしてテーマの区分を明確にした。

このイラストは項目イメージイラストと呼び、展示テーマを印象づける実物資料をイラスト表現したもので、土器、埴輪、仏像、絵巻物、兜、絵馬等、山形に直接関係ある、あるいは県内に所蔵保管されている資料から選択した。

解説パネルに盛り込んだ情報は、時代区分の帯、テーマ名、メインコピー、サブコピー、図、写真等で、メインパネルとサブパネルとの差はほとんどない。

時代区分の帯は、旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉、室町、安土・桃山、江戸、明治・大正・昭和の11区分とし、該当する時代を色分けして、一見してその展示の属する時代が分かるように工夫したものである。時代区分をこえてテーマ設定し、展開している「最上川のにぎわい」、「三山信仰への道」、「米づくりのくらしとところ」の3コーナーには、時代区分の帯は無い。

コピーは横書きとし、メインコピーは1行30字で6行、180字以内、サブコピーは図や写真等、他の情報との関連で長短があるが、200字前後を原則とした。

コピー以外で解説パネルに盛り込んだ情報は、遺跡分布図、地図、図解、グラフ、系図、年表、写真等で、テーマにより適宜選択した。

第三展示室の解説パネルは横90cm、縦150cmのパネルを使用した。「街角の風俗」は明治、大正、昭和の3期に分けてそれぞれ解説パネルをおこし、その内容はテーマ名、メインコピー、年表、写真で構成した。このコーナーのみ、横90

cm、縦90cmのサブパネルをおこし、各時代の県庁および街角の風俗の写真を盛りこんだ。

「あかりのうつりかわり」以下の解説パネルはテーマ名、メインコピー、サブコピーおよび、テーマにより図表、分布図等を盛り込んだ。

メインコピーはいずれも1行30字で6行、180字以内、サブコピーは150字前後とした。

3. バックパネルの作成

解説パネルと共に壁面を構成するバックパネルは、第一展示室、第二展示室共に、テーマにふさわしい資料写真や情景写真、イラストをもって表現した。これらのうち、第一展示室は「山形のなりたち」の7枚、第二展示室は「山形のあけぼの」の2枚と「ひらかれる出羽国」の1枚、計10枚はイラストパネルとし、他は写真パネルとした。

写真によるバックパネルは、形状、大きさ共に種々あり、カラー、モノクロ共に使用した。

バックパネルをはじめ解説パネルその他に使用した写真は、一部館所蔵のネガから選び、大部分は新たに館職員又は施工業者委託のカメラマンが撮影したが、第二展示室の「米づくりのくらしとところ」のコーナーは、ほぼ全部が借用ネガによった。しかし、機械化以前の米づくりの姿を写しているものは少なく、中でもバックパネルに拡大しうるネガは稀であった。解説パネルに入れた写真の中には、適したものが見つからず、新たに演出して撮影したものもある（水かけ、わらじづくりと針仕事の2点）。

尚、第一展示室の最後にある横450cm、縦265cmの大きな写真パネルは、テーマ「心のふるさと山形」を1枚の写真で表現したものである。「山と川と花と」、すなわち、内陸からも庄内からも仰ぐことのできる美しい月山、母なる最上川、山形の春の野をおおう果樹の花の3つこそ山形を象徴するものとして、昭和53年5月、寒河江市の高瀬山より撮影したものである。

第一展示室の7枚のイラストパネルは、山形の

地史を物語るもので、古生代、中生代各1枚、新生代5枚とした。「山形のなりたち」の展示は、山形に関係資料の少ない古生代、中生代の展示スペースを狭くし、関係資料の多い新生代のスペースを広くとって、内容豊かな展示をと意図したからである。

「海底に眠る山形」(古生代)、「海底から陸へ」(中生代)、「ふたたび海底へ」(新生代)、「静かな海の底で」(同)、「海から湖沼へ」(同)、「くりかえす氷期」(同)、「火をふく山々」(同)のテーマに沿って生物や環境を想像復元したもので、できるだけ山形に合わせ、しかも、小学生以下にも理解できるよう配慮して描き上げた。なお、新生代については特徴ある場面を設定したが、時間的にきわめて長い期間を一場面に表現した古生代、中生代の両場面は、生物等を、動線に沿って古い方から描き分けた。

パネルの大きさは横270～450cm、縦220cmで原画をセピア系の色調で描き上げ、カラー写真引き伸ばしによって仕上げた。

第二展示室の3枚のイラストパネルは、旧石器、縄文、古墳各時代の人々の生活の様子を表わしたもので、それぞれの時代を特徴づける場面を設定し、考古学上の考証の下に描いた。場面の設定で留意したことは、調査が行なわれた比較的知名度の高い遺跡を選んで比定したことで、さらに、画面の構成では、各時代の生業や住居、衣服、自然環境の差違を明確に表現するよう心掛けた。

約2万年前の月山山麓でのナウマン象狩り、約4千年前、熊ノ前遺跡に住んだ人々の暮らし、約1300年前、嶋遺跡に住んだ人々の暮らしの3場面とし、施工業者をまじえて場面比定した遺跡の下見をし、諸資料を参考にして描いた下絵に修正を加えながら構想を練って描き上げた。

一水会々員河西昭治氏が描いた油絵で、大きさは1枚は横180cm、縦140cm、他の2枚は、横180cm、縦180cmである。

4. 資料の展示

展示物は、テーマに沿ってより質の高い資料を選び、可能な限り標本資料・実物資料をあてた。ただ、ゆったりと観覧してほしいとの配慮から資料を精選したので、展示資料が少ない感はないでもない。こうした中で、第一展示室の「昆虫のなにかまわけ」のコーナーの昆虫標本展示や、第二展示室の「嶋むらの暮らし」のコーナーの土器の展示などは、デモンストレーション展示ともいえるべく、多数の資料を展示し、資料の豊富さを印象づけたところもある。

展示資料は、県内で収集、採集したものや、県内に所蔵されているもの、さらに、山形に関係あるものを中心としたが、第一展示室では、県内資料との対比などの必要から、県外産の資料もかなり展示した。

レプリカ資料を含めて、資料の展示方法は、壁面ケース、独立ケース等、ケース内展示を主とした。資料の破損、汚損や盗難をおそれたためである。露出展示をしたのは、第一展示室では3つのアテンションゲッターの資料および「木材のいろいろ」のコーナーの木材標本のみで特に少く、第二展示室では「日向洞穴」ジオラマをはじめ、「城下町の暮らし」の中の「呉服太物商の店さき」と「桶屋の仕事場」の両コーナー、さらに「米づくりの暮らしとところ」の全資料と、かなり多数の資料を露出展示し、第三展示室では、「雪と山形」の全資料を露出展示した。いわゆる民俗資料が中心ではあるが、露出展示をできるだけ取り入れた。なお、「桶屋の仕事場」に展示した鉋やせんなどの刃物については、刃をつぶし、演示具にしばりつけるなど、観覧者の不慮の負傷や持ち出しの予防につとめた。

5. レプリカの製作

展示物は可能なかぎり標本資料や実物資料をもってするようにつとめたが、次の場合はレプリカ資料をもって代えた。

1. 資料の保存上の観点から、長期間展示を伴う常設展示を極力避けなければならない資料。
2. 信仰上の問題や所蔵者の意向から、長期間にわたる借用展示が不可能な資料。
3. 資料の材質等から標本又は実物による展示が不可能な資料。

予算上の制約もあり、第一展示室では、櫛山産ヒトデ化石（県指定天然記念物）、ヤモリ、ヨーロッパカブトエビの3件5点、第二展示室では、蟹沢遺跡出土異形注口土器、釜淵遺跡出土土偶（重要文化財）、江俣遺跡出土土器、堂森遺跡出土平織瓦痕土器、神立洞穴遺跡出土レピアヘッド、山辺条里遺構農民の足跡、慈恩寺木像阿弥陀如来坐像（重要文化財）、若松寺金銅聖観音像懸仏（同）、成島八幡宮棟札、普光寺梵鐘（県指定有形文化財）、石行寺大般若経第百卷（同）、蔵増大膳亮宛最上義光書状、戸沢安盛宛最上義光起請文、金峯山宛最上義光寄進状、宝幢寺宛最上義光和歌懐紙、羽黒山絵巻、羽黒山御手洗池出土銅鏡（重要文化財、平安鏡2、鎌倉鏡1、室町鏡1、計4面）の17件20点、合計20件25点を製作して展示にあてた。

レプリカを製作する資料を確定するまでには、所蔵者と数回にわたる交渉をもち、最終的には「資料複製許可申請書」を出して「承諾書」をもらうという、きちんとした手続きを取った。交渉の過程では、信仰の対象でもあり、全く同一の姿では困る（仏像）といった声や、後日真偽問題が出ないようにレプリカ資料にその旨を明記するように（古文書）との条件を付したのもあった。

重要文化財については、文化財保護法に基づいて、文化庁長官宛に、複製品製作仕様書と所蔵者の承諾書を添えて、「現状変更等許可申請書」を提出して承認を求め、合せて、指導助言を要請した。文化庁からは、施工業者の推せんと事前検分実施の指導があり、重要文化財のレプリカ製作については推せんのあった2社に委託した。両社の担当者は直接文化庁の指導を受けて作業に着手し、

慈恩寺木像阿弥陀如来坐像については文化庁係官（鷹塚主任文化財調査官）の出張指導の後に着手した。なお、2社からは直接発注を強く求められたが、直接契約は締結しなかった。

いずれの資料についても、成形は業者工場で行ったが、型取りおよび着色は、化石、仏像、懸仏、梵鐘は現地で、土器、土偶、足跡、棟札、銅鏡は本館で借用の上、本館作業室で行い、経典、古文書、絵巻は借用の上、本館職員が施工業者の下に持参して撮影等を行い、ヤモリ、カブトエビは資料を業者に提供した。

各業者共、資料の材質を吟味して型取りするなど、細心の注意をはらい、技術を結集して作業に当たったが、出来・不出来がみられ、また、作業後1年程たって資料に変調を来たしたとの指摘があり、復旧の手だてを講じた例（懸仏）もあった。

6. ジオラマ・パノラマ模型の製作

1) 「森林の科学」ジオラマ

第一展示室で、山形のなりたちにく大テーマであり、代表的な展示として製作したのが、「森林の科学」ジオラマである。

ジオラマは、山形でもっとも身近にみられるコナラ・ブナ林の中で繰り広げられる動物と植物とのかかわりを「コナラ・ブナ林の動物たち」、「自然林のしくみ」、「動物と植物のつながり」の3つのテーマをとおして理解できるように製作した。

ジオラマを構成している植物は、高木層として7本のブナ・コナラ・ミズナラがあり、亜高木層にウリハダカエデ・ハウチウカエデなどをもち、低木層にはミヤマガマズミ・ヒメアオキ・オオバクロモジ・チシマザサなど、草本にはヤマソテツ・ショウジョウバカマ・マイズルソウなどがある。

ほかに、ナメコ・ツキヨタケなどのキノコ類、コケ、林内風倒木、ほぼ全面にしかれた落葉などからなっている。

ジオラマ奥の壁面には樹木の絵を描き、森林の広がりがあるようにした。

動物は、カモシカ・キツネ・タヌキ・リスなどの哺乳類、オオタカ・カケス・シジュウカラなどの鳥類、ほかにヤマアカガエル・ヤマカガシ・ムカデなどである。

季節はだいたい10月下旬ごろの秋季にあわせてある。

ジオラマは、大きさ約6m直径のほぼ円形で、高さ約3.6mの空間に展開されている。

観覧者は前面部の約1.8m×1.7mのガラス面3枚からそれぞれ角度をかえて内部を観察できるようにになっている。

正面、真中のガラス面は「コナラ・ブナ林の動物たち」で、手前に置かれたアンドンボックスには、ジオラマ内の動物・植物名がわかるようになっており、秋季には姿を消してしまう夏鳥やその他の動物もだしてある。

右側ガラス面は「自然林のしくみ」で、自然林はちょうど4階建のビルディングのようになっており、種類のちがう多くの植物が集まって、うまく共存していることをイラストを用いて説明してある。また、森林のまわりやふちは、つる植物や小低木におおわれていて、これによって林の中に日光や風が直接入るのを防ぐはたらきをしていることをイラストやジオラマ内に実際にマント群落、ソデ群落を製作して理解できるようにしてある。

左側のガラス面では、「動物と植物のつながり」とし、土中の断面にミミズ・モグラなども展示して、森林の中での生物たちが“食べたり”“食べられたり”の関係（食物連鎖）をイラスト・ジオラマをみながら理解できるようにした。

植物の資料収集は秋季にあわせて、2年間にわたっておこない、主として月山・朝日連峰の西川町内で収集した。高木・亜高木のブナ・ミズナラ・コナラなどの木材は営林署の好意で払い下げてもらったものである。

資料収集は、機械力を必要とするものは別とし

て労力はほとんど本館職員の手でおこなった。

また、動物の剥製標本はキツネをのぞいて本館所蔵のものを使用して製作した。

ヤマアカガエル・ヘビのヤマカガシ・ムカデ・キノコ類などは原資料を本館が提供してつくったレプリカである。

ジオラマには音響効果がついており、自動スイッチによる4チャンネルの立体音が使用されている。谷川の音、虫の声、ヒヨドリなどの鳥の声で森林内のふん囲気が一層できるようにした。

2) 鳥のすみかとミニジオラマ

第一展示室のテーマ展示の1つである「野鳥の世界」は、「鳥のすみかとくらし」、「鳥の渡り」、「鳥のなかまわけ」などをとおして、野鳥のすみかとくらしが理解できるように展示を展開している。

鳥は、それぞれの生活にもっとも適した形態をもち、さまざまな環境の中で生活しているため、「鳥のすみかとくらし」のコーナーでは「水辺の鳥」、「草原の鳥」、「村里の鳥」、「山林の鳥」、「高山の鳥」の5つグループにわけ展示している。

各グループの生息環境をモノクロバック写真で表現するとともに、くらしのなかみをよりわかりやすくするために、それぞれのグループのなかの1種をとりあげて、巣、卵、親鳥の剥製を配した営巣状況ジオラマを製作した。

ジオラマの大きさは、52cm×47cm×30cmの斜め上からのぞくボックス状のもので、ミニジオラマまたはスポットジオラマと呼んでいる。

「水辺の鳥」では、巣を川原の砂利の上につくったイカルチドリをだした。「草原の鳥」ではシバ草とヨモギの繁みの中に巣をつくったヒバリを、「村里の鳥」ではカキの木に巣をつくった、カワラヒワとした。「山林の鳥」は木の根元に巣をかけたホオジロをだし、「高山の鳥」では、地上の石かげにつくられたビンズイの巣を製作して代表とした。

3) 「日向洞穴のんびと」ジオラマ

第二展示室の最大の山場として製作展示したのが、約1万年前日向洞穴でくらしした人々の生活の

一場面を復元した「日向洞穴の人びと」ジオラマである。

高島町にある日向洞穴は、昭和30年～32年の3次にわたる発掘調査の結果、日本で最も古い土器の1つ、微隆起線縄文土器が発見された洞穴遺跡で、国指定の史跡となっている。

ジオラマでは、奥行10数mの洞穴の入口から2m程で切って、そこに縄文人の家族が生活している様子を再現し、観覧者は洞穴の奥から入口方向を見る形にした。

縄文人の生活情景は、秋の日の午後、妻が炉のそばでドングリを加工してクッキーを作っており、夫はイノシシをかついで狩りから帰り、子どもが喜び迎えている様子が中心で、洞穴内には、土器や石器などの生活用具や木の実などの貯蔵食物も配置し、さらに、背景には古白竜湖の湿原が間近に見え、遠く吾妻の山々をのぞむ絵を描いて、生活実感が出るようにつとめた。

約1万年前、縄文時代草創期のことだけに考証には特に力を入れ、柏倉亮吉氏をはじめ県内考古学者の指導助言を得たほか、ジオラマ構成物の復元には小林達雄氏の指導を受け、縄文人の復元については鈴木尚氏に依頼した。

縄文人の人体は、成人男女、小人男各1体、計3体とし、いずれも日向洞穴の年代に近い、長野県栃原岩陰出土の人骨を資料として復元し、剝製前のイノシシをかついでポーズの参考にするなどして製作を進めた。また、土器は日向洞穴出土の土器破片をもとに推定復元し、石槍や石斧も日向洞穴出土遺物を資料としてレプリカ製作したものであり、槍や斧の柄や弓の材料については福井県鳥浜見塚遺跡出土遺物を参考とした。

背景に描くための植生や地形、また、洞穴内の動物や食物、衣服、道具の材料等についての、日向洞穴の立地に合わせた検討は、主に自然部門（植物・動物・地学）担当学芸員の手によるもので、収集は全職員が分担して行った。すなわち、炉のまわりの石や敷きつめたマコモは日向附近から収

集し、槍・斧の柄や弓の材料は雪におおわれた山から伐り出し、イノシシは神奈川県丹沢から、シカの皮は宮城県金華山から入手したものである。今日、イノシシやシカは山形には生息していないが、これらの骨が日向洞穴から多数出土しているのでジオラマに盛りこんだものである。

なお、縄文人の人体は学問的な裏付けをもって復元し、製作したものであるが、彫塑風に仕上げ、写実的な彩色などはしなかった。観覧者の目が、洞穴内の生活の様子全体に向くことをねらったものである。

4) 「大石田河岸」パノラマ模型

「最上川のにぎわい」のコーナーは、小鵜飼船や筏の模型、船簞笥や米櫃などの船中道具、ろや櫂などの資料を展示するとともに、山場として、最上川舟運の最大の河岸として繁栄した大石田河岸のにぎわう様子を、パノラマ模型として製作し、展示した。当初、江戸時代、最上川舟運の主役として航行した艀船の模型を製作する計画があったが、資料不足で断念せざるを得なかった。

大石田河岸パノラマ模型の製作のための本格的な調査、資料収集は、第二展示室施工の前年、昭和53年早々から開始した。大石田の歴史や最上川舟運史に詳しい研究者（横山昭男氏、梅津保一氏等）の指導・助言を得るとともに、大石田町教育委員会の協力を得ながら、しばしば大石田の調査をし、古い姿をとどめる家屋や堂社の写真撮影をしたり、また、北上市立博物館の黒沢尻河岸のパノラマ模型を見学し、種々助言を得た。その結果

1. 大石田町絵図（大石田東町所蔵）
2. 大石田村絵図（梅津保一氏所蔵）

を基本的な資料とし、「大石田町誌」（長井政太郎著）や聞き込み・写真等現地調査の成果を加えてパノラマ模型の製作に取り組んだ。

こうした資料の中で、最も参考となる資料は「大石田町絵図」で、港につながれている多数の船や川岸に建ちならぶ土蔵、大通りに面した大小

の商家、広い境内と大きな伽蓋をもった寺院等々、繁栄する大石田河岸の様子を、色彩豊かに生き生きと描いており、この絵図を主たる典拠とした。なお、この絵図については、享保年間のものとする説もあったが、川船役所が設置された寛政4年(1792)以後、乗船寺・浄願寺が焼失した天保元年(1830)以前、すなわち、文化・文政年間頃の様子を描いたものと判断し、時代設定をした。また、季節は、村山地方の天領の村々からの廻米が酒田に向けてさかんに積下される春を想定した。

パノラマの範囲については、

1. 大石田河岸を象徴する1~数棟の建物を中心に、できるだけ狭い範囲で、細密に表現する。
2. 大石田河岸全体の様子がわかるように表現する。

という2つの表現方法が考えられたが、

1. 川船役所をはじめ、上下する荷物を集中的に保管するなどの機能を持っている建物・施設はなく、河岸を象徴する建物が見当たらないこと。
2. 大石田の最上川川岸のほぼ全域で船が発着していたこと。
3. 川べりには土蔵が建ちならび、有力商人は街道に面して軒を連ねていたこと。
4. 乗船寺や浄願寺、西光寺、愛宕社等、大石田町人の尊崇にささえられた立派な寺社が、最上川から町並をへだてて立地していたこと。

などの点から、大石田の町および川港のほぼ全域を範囲とすることが、大石田河岸繁栄の実態を表現する、よりよい方法であると判断した。

ここで問題なのは、典拠とした「大石田町絵図」当時の建物や町並がどの程度残存しているかであった。川岸は高いコンクリートの堤防にかわって昔日のおもかげは全くなく、道路も付けかえられた部分があり、町並も何回か火災に遭ったり、また、近年急速に改築が進行して、古い家並は消

えつつあった。さらに、神社・寺院の中には今日廃絶してしまったものもあり、また、存続しているものでも姿を大きく変えているのがほとんどであった。寺社や役所など、建物の規模を伝える資料は稀で、聞き取り調査によっても、調査ごとに異った答が返ってくるなど、資料収集は容易でなかった。

請負い契約後、施工に先立って、地元大石田で地元の研究者、関係者を含む検討会と現地調査会(出席者一梅津保一氏・斎藤政蔵氏・常盤富男氏・阿部次雄氏等)を聞き、以上のようなパノラマ製作方針を確認した。

その後、施工業者も現地に入って、地形調査を含む調査を綿密に行い、明治初期の大石田4か村の様子を伝えるという「大石田村絵図」から、町割や土地利用の状況を読みとって図面を作り上げた。その結果、

1. 範囲は、川港であることを明らかにするために対岸横山地区の一部を含め、当時の大石田4か村のほぼ全域を含むものとし、対岸から俯瞰する形で展示する。
2. パノラマ模型の大きさは東西250cm、南北130cmとし、縮尺300分の1で製作し、手前と後方の縮尺を変えたり、遠景を絵画で表現したりはしない。
3. 地形については、水平縮尺と垂直縮尺の比を1:2.1として立体感を強調する。
4. 寺院・神社等の堂社や役所は、それぞれ個別に製作するが、民家は商家4タイプ、一般町屋2タイプ、農家3タイプ、土蔵2タイプを基本的なタイプとして製作し、町割を基盤として、適宜組み合わせながら配置する。
5. 川船は、大中小3タイプとし、帆を張っているもの、まいているもの、積荷のあるもの、航行しているもの、港につないでいるもの等々、適宜配置する。
6. 人馬も製作、配置し、町のにぎわいを表現するようにする。

という方針をたて、製作を進めた。その後も、施工業者と緊密な連絡を持ち、不足資料を補ったり、本館職員が製作現場に赴いてチェックするなど、より正確なパノラマ模型の製作をめざした。

なお、BGMについては、今日一般に流布している「最上川舟唄」ではなく、元唄ともいふべき舟唄を選び、船宿の家に生れ、何度か船で酒田まで往来して、船頭から直接この舟唄を習ったという、新庄市本合海在住の加藤喜平治氏（当時76才）に歌ってもらい収録した。

5) 農家のいろりばた

第二展示室の「米づくりのくらしとところ」の中の「農家のいろりばた」のコーナーは、旧展示の民家を移設したものである。

旧展示の民家は、約300年続いた飯豊町中津川地区の民家を昭和45年に調査し、山形市成沢地区の民家の解体材を利用して、ざしきを中心にその一部を再現したもので、展示室のスペースの関係から、台所やお（土間）をはじめ全般的に間づまりになっている。

新展示では、方向を変えて移設し、「米づくりの一年」の中の小正月に位置づけた。なお、いろりばたの着座等の名称は、山形市村木沢地区の呼称によった。

7. アテンションゲッターとエピソードコラム

(1) アテンションゲッター

第一展示室「豊かな自然とそのめぐみ」では、各コーナーの導入部に、そのコーナーの中心的課題を象徴する資料を、特製の展示台に展示して、観覧者の注目をひき、興味や関心をいだかせるとともに、疑問をなげかけようとした。

これをアテンションゲッターとよび、ヒトデ化石（レプリカ）、イヌワシの剝製、オサガメの剝製の3資料を配置し、解説文も他と異なる散文詩風にした。

ヒトデ化石は「山から出たヒトデ」のテーマの下に「……なぜ、海にすむヒトデの化石がこんな山中からでてくるのでしょうか。……化石や岩石などを手がかりにして、“山形のなりたち”をさぐってみましょう。」との解説を付し、「山形の

なりたち」の導入としている。

イヌワシは「鳥の王者イヌワシ」として「森林の科学」以下の、オサガメは「庄内海岸にくる南のカメ」として「暖流と雪の山形」の導入とし、それぞれ自然のしくみや環境と生物との関係を理解するという、テーマのねらいを示している。

(2) エピソードコラム

展示資料の中から、展示テーマに沿って特に興味ある資料を選び出し、解説コピーや図等の情報も盛り込むことのできる特製の展示台を利用して展示したものである。

第一展示室では、ソロバン玉石、田川の魚化石、ナウマン象の化石、美しい鉱物－誕生石、昆虫のチェーミツバチ、テンサラバサラの6件で、いずれも標本資料を展示した。

第二展示室では、「縄文人のねがい」「古代農民の足あと」「平和を願う人びと」「駒姫」「芭蕉」「古鏡と鏡池」の6テーマとし、釜淵遺跡出土土偶（重要文化財）、山辺条里遺跡出土足跡、石行寺大般若経第百卷（県指定有形文化財）、駒姫辞世幅、五月雨歌仙（県指定有形文化財）、羽黒山鏡池出土銅鏡（重要文化財）を展示した。ただし、資料の性質上、実物資料の展示は無理で、複製資料の寄贈を受けた五月雨歌仙および、カラー写真の展示にとどまった駒姫辞世幅を除き、レプリカを作製し、展示した。

8. VTRとロータリービジョン

(1) VTR「日本列島のおいたち」

「山形のなりたち」の前に、VTR「日本列島のおいたち」を設置して、山形の大地のおいたちの理解の便をはかった。

古生代より、ほぼ日本列島が今日の姿を呈するようになった約1万年前までの日本列島のおいたちを、古地理図やイラスト等を利用して簡潔に解説したもので、鳥海山噴火の空撮を取り込んだり、ナレーションで、朝日・飯豊連峰の形成や、グリーンタフ・亜炭の形成等、山形の地史の特徴的な事象を日本列島の地史に位置づける様にした。

シナリオの作成は施工業者の担当デザイナーやディレクターをまじえた学芸員会議で行ったが、

時間、内容、表現方法等について、しばしば、学芸員と施工業者の意見が対立した。ほぼ学芸員の考えを通したが、これが、展示改装工事全体を、学芸員＝博物館主導で進めることができた分岐点となったように思われる。

ただ、当初、3～4分間を考えたが、内容豊富で、結局6分10秒余となり、長過ぎの印象はまぬがれない。

② 「紅花歳時記」ロータリービジョン

第二展示室の「藩政と庶民の暮らし」の中の、「生産の高まり」のコーナーでは、紅花をとりあげてその生産・流通について詳説した。紅花は、江戸時代、村山地方を中心に各地で栽培され、その生産高は全国の過半を占めて山形の経済をささえる重要な産物であったからである。

このコーナーの中心をなすロータリービジョンでは、東根市の武田陽氏所蔵の「紅花絵巻」から「種まき」、「花つみ」、「花餅づくり」、「紅花の船積み」等11場面を選び出し、ほぼ原寸大で表現した。

当初、左右に動かして「紅花絵巻」全巻を盛り込むことを考えたが、機器の都合で上下に動く方式を採用せざるをえなかった。また、詳細な解説を盛り込んだナレーションを入れることも考えたが、約4m離れたところにBGMを利用した「大石田河岸」パノラマ模型があり、音響の重複が確実にみられたので、ロータリービジョンでは、画面にスーパーを入れるにとどめた。

9 解説文(コピー)の作成

解説パネルの解説文(コピー)は、メインコピーとサブコピーからなっている。メインコピーは小学5年から中学1年までの児童生徒が理解できるように、さらに、メインコピーのみによってテーマの概要を理解できるように考慮して作成した。また、全国的、全日本的な位置づけから書きおこし、山形の特性を盛り込むことにつとめた。

サブコピーは、メインコピーより内容を深めたものとし、分布図や写真・図表等の解説を主体としたものもあり、より深い理解に役立つように配慮した。

解説パネルのコピーはもちろん、ラベルに加えたコピーも、全学芸員が検討に参加し、テーマ担当者以外の理解にベースを置いて作成した。

10 ラベル(ネームプレート)

第一展示室のラベルは、横9cm、縦4cmの大きさ、白地に黒文字のラベルに統一し、上段に資料名(和名)、中段に学名、下段に採集地名を記載した。資料所蔵者名は、当初、展示室の一角に協力者一覧表を掲示する計画があり、ラベルには入れなかった。

一方、第二展示室および第三展示室のラベルはA・B・C・D・Eの5タイプとした。

Aタイプは、横9cm、縦4.5cmの大きさで4段に分け、上から、資料名、時代・年代、収集地名、所蔵者・寄贈者名を記載した。Bタイプは横9cm、縦6cmで、Aタイプの下に2行(30字)以内の解説を加えたものである。Cタイプは横12cm、縦9.5cmで、Aタイプに5行(100字)以内の解説を加えたもの、Dタイプは横24cm、縦9.5cmで、Cタイプの右側に図解や写真・古文書の読みなど、よりくわしい情報を加えたラベルである。最も基本的なAタイプに加えて、解説情報の多少によりB～Dタイプをつくったものである。

以上のほか、同一遺跡から出土した考古資料等の一括資料については、A～Dタイプのラベルを用いて一括解説し、さらに、各資料名のみをラベルを付した。これがEタイプで、横6cm、縦1.5cmである。

A・B・Eタイプは黒地に白ぬき文字、C・Dタイプは白地に黒文字のラベルである。黒地に白ぬき文字のラベルは一見重厚であるが、見えにくいことが欠点である。

VII 問題点と今後の課題

(1) 動線について

予算の関係で、旧展示の常設展示ケースをできる限り改装しない方針で動線を考えたため、見返しの動線、袋小路的な順路ができて、意図した動線に沿って見学しない観覧者がある。例えば、第一展示室(自然部門)の出口から第二展示室への

大きい動線であるが、第一展示室の入口から出て第二展示室を逆順路を辿る見学者がいる。また、テーマに沿って展示しているが、第一展示室では、「鳥の渡り」、「鳥のなかまわけ」のコーナーの鳥展示、「森林の科学」の見返しの展示になっている「植物の世界」、第二展示室では、「出羽国の古社寺」が「ひらかれる出羽国」の見返し、「山形の人物」が「河岸の町大石田」の見返しなど、死角的なコーナーになった。

しかし、観覧者に対して、テーマに沿って全部の展示物・解説文を見てもらうという狙いが必要かどうかについて論議された。観覧者が学習の目的を持ち、テーマ毎に学習できる展示である必要もある。

本館の展示替は、狭い既存の展示空間を利用しなければならぬ物理的な条件のため、すべての課題を満すことはできず、妥協できる点を見出す議論であった。

(2) 資料の退色・劣化について

資料の退色、劣化については、基本的に、資料の保存と展示公開の両立を考えなければならないのは当然である。展示資料の更新の立場を優先的に展示内容を検討したが、資料の退色・劣化の恐れのある貴重なコレクション資料については展示をひかえた。

魚の液浸標本やキノコの液浸標本は劣化がはげしいが、退色に対応した収集は困難で更新ができないものや、漆器類などの劣化のはげしいものは、レプリカの展示を考えざるを得なくなっている。また、鳥の剥製標本のように収集不可能なもので、レプリカ作製の困難なものもあり、今後の大きな課題となっている。

カラーコルトンの退色については、2～3年毎の更新を考えたが、業者撮影の写真、版權購入の写真、本館撮影の写真などがあり、手続き上、予算的な措置などの問題があり、当初の計画のように進んでいない。

パネル中のグラフィックの退色については当初あまり予想しなかったが、汚れ、退色が見られるようになり、新たな問題点として生じている。

(3) 借用資料の展示について

当初の予算の都合で資料の複製化ができなかつ

た展示資料については、借用資料の展示をせざるを得なかった。特に、人文部門の展示資料に借用資料が多い。借用期限が1年のため、借用の更新手続きが煩雑である。本館では、寄託制度が確立していない点も大きな障害になっている。

借用資料については、今後複製化、寄託制度の確立が急務である。

(4) 照明について

基本的には、第一展示室（自然部門）は、展示ケース内、フロア共に明るく、第二展示室（人文部門）は、展示ケース内を明るくする方針で展示した。当然、照明については、展示効果と資料の保存とは相反するものであるが、資料の退色、劣化の項でも述べたとおり、資料の展示効果を考え、スポット照明を多く取り入れ、展示資料は可能な限り展示替する方針をとった。

しかし、資料の展示替は、ラベルの交換、解説文の交換なども伴い、容易にいかないのが現状であり、一部、照明をおとしている部分もある。

(5) 音響、映像器機について

ビデオコーダー、ロタリービジョン、8トラックテープレコーダーを使用しているが、当初、器機のトラブル、テープの更新は考えていたが、セットの器機のメーカー不統一や地元業者の修理不可能、メーカーの製造中止など、器機全部の交換を検討せざるを得ないものが生じてきている。

スイッチもタッチ式、センサー式があるが、トラブルの多い部分である。ハードな面、ソフトな面において、館自体、地元業者による修理可能な器機を選択など、アフターケアについては十分検討が必要である。

(6) 今後の展示替について

展示替後の情報の変化、新資料の収集、資料の退色・劣化に伴う展示替の必要性が生じてきている部分がある。

本館では、テーマ毎の常設展の展示替、新資料の展示、複製化を年次計画にもとずいて検討している。

展示改装による展示資料等一覧

		地学	植物	動物	考古	歴史	民俗	計
資 料	実 物	170	152	1932	308	97	515	3174
	複 製品	6	5	17	26	13	0	67
	模 型	4	0	0	3	2	0	9
	写 真	21	0	25	0	23	6	75
解 説 パ ネ ル		16	9	10	14	15	9	73
イ ラ ス ト パ ネ ル		13	0	0	9	1	0	23
写 真 パ ネ ル		5	3	15	1	7	9	40
ジ オ ラ マ 等		0	(1)	7	1	1	1	11

展示改装事業に係わった旧職員（敬称略）

館 長 （数字は在職年度を示す）

佐藤 信一（S. 49～50）

菅田 慶恩（S. 51～53）

遠藤 来二（S. 54）

鈴木 幹雄（S. 55～56）

副館長

鈴木 秀直（S. 49～50）

遠藤輝太郎（S. 51～53）

大場 義夫（S. 54～55）

業務課

村川 信夫（資料専門員 S. 46～54）

大友 義助（業務課長 S. 46～51）

吉野 智雄（業務課長 S. 46～57）

菅井敬一郎（研究員兼学芸員 S. 46～52）

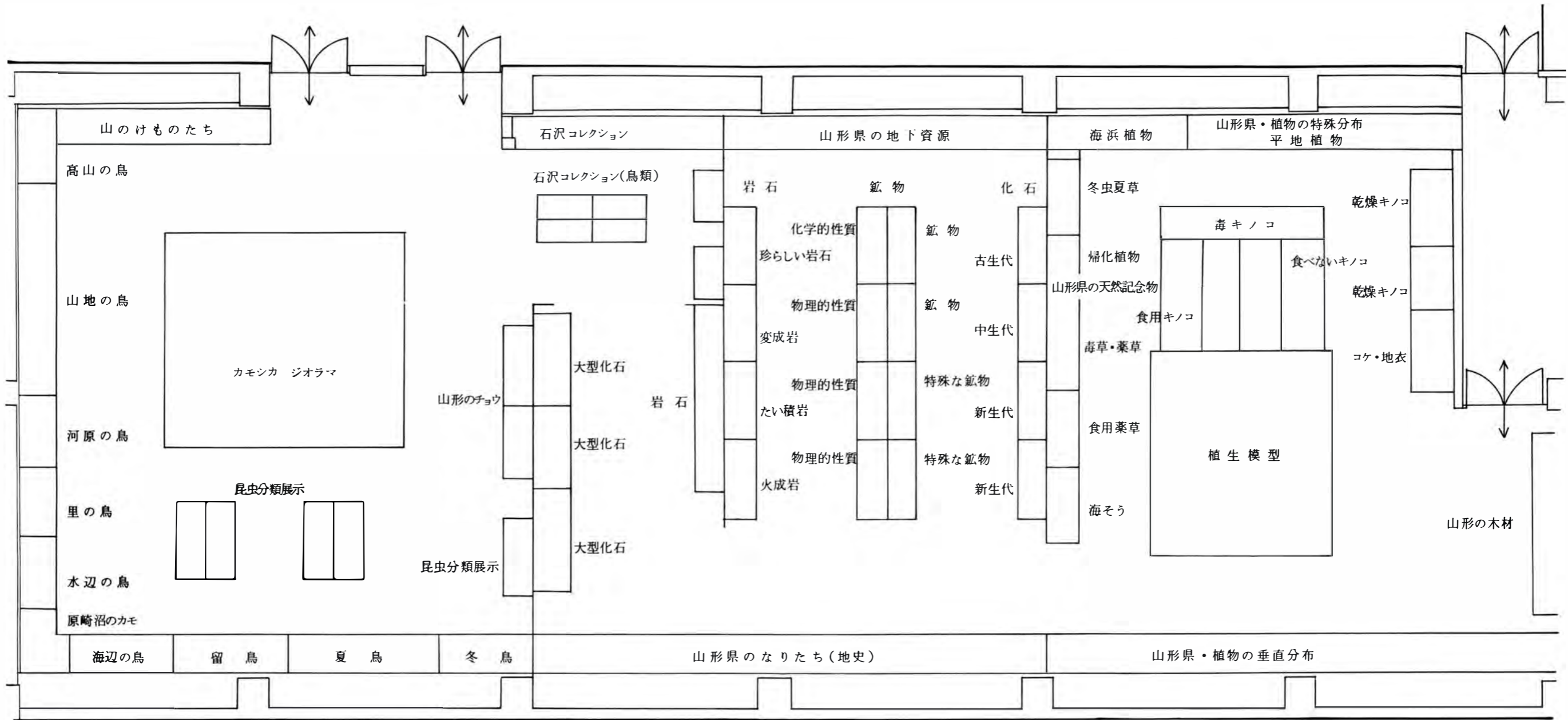
板垣 英夫（主任学芸員 S. 46～56）

佐々木洋治（学芸員 S. 47～52）

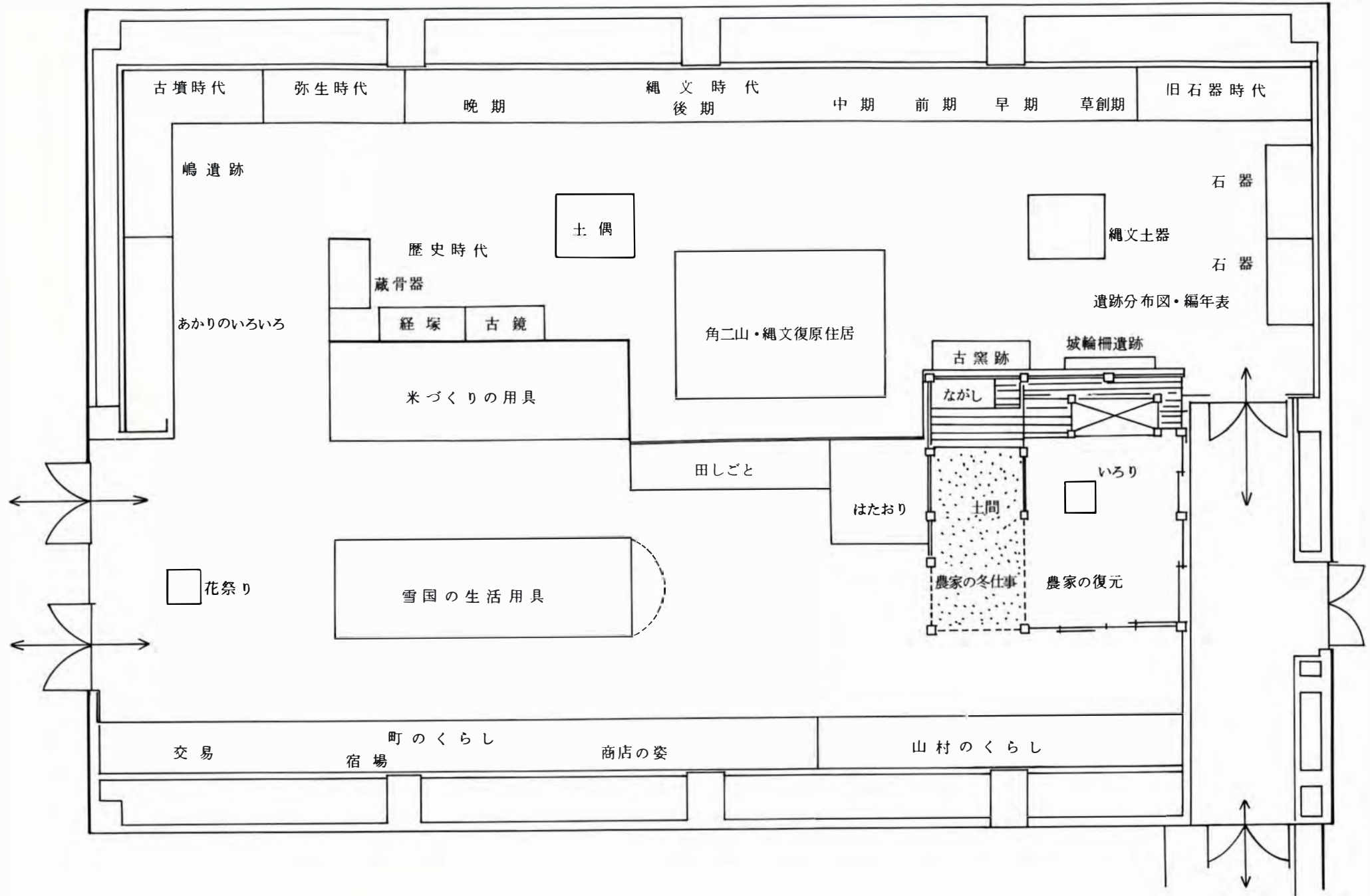
保角 里志（学芸員 S. 53～56）

図 版 お よ び 資 料

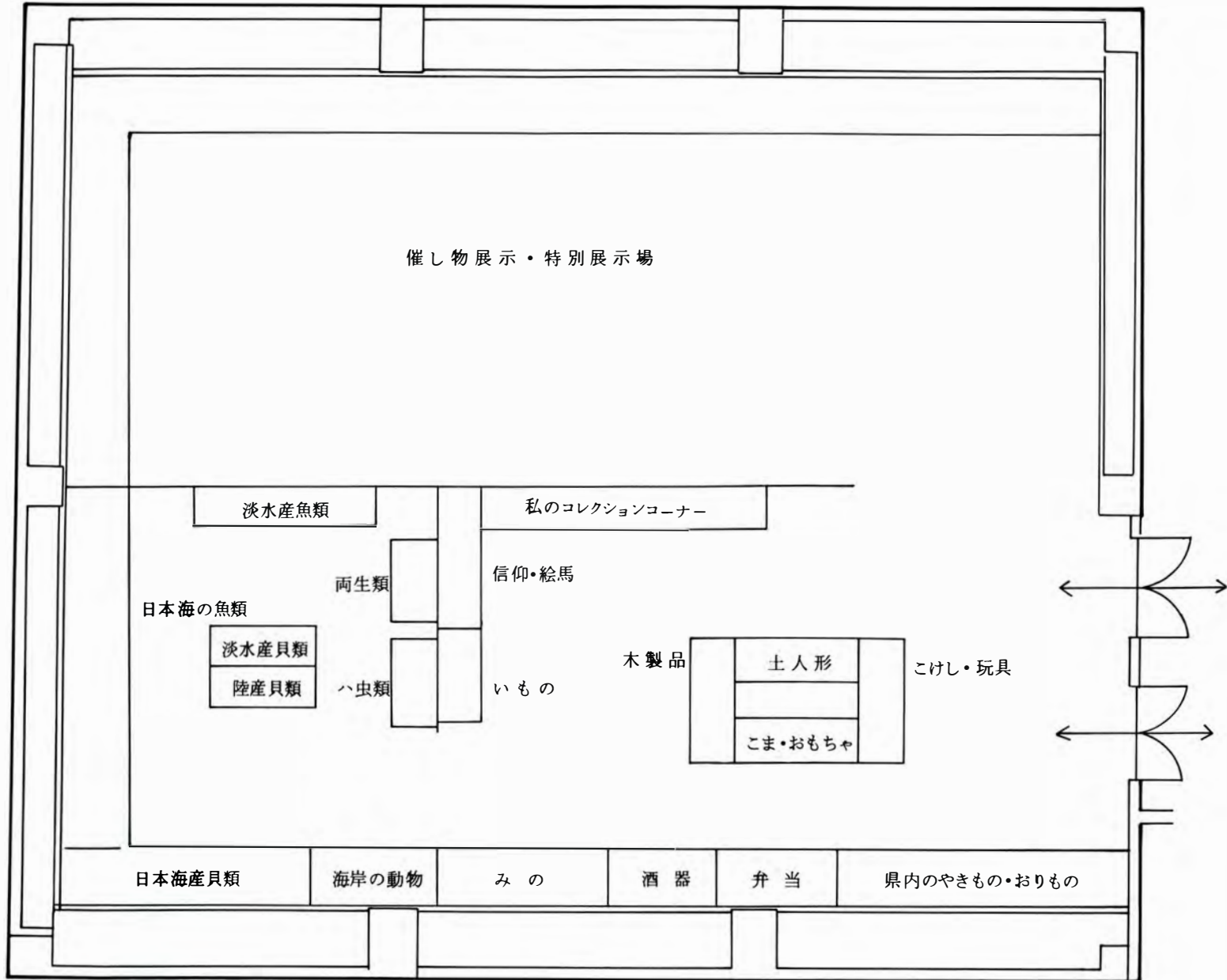
展示替前の第一展示室



展示替前の第二展示室



展示替前の第三展示室





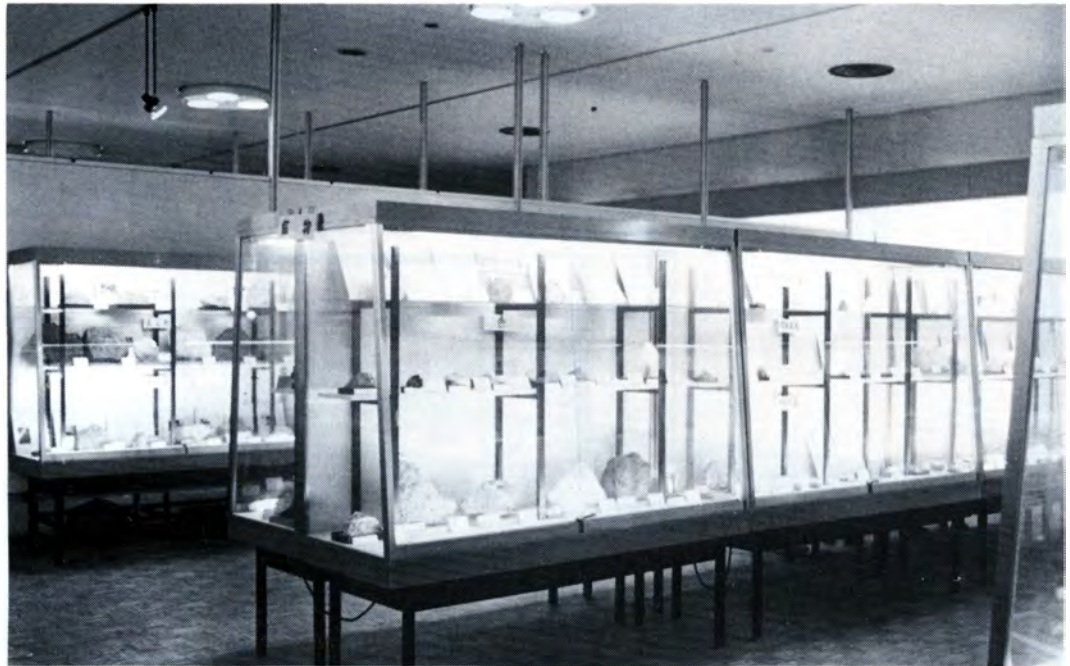
カモシカ (ジオラマ)



石沢コレクション (野鳥)



山形県の生いたち（地史）



鉱物の物理的性質



山形県の植物の垂直分布



キノコ（食用キノコ，毒キノコ，食べないキノコ）



縄文時代の土器



角二山 縄文復元住居



歴史時代（蔵骨器・経筒）



田しごと



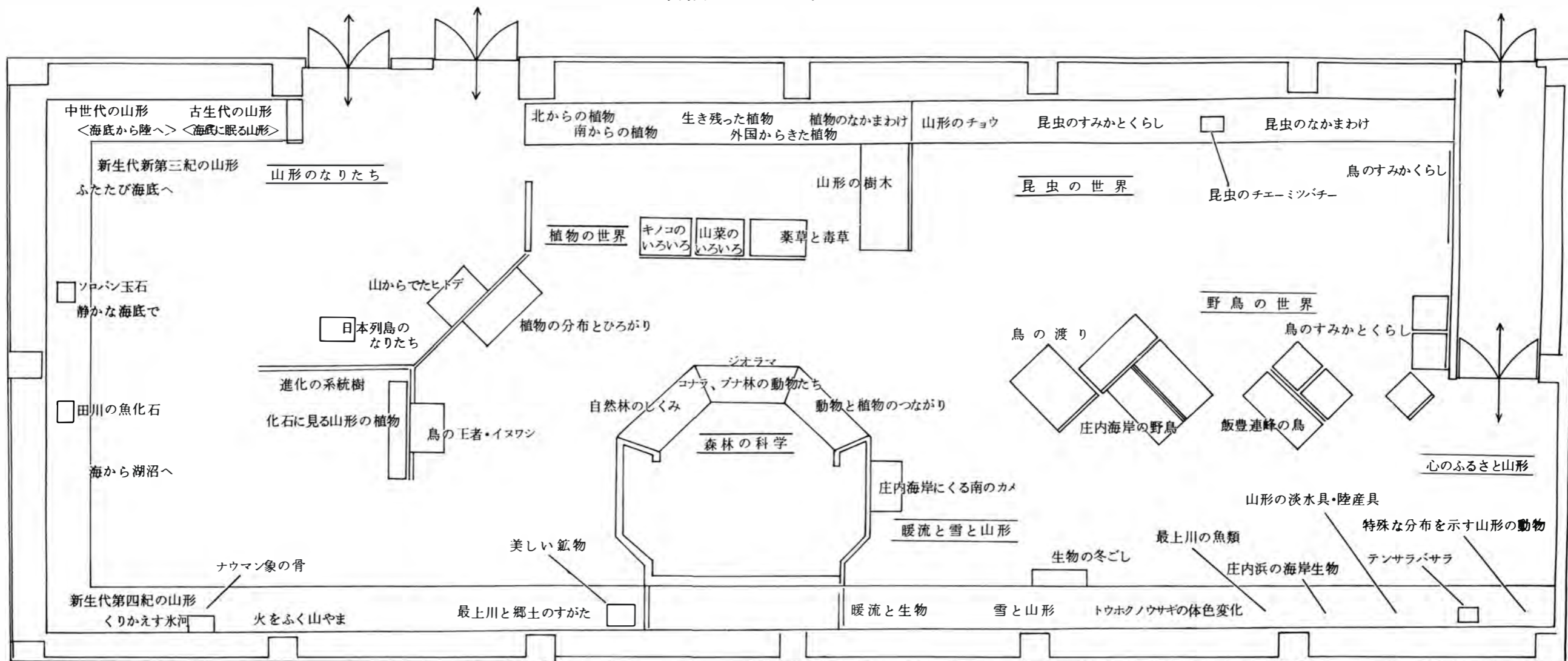
雪国の生活用具



木工木地もの

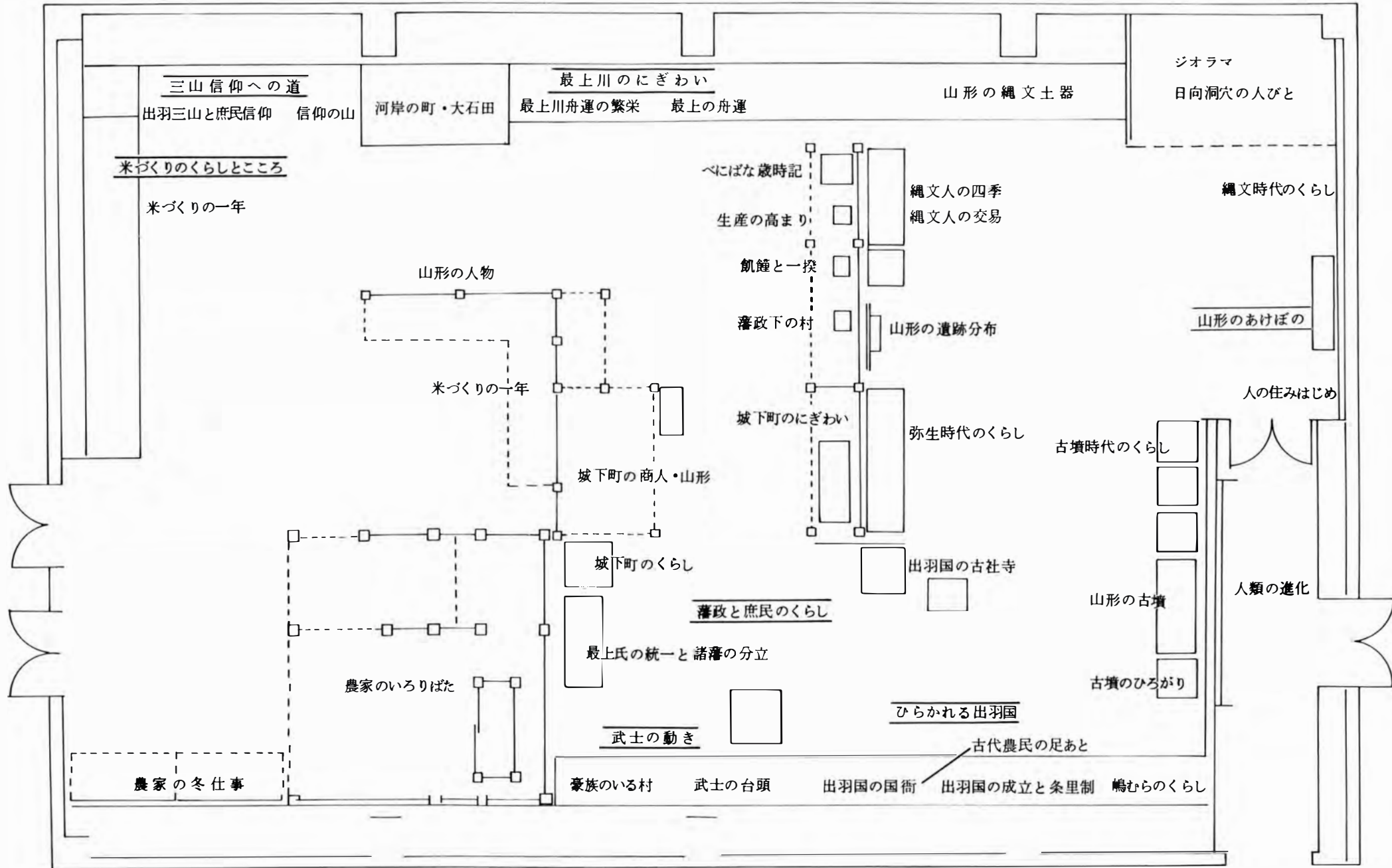
展示改装後の第一展示室(自然)

～豊かな自然とそのめぐみ～



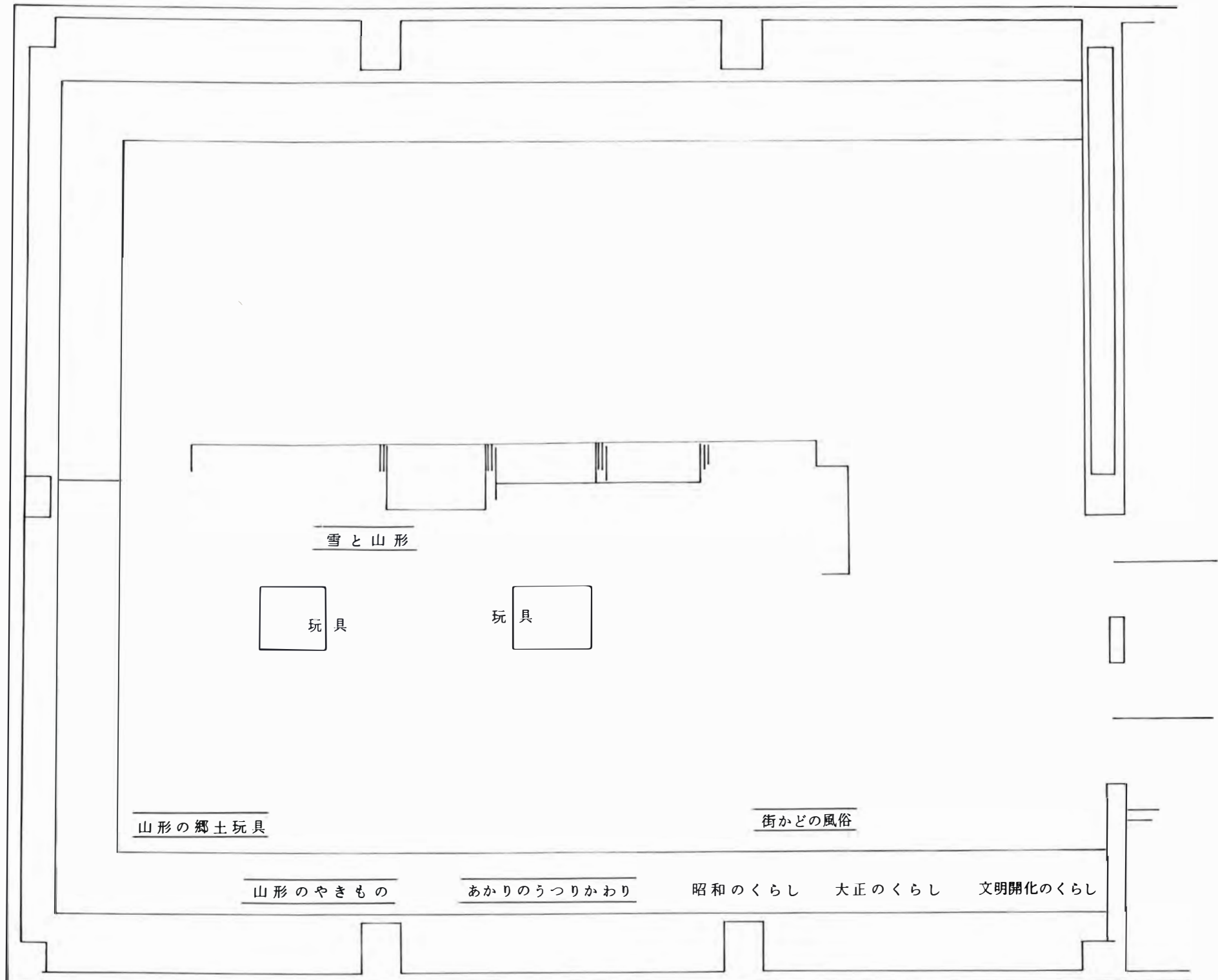
展示改装後の第二展示室(人文)

～山形の大地に刻まれた山形～



展示改装後の第三展示室

～近代山形 暮らしのうつりかわり～

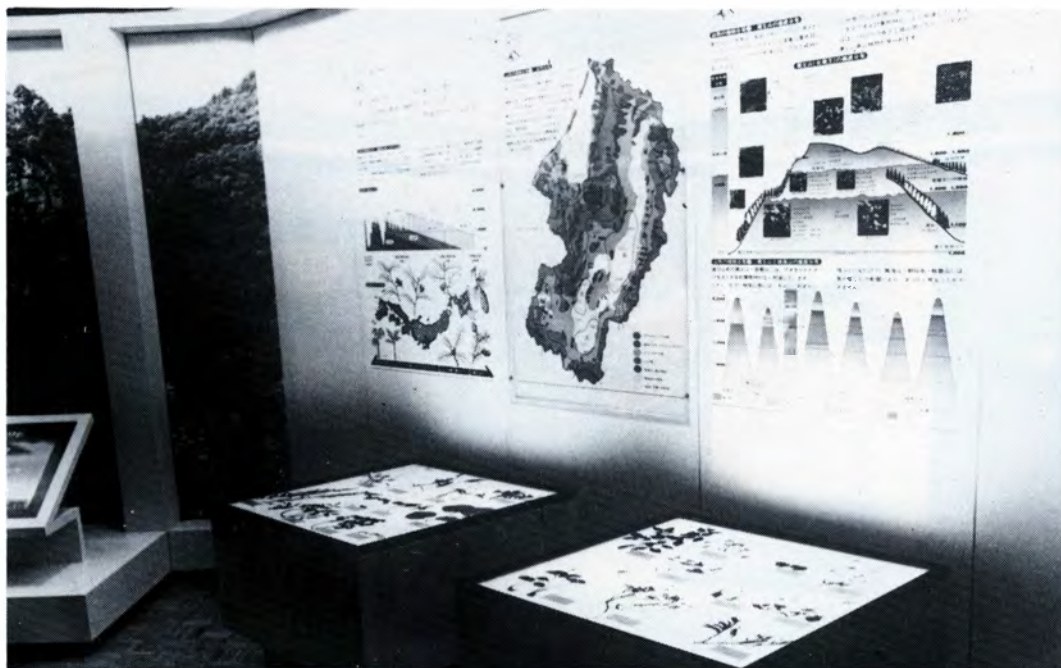




山からでたヒトデ（アテンションゲッター）日本列島のおたち



新生代の山形・くりかえす氷期（テーマ展示）



植物の分布とひろがり (テーマ展示)



キノコのいろいろ (分類展示)



森林の科学・コナラ・ブナ林の動物たち（ジオラマ）



鳥の渡り・冬にくる鳥（テーマ展示）



鳥のすみかとくらし 高山の鳥 (ミニジオラマ)



テンサラバサラ (エピソードコラム)



日向洞穴のんびと（ジオラマ）



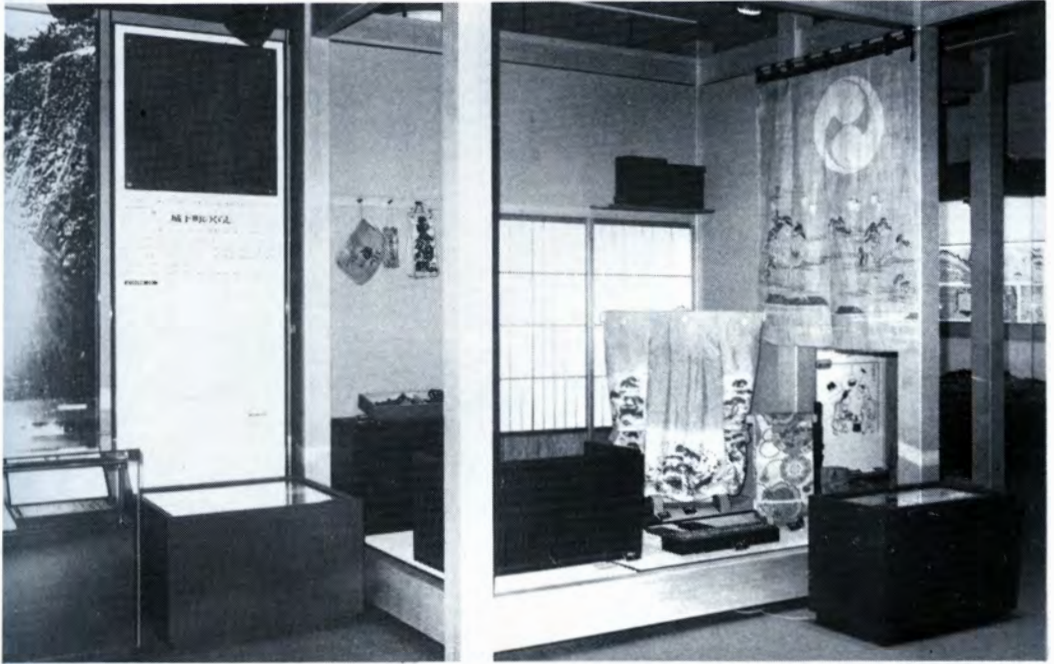
山形の縄文土器（テーマ展示）



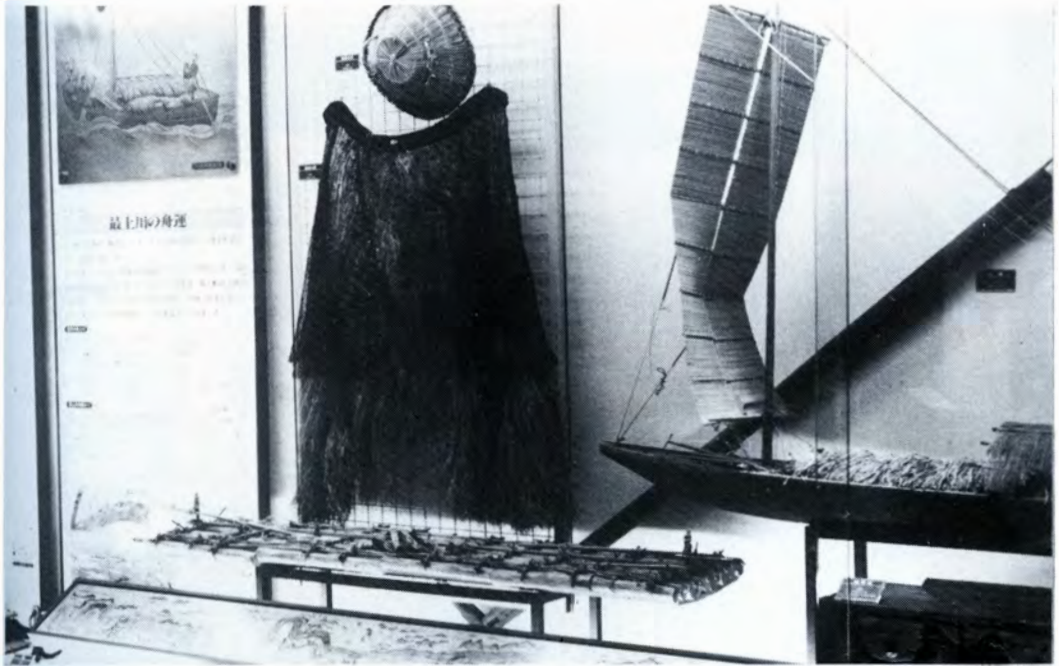
嶋むらのくらし・出羽国の成立と条里制（テーマ展示）



武士の台頭（テーマ展示）



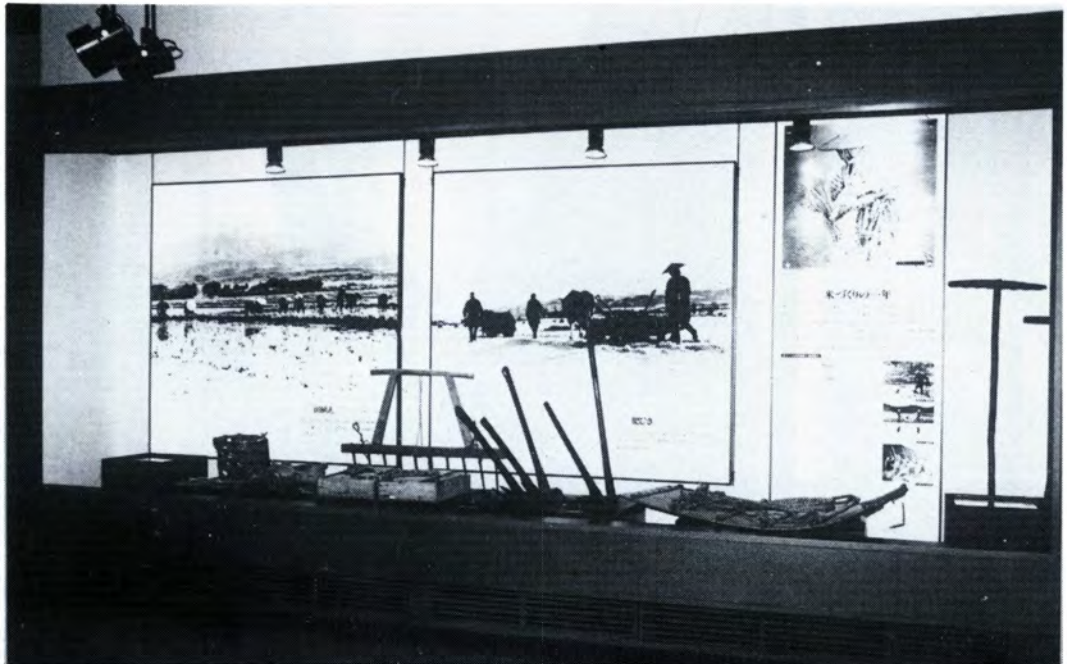
城下町の暮らし (テーマ展示)



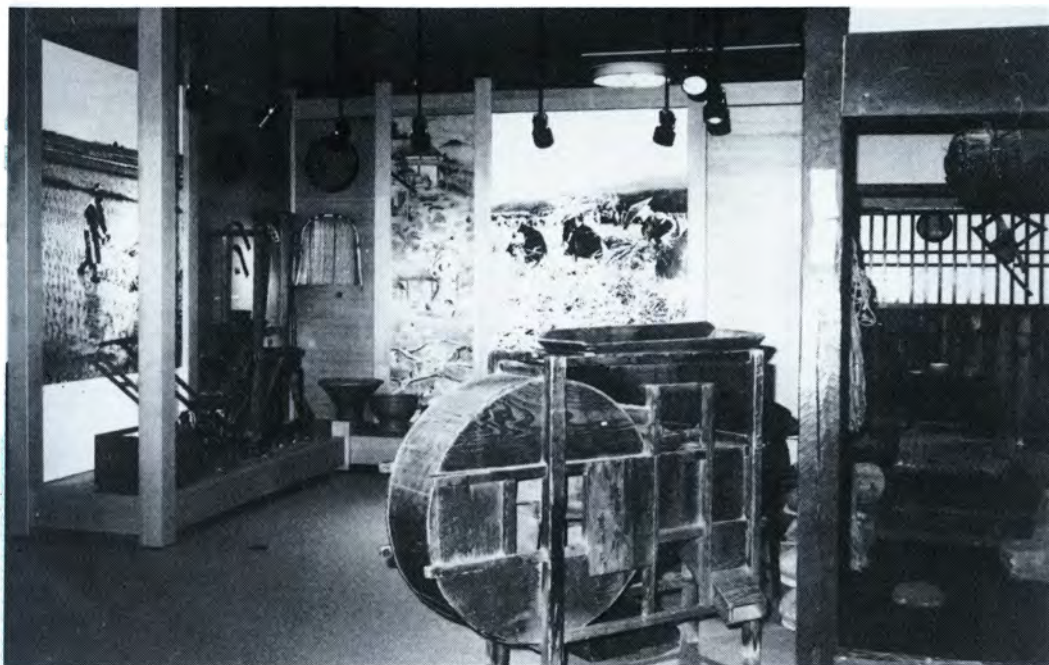
最上川の舟運 (テーマ展示)



河岸の町・大石田（パノラマ）



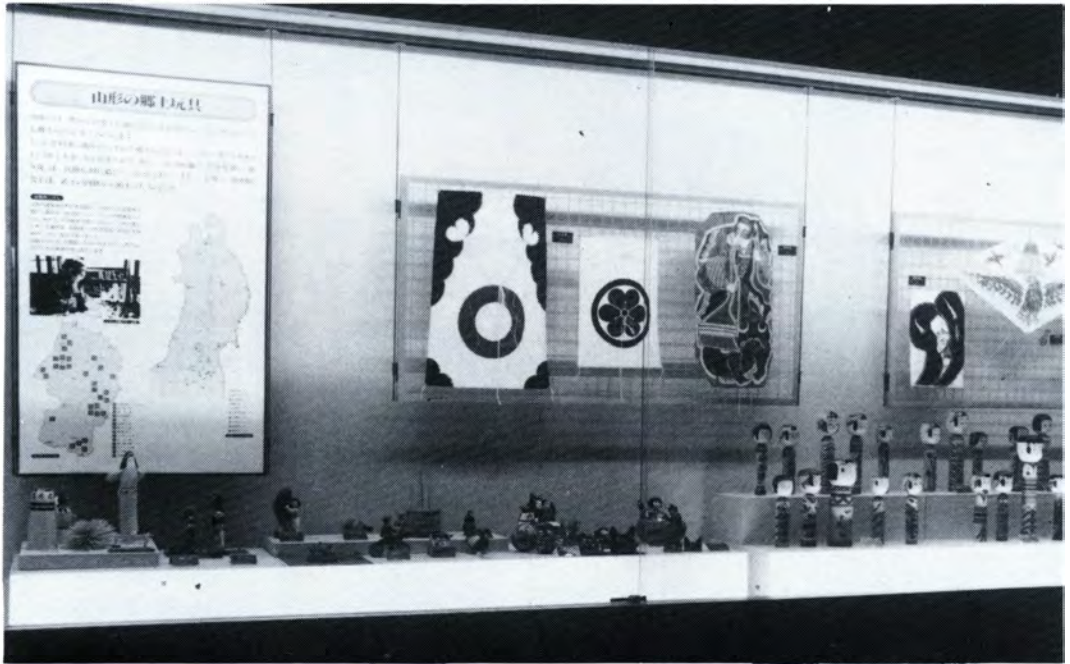
米づくりの一年（テーマ展示）



米づくりの一年（テーマ展示）



大正のくらし, 昭和のくらし（テーマ展示）



山形の郷土玩具



雪と山形

草木塔に関する文献資料

- 昭和二九、七 羽陽文化二十三号
 // 三六、一 浩良百話
 // 四一、一一 置賜文化三八号
 // 四二 置賜民俗一二号
 // 四七、四 毎日新聞
 // 四七、五 毎日新聞福島版
 // 四七 熱塩加納村史
 // 四七、七 置賜民俗記
 // 四七、八 毎日新聞「みちのく文化」
 // 四七、九 毎日新聞
 // 四九 やまがた植物記
 // 四九、一〇 羽陽文化一〇〇号
 // 五一、二 公論やまがた
 // 五一、六 置賜民俗五〇号
 // 五一、七 羽陽文化一〇四号
 // 五一、二 山形新聞「山形博物誌」
 // 五二、六 川西町自然を守る会だより
 // 五二、八 広報ながい
 // 五三、五 毎日新聞「みちのく文化」
 // 五三、二二 豊かな人生九号
 // 五四、七 山形新聞
 // 五四、二一 川西町史上巻
 // 五五、七 よねざわ豆本
 // 五五、八 毎日新聞
 // 五五、九 山形県林務だより
 // 五六、三 「しらかの歴史をたずねて」
 // 五七、一 山形新聞「おきたま博物誌」
- 緑化文化の草木供養塔
 川崎浩良―県内に残る草木供養碑
 佐藤忠蔵―草木供養塔
 木村 博―草木供養塔について
 無言の告発「一木一草にも魂」
 「草木塔」無言の訴え
 草木塔
 武田 正―樹霊信仰
 結城嘉美―草木塔をたずねて
 川西町の高橋さん―自然に感謝し草木供養塔
 結城嘉美―草木塔
 戸川安章―民俗資料の調査と集収
 大友義助―草木塔の謎
 大友義助―草木供養塔について
 戸川安章―草木塔管見
 小山田信一―伝える山林の愛護
 蔵田順治―川西町の草木供養塔
 川村吉弥―松の木供養碑
 上村良作―草木をまつる心
 長 俊英―草木塔に学ぶ
 緑保護の心後世に―草木塔を自費建立
 川西町の草木供養塔
 小山田信一―草木塔
 自然信仰の草木塔を見直そう
 杉沢唯一の古碑
 中山三十三観音入口の草木供養塔
 南陽の草木供養塔

草木供養塔

所在地 西置賜郡飯豊町字 高峰字毛下野
 建立年代 安永六年(一七七七)十月十日
 大きさ 高さ 九〇センチメートル
 幅 四五センチメートル



佐藤忠蔵氏の写真を複写
 (昭和35年4月18日調査)



毛下野^{けげの}は白川ダムから六キロメートルほど下流、白川右岸の集落であるが、昭和四十七年調査に訪れ、部落南方約一キロメートルの山中の路傍で石塔を発見し、佐藤忠蔵氏の手記中にある写真と照合して、その形、大きさから、それに該当するものと判断したが、この石面には全く刻字らしい形跡が認められず、これにより沿って建つ「大乘妙典供養塔」には明らかに「安永六年十月十日」が刻まれている。一方佐藤忠蔵氏の手記中にある写真は、その文字がいかにも不自然であり、これを草木供養塔とすることは大いに疑問である。若しこれが実在するとすれば、年代的に最古のものとなる。

草木供養塔

所在地	西置賜郡飯豊町大字高峰字洗尾(廃村)
建立年代	不明
大きさ	高さ 六〇センチメートル 幅 二七センチメートル
材質	厚さ 一〇センチメートル 不明



佐藤忠蔵氏の写真の複写
(昭和34年9月17日調査)

洗尾は白川ダムのダムサイト近くにあつて水没した大鹿から西方山地へ約一キロメートル入った小集落であつたが、昭和四十七年五月に訪れたときはすでに廃村となつていた。

この塔は佐藤忠蔵氏の調査を基にして書かれた川崎浩良氏の「浩良百話」(昭和三十六年)中、県内に残る草木供養碑の「一八、草木供養塔 豊川村高峰」に当るものであり、佐藤忠蔵氏の手記にも明記されているが、探すことができず、佐藤手記にあつた写真(複写)を見ても不明確であつて果して草木供養塔であつたか、疑わしいものがある。



昭和47年5月24日
三軒の住居は解体され無人境となつていた。

⑩ 大杉碑



所在地 上山市阿弥陀地（阿弥陀堂境内）
 建立年代 明治三十六年（一九〇三）旧六月十五日
 大きさ 高さ 一九七センチメートル
 幅 二八センチメートル
 厚さ 二〇センチメートル
 材質 石英粗面岩の竿石

阿弥陀堂の境内で公民館のすぐそばに建っている。その由来はくわしく碑に刻まれている。碑面正面には「大杉碑」と大字が刻んであるが、

（右側面）

惟大杉由来数百年榮於慈樹靈依哉弥陀大杉
 而明治三十五年九月廿七日未曾有為暴風雨僵
 矣其周圍二丈四尺高十五丈余記念俾刻於石

（左側面）

明治三十六年舊六月十五日建之

石工 武田小吉

（裏面）

當字中（六名） 世話人（十二名）の名を刻む。



⑨ 大杉碑



所在地	西置賜郡白鷹町大字山口字越場
建立年代	明治四十二年(一九〇九)三月二十一日
大きさ	高さ 八四センチメートル 幅 四八センチメートル 厚さ 二三センチメートル
材質	砂岩、表面少しく加工



どんない様(山の神)の石造の小祠の前に建っている。
 古老の語るところ、どんない様の前に杉の大木があった。大正の頃伐り倒して売り払った。その時根元の洞穴から白い蛇が出たという。村人は神の使いだ、崇られては大変だと相談して、杉の伐り跡に大杉の碑を建てたというが、年代が一致していない。
 碑面には「大杉碑」の大文字と、右側に「明治四十二年三月二十一日建立」左側下方に「大瀧正覺」とある。

⑧

植立杉供養塔

所在地

米沢市大字入田沢字大荒沢

(大荒山不動尊の境内)

建立年代

明治三十二年(一八九九)八月

大きさ

高さ 九〇センチメートル

幅 五八センチメートル

厚さ 三七センチメートル

材質

安山岩の自然石



大荒山不動尊の境内であるが、社殿が近年右方高台に移築されたので、碑は元のまま旧社殿跡地の前左側に建つ。

碑面中央には「奉納 植立杉供養塔」左下方に「氏子連中」とあり右側面に「明治三十二年八月」と年号を刻む。

なお、台座には、発起人として多くの人名を刻んであるが判読が困難である。

⑦ 松木塔



材	質	安山岩の自然石
所在地	上山市狸森	
建立年代	万延元年（一八六〇）九月	
大きさ	高さ 一一〇センチメートル	
	幅 六九センチメートル	
	厚さ 二四センチメートル	

山元小中学校の少し手前（東方）旧道北側の磨崖佛の前に、湯殿山、犬供養塔などと共に無造作に建てられている。

碑面には中央に「松木塔」の巨大な字が掘られ、その右側に「萬延元庚申年」左側に「九月吉祥日」とある。



松木塔の前にあるのが「犬供養塔」

⑤ 大杉大明神



材	質	凝灰岩	加工	墓石形加工
所在地	南陽市竹原寺坂峠			
建立年代	嘉永七年(一八五四)三月			
高さ	六〇センチメートル			
幅	三二センチメートル			
厚さ	一五センチメートル			
大きさ				

⑥ 大杉大明神



材	質	凝灰岩	加工	加工
所在地	南陽市竹原寺坂峠			
建立年代	不明			
高さ	五五・五センチメートル			
幅	四三センチメートル			
厚さ	一八センチメートル			
大きさ				

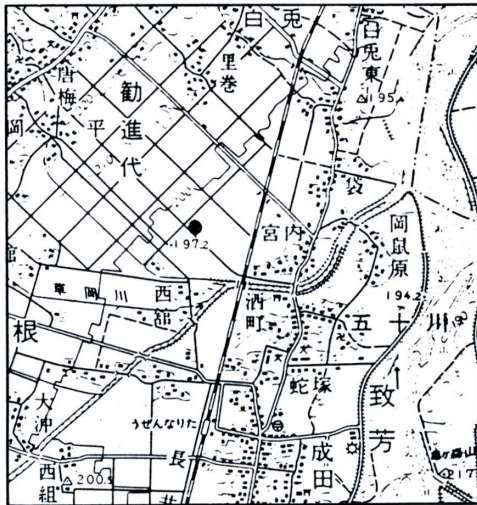
梨郷駅の近くから北へ土平に通ずる道を約一・五キロメートル行つた寺坂峠の旧道ぞいの杉の老木(一本杉)の根方にある。

⑤の碑面には、正面に「大杉大明神」「先祖代々供養」の二行が刻まれ左側面に「嘉永七寅三月吉日」とある。

⑥は中央に「大杉大明神」左側に「土屋運四郎」は明らかであるが、右側の年号は磨滅して読みとれない。

④ 松之木供養 明覚院法師

所在地 長井市五十川字野際（お薬師様境内）
 建立年代 文政八年（一八二五）三月
 大きさ 高さ 六〇センチメートル
 幅 二六・三センチメートル
 厚さ 一八センチメートル
 材質 凝灰岩、墓石形に加工



古老の話によると、ここ野際から勤進代平まで続いた松林があった。それが年と共に伐られてしまったが、その古根を掘り起して細かく割ったものや鯉節のようになった松やが夜の灯火であった。またそれを売って暮しの足しにしたので、松の木に感謝しその霊を供養するために明覚院法師を導師としてこの碑を建てたと伝える。

この碑は、もと五十川の字若柳と野際を流れる十ヶ沢にかけた下新堀の渡し樋の北約六〇メートルの田の中にあつたものを、出来ヶ沢改修工事のとき野際の薬師堂の敷地に移され、さらに昭和五十年薬師堂を移転したので碑も一しょに移したものである。

碑面には、中央に「明覚院法師」右側上方に「松之木供養」を刻み右側面に「文政八酉三月吉日」とある。

3 大杉大明神

所在地 山形市大字津金沢字熊野堂

(熊野神社境内)

建立年代 文化十三年(一八一六)十二月

大きさ 高さ 一四二センチメートル

幅 五〇センチメートル

厚さ 四〇センチメートル

材質 安山岩の自然石



熊野神社社前左側にある。伝えるところによると、昔境内には杉がうっ蒼と繁り中でも雌杉、雄杉と称する巨樹が見事であった。雌杉は今に残っており、「津金沢の大スギ」と称して山形県指定天然記念物になっているが、西方の一段高いところにあつた雄杉は、一部の村民によつて営利の為に伐採処分された。ところが間もなく村内に疫病が流行したので神罰の致すところこの碑を建て雄杉の霊を慰めたものという。

碑面には「大杉大明神」と大きく刻み、左側面に「文化十三丙子年十二月□日」右側面に詳でないが、「慈運□」とある。ところが、裏面に「弘化二乙巳年 月 日 敬立之」「当村若者中」「開眼導師大先達 知教法印」とあるので、この碑の建立年代を弘化二年と記したのもあるが、あるいは建立後三十年を経た弘化二年に改めてお祭りをし裏に刻んだものではないかとも考えられる。

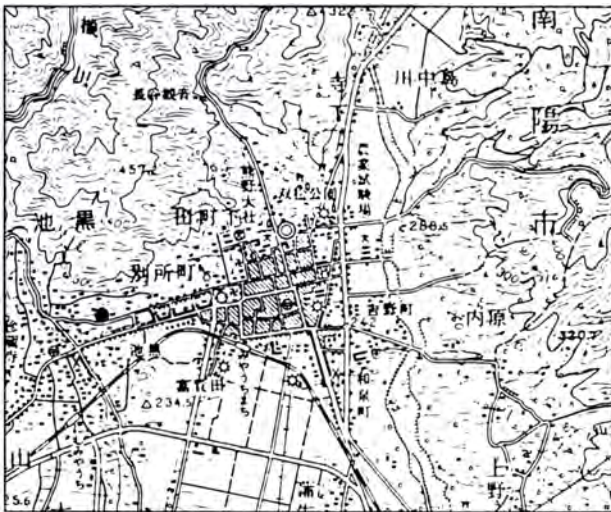
② 大木大明神



所在地 南陽市池黒
 建立年代 文化十二年（一八一五）七月六日
 大きさ 高さ 一〇六センチメートル
 幅 四五センチメートル、底部
 四九センチメートル
 厚さ 三〇センチメートル
 材質 凝灰岩、表面加工

池黒の川合輝男氏の所有地に建っており、ケヤキの大木を供養したと伝えている。基部近くから折れ倒れていたものを修復した形跡がある。

碑面には中央に「大木大明神」その右側に「文化十二乙亥天」左側に「七月六明日」と独得の刻字が明瞭である。

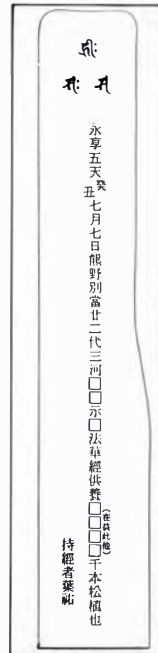
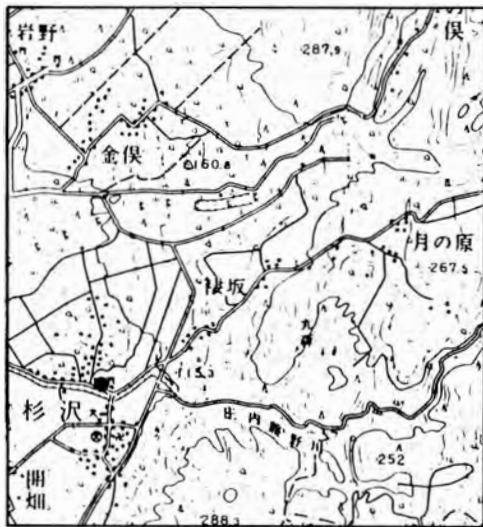


① 杉沢の板碑



所在地 飽海郡遊佐町大字杉沢字上田本
 建立年代 永享五年(一四三三) 七月七日
 大きさ 高さ 一六五センチメートル
 幅 七〇〜五〇センチメートル
 厚さ 三二センチメートル
 材質 安山岩質加工

杉沢部落の熊野神社の南、墓地の一隅にある古い板碑で、昭和三十四年福応寺那須担導師によつて次のように解説された。法華経供養のためにたくさん松を植えたその記念碑ともいべきもので、年代的にはかけ離れて古く他の草木塔との連係は考えられないが、一応草木塔類似のものとして記載した。



⑤⑥ 草木塔



所在地 福島県耶麻郡熱塩加納村赤崎
 建立年代 安政六年（一八五九）六月六日
 大きさ 高さ 七六センチメートル
 幅・厚さ共に四六センチメートル
 材質 不明 墓石形に加工

赤崎部落の北端金屋部落にくいこんだ所の小学校庭の一隅で県道ぞいにあるが、もとは熱塩温泉への旧道沿いに建てられていたもので、いつの頃か今の県道沿いに他の石碑と共に移されたものである。伝えるところによれば、昔赤崎部落に甚三郎という樵（こぎ）が住んでいた。いつしか年老いて隠居の身となつたが、長い人生をふり返つて「長い間木を切ることを生業として過してきたが、いくら仕事とはいえ育ち盛りの若木から何百年を経た老木まで何千何万という樹木の生命を断つた。自分は何と罪深いことをしてきたか」とこの塔を建てて木々の霊を供養したという。

現在山形県以外の地にある「草木塔」はこれが唯一基であるが、この地は山形県境まで十数キロメートル、隣接する旧中津川村とは山道によつて交流のあつたところで、その関連によつて建立されたものであることは明らかである。

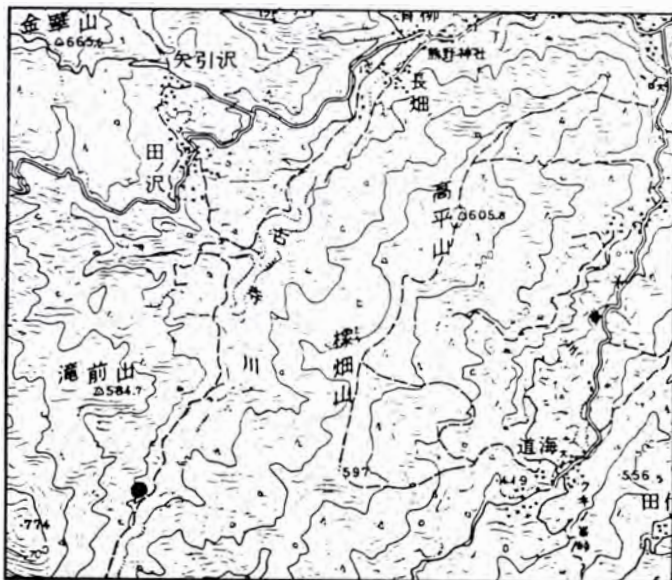




⑤7 草木供養塔

材	質	花崗岩加工
所在地	西村山郡大江町柳川	
建立年代	昭和十五年(一九四〇)	
大きさ	高さ 一七〇センチメートル	
	幅 中央部八〇センチメートル、	
	底部六五センチメートル	
	厚さ 五三センチメートル	

青柳部落から月布川溪谷ぞいに古寺への道を約五キロメートル進んだ路傍に建てられている。
 碑面には中央に「草木供養塔」その右側に「紀元二千六百年記念」左側下方に「柳川山林組合」とある。



⑤⑥ 草木塔

所在地 東置賜郡高島町大字上和田字太田
 建立年代 明治九年（一八七六）八月八日
 大きさ 高さ 九〇センチメートル
 幅 六二センチメートル
 厚さ 五〇センチメートル
 材質 安山岩で表面加工



葡萄園の一隅であるが「右山道、左もにわ」の追分石のある旧道のわかれにある。

碑面には中央に「草木塔」右側に「明治九年八月八日」左側に「入會村」と⑤⑤と同様の文字が刻まれている。またその背後にある台座の側面には「世話人金子仁三郎 金子文右エ門 金子徳右エ門、石工 我妻喜惣兵工」の名がある。

なお、この塔のそばに単に「草木塔」と刻んだ高さ三五センチメートル、幅一一センチメートル、厚さ五センチメートルの小さな塔が立てかけてあるが年代は不明。



左側に小さな「草木塔」右側に台石

⑤⑤ 草木塔



材	質	安山岩の自然石
所在地	東置賜郡高島町大字上和田字太田	
建立年代	明治九年(一八七六)八月八日	
大きさ	高さ 一〇〇センチメートル	
	幅 四八センチメートル	
	厚さ 四〇センチメートル	

釣堀のそばの葡萄園の一隅に倒伏したまま放置されている。

碑面には「草木塔」その右側に「明治九年八月八日」左側に「入會村」とあり、左側面に「世話人 二宮仁左エ門、二宮惣兵エ、我妻治三郎、石工佐藤八三郎」と刻まれている。



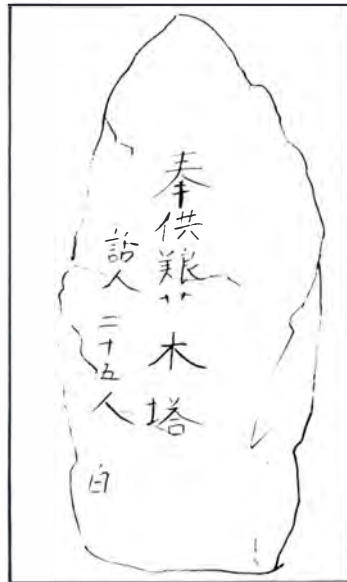
昭和58年10月の現況

⑤4 草木供養塔



所在地	東置賜郡高島町大字上和田字太田
建立年代	不明
高さ	一〇八センチメートル
幅	四五センチメートル
厚さ	二〇センチメートル
材質	安山岩

道路(まつたけぶどうライン)東側の葡萄園内に残された大日堂の小祠のある小高い丘の上にある。
 碑面は凹凸のままの面に刻字されたもので辛うじて「奉供養草木塔」と読みとれるが、年号は全くわからず、左側に「口話人 二十五人 口白」とあるのみ。



⑤3 草木供養塔



所在地 南陽市荻

建立年代 文政七年(一八二四)八月吉日

大きさ 高さ 九七センチメートル
幅 広いところで七一センチメートル
厚さ 一七センチメートル

材質 花崗岩、碑面加工



南陽市立荻小学校の校地内にあつて県道に面して建つ。
 碑面は上部欠損しているが、中央に「草木供養塔」その右側に「
 文政七甲申年」左側に「八月吉日 五左衛門」と刻んでいる。

⑤ 草木供養塔

所在地

西置賜郡白鷹町大字十王字小四王

(五十峯準一氏宅地内)

建立年代

明治二十四年(一八九一)九月吉日

大きさ

高さ 七二センチメートル

幅 もつとも広いところ四五センチメートル、基部一四センチメートル

材質

安山岩、表面加工



五十峯準一氏宅地入口の右側にある。裏山一帯が上杉藩の領地で、その管理の役を代々つづけてきたのが五十峯家で、曾祖父惣吉の時代に山林を伐採したとき、その感謝慰霊のために建立したものであるが、現所在地は家屋改築に際して移した所という。

碑面には「草木供養塔」その左側に「元山 五十峯惣吉」とあり、裏面に「明治廿四年九月吉日」の文字がある。



⑤1

財木供養塔

材
質花崗岩の自然石
厚さ 一八センチメートル所在地
建立年代
大きさ西置賜郡白鷹町大字深山字橋本
慶応二年（一八六六）十月
高さ 八七センチメートル
幅 上部の広いところ五九センチメートル、底部四三センチメートル

橋本部落入口の道路から東方へ少し離れた畑地の一隅に、庚申塔、山神等の多数の石塔群の中にあり、この地を土地の人々は山の神様と称している。

碑面には「財木供養塔」左側に「樋口金右エ門」とあり、裏面右側に「慶應二寅十月」と年号を刻む。



建立地にある石碑群

⑤ 材木供養塔



所在地 西置賜郡白鷹町大字深山字橋本
 建立年代 文化七年(一八一〇)九月
 大きさ 高さ 九三センチメートル
 幅 五八センチメートル
 厚さ 四八センチメートル
 材質 角礫凝灰岩質の自然石

橋本から上ノ台へ通ずる旧道の路傍に立てかけてある。そばに地蔵堂があり以前は倒伏したまま放置されていたというが、もともとはこの附近に建立したものである。
 碑面には「^(姓)バン 材木供養塔」その右側に「文化七庚午天願主」左側に「九月吉祥日 弥五郎」と明記されている。



④9 草木塔



所在地 西置賜郡小国町大字大石沢字松狹
 建立年代 昭和五十六年(一九八一)九月
 大きさ 高さ 六七センチメートル
 幅 一〇四センチメートル
 材質 外国産の玄武岩質の加工

碑面に明記されているとおり、山形県林業公社による造林記念に、飯豊町森林組合が建立したもので、所在地は小国町の地内ではあるが、九才峠から小国町と飯豊町の境界線である尾根筋に設けられた林道を約二キロメートル北へ進み、わずかに稜線から小国町に入っているためであって、実態は飯豊町所在とすべきものである。

安山岩の大岩塊の台座に花崗岩の二本の脚に支えられた、漆黒の玄武岩質の外国産石材で、碑面には横書きで「草木塔」「飯豊町長樋口三書」とあり、その下に地権者代表、労務責任者、協力者の名が刻まれている。



④ 草木塔

所在地

西置賜郡飯豊町大字下屋地

(竹村喜助氏宅地内)

建立年代

昭和五十一年(一九七六)八月

大きさ

高さ 三〇センチメートル
幅 五〇センチメートル

厚さ 一〇センチメートル

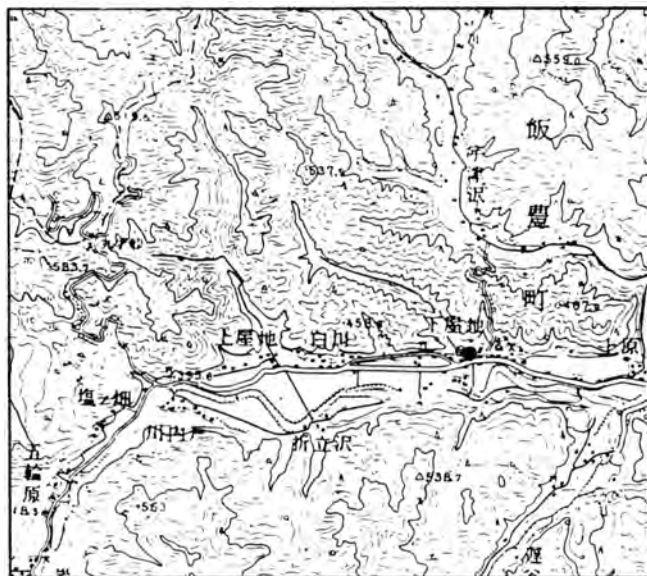
材質

安山岩の自然石



旧中津川村で多年郷土史関係の万般について情熱を燃しその調査にあたってこられた竹村喜助氏が独力で建立したものであるが、未だ自宅前に立てかけてあるだけで建立地を定めていない。

碑面には、横書きで「草木塔」「昭和五十一年八月」「竹村喜助建立」の文字が三行に刻んである。



④7 草木塔



所在地 西置賜郡飯豊町大字上原字下高瀬、
 (高橋要一氏宅地内)
 建立年代 昭和二十九年(一九五四)七月
 大きさ 高さ 三六センチメートル
 幅 底部二五センチメートル
 上部一九センチメートル
 材質 安山岩の自然石

もと須郷へ通ずる旧道の六角峠の藪の中に放置されていたものであるが、昭和五十三年所有者である高橋要一氏が自宅前に移し保存をはかっている。

碑面には、「草木塔」右側に「昭和廿九年七月」、そして右側面に「高橋春美 六十才」とある。高橋春美は明治二十八年飯豊町上原に生まれ同地に住み昭和三十六年四月に死亡している。



六角峠に放置されていた
 (昭和49年撮影)

④⑥ 草木塔

所在地 西置賜郡飯豊町大字小屋字羽黒

(羽黒神社境内)

建立年代 大正三年(一九一四)十月

高さ 一〇五センチメートル

幅 上部で三六センチメートル、下部の広いところで四二センチメートル

チメートル

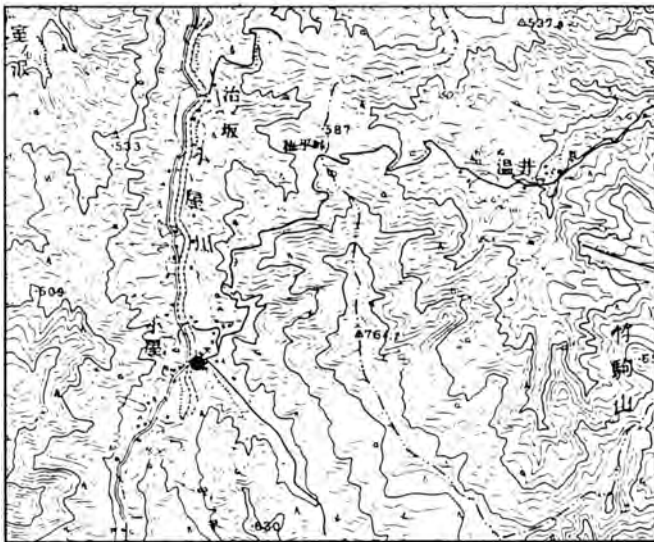
厚さ 三五センチメートル

材質 安山岩の自然石



羽黒神社の境内社殿の右側にある。近年彫り直しを行い基部をコンクリートでかためた。

碑面には、中央に「草木塔」その右側に「大正三年十月」左側に「大字小屋」を刻む。



④5 草木塔



材 質

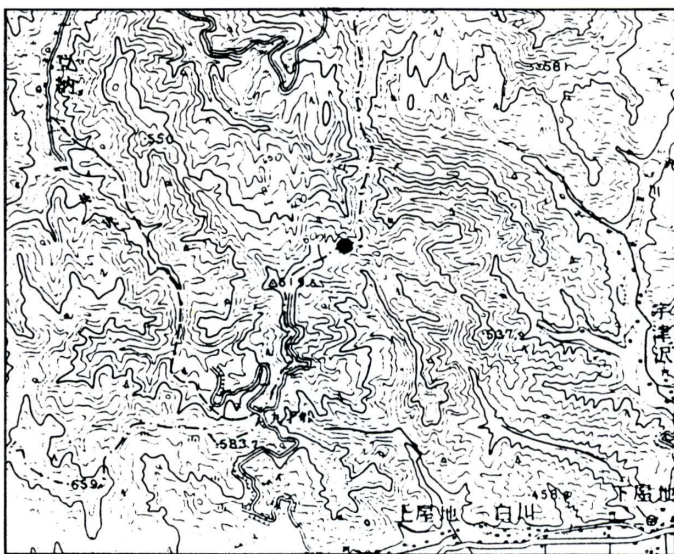
安山岩の自然石

所在地
建立年代
大きさ西置賜郡大字白川字大谷地
明治三十四年(一九〇一)旧六月
高さ 六七センチメートル
幅 上部一〇センチメートル、
底部三一センチメートル

厚 さ 二〇センチメートル

九才峠から小国町との境界を北方へ約二キロメートルほどの路傍に建ててあるが、昭和四十九年道路改修に際してここに移したものである。

碑面には中央に「草木塔」右側に「明治三拾四年」左側に「旧六月建之」とあり、右側面に「斎藤松蔵 伊藤福馬 中善寺辰次 鈴木五郎右エ門」の名を刻む。



④④ 草木塔

所在地 西置賜郡飯豊町大字遅谷字高稲場

(十二神社境内)

建立年代 明治二十八年(一八九五)八月

大きさ 高さ 六〇センチメートル

幅 三〇センチメートル、

底部三五センチメートル

厚さ 二〇センチメートル

材質 安山岩の自然石



十二神社(お薬師様といっている)の社前であって、白石からはずれてそれに立てかけてある。
碑面には中央に「草木塔」右側に「明治廿八年八月」左側に「遅谷若連中 建立」と刻んである。

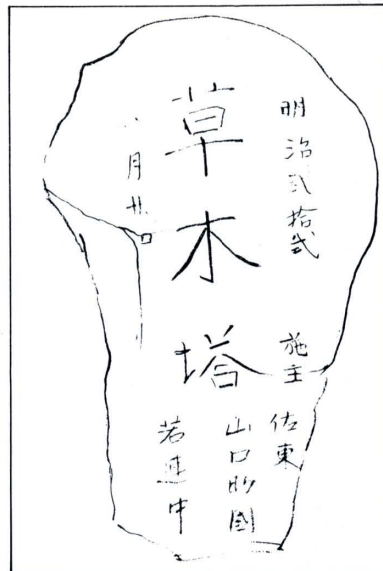


④ 草木塔



所在地 西置賜郡飯豊町大字宇津沢
 建立年代 明治二十二年(一八八九)八月二十日
 大きさ 高さ 六六センチメートル
 幅 三八センチメートル
 厚さ 三〇センチメートル
 材質 安山岩の自然石、碑面少し加工

宇津沢部落を過ぎ宇津沢川の上流滝の沢の山道の傍に立てかけてある。昭和四十二年の羽越水害後川底に流れついていたものを拾いあげたもので、もと附近の山道に建てられていたものであろう。碑面には、中央に「草木塔」、その右側に「明治貳拾貳」その下に「施主 佐東□□ 山口助国」左側に「八月廿□」下方に「若連中」と刻む。

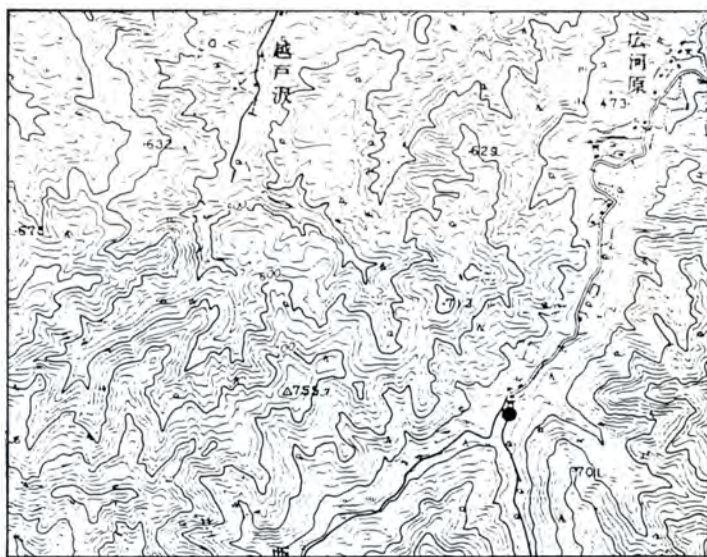


④ 草木塔



所在地 西置賜郡飯豊町大字広河原字大冗
 建立年代 明治十九年（一八八六）八月十七日
 大きさ 高さ 一二二センチメートル
 幅 六四センチメートル
 厚さ 四二センチメートル
 材質 安山岩の自然石

広河原の最奥（最南）の山の神の境内、小祠の右側にある。
 碑面は、中央に「草木塔」右側に「明治十九年八月十七日」左側に「一村中」とあり、左側面に「石工 鈴木惣平」を刻む。



④ 草木塔

所在地 西置賜郡飯豊町大字小坂

建立年代 明治十八年(一八八五)八月八日

大きさ 高さ 一三〇センチメートル

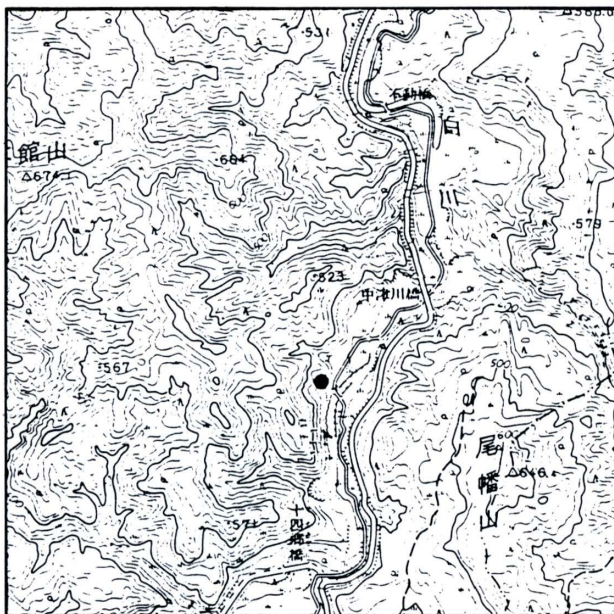
幅 四〇センチメートル

厚さ 三〇センチメートル

材質 安山岩の自然石



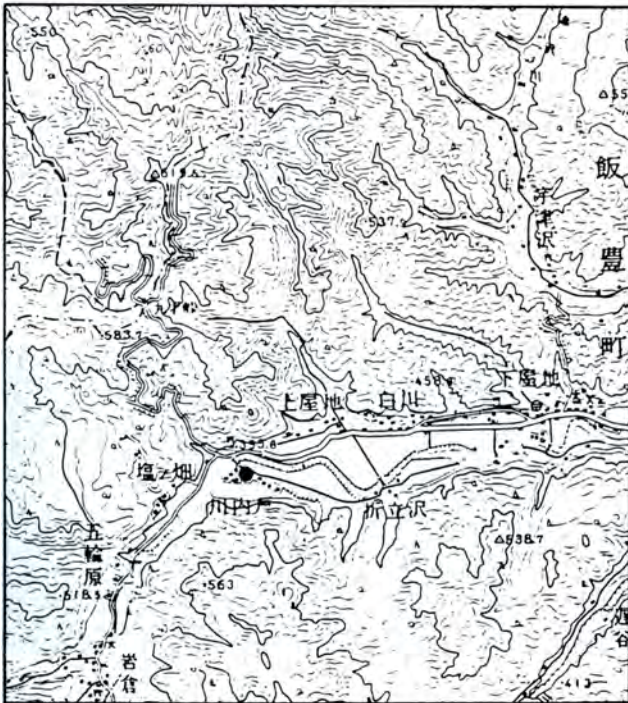
昭和41年7月2日撮影



昭和四十二年八月の羽越水害によって流失してしまい、白川ダムによる水没地帯になってしまったが、以前小坂部落南端に白川にかけた上覧橋があった。その西のたもとにあったもので、昭和四十一年の当時は写真のとおり前のめりに傾むいておった。碑面には中央の「草木塔」と右側の「明治十八年八月八日 一村」の文字が明らかであった。

④〇 草木塔

所在地 西置賜郡飯豊町大字川内戸
 建立年代 明治十六年(一八八三)七月
 大きさ 高さ 八六センチメートル
 幅 四九センチメートル
 厚さ 二〇センチメートル
 材質 安山岩の自然石



川内戸公民館の南側に庚申塔、古峯神社、湯殿山など七基が並んで建てられている左端のものであるが、以前は公民館前面の道路に面してあったものである。
 碑面には、中央に「草木塔」その右側に「明治十六年七月」左側に「一村中」とある。



③⑨
草木塔

所在地	西置賜郡飯豊町大字宇津沢字馬神沢
建立年代	慶応元年（一八六五）六月吉日
大きさ	高さ 九一センチメートル 幅 六九センチメートル 厚さ 三九センチメートル
材質	安山岩の自然石

宇津沢部落中ほどの道路の北側杉の根方に建立されているが、昭和四十六年当時は道路南側の水田の一隅にうつぶせに倒れていた。多分基盤整備事業の際この附近にあつたものが放置されていたものと考えられる。埋没部を含めた全長は一〇二センチメートルであった。

碑面には中央に「草木塔」、その右側に「慶應元乙丑年」左側に「六月吉日 山口八良 左エ門」と刻んである。



水田の一隅にうつぶせになって放置されていたものを振り起す(昭和46年撮影)

③⑥ 草木塔

所在地 西置賜郡飯豊町大字白川

建立年代 文久二年(一八六二)八月

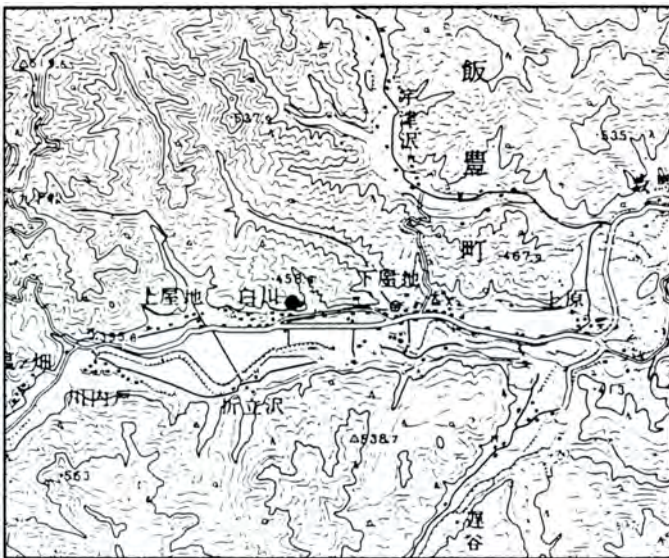
大きさ 高さ 七〇センチメートル

幅 基部の広いところで五〇センチメートル

チメートル

厚さ 一五センチメートル

材質 安山岩の自然石



白川寺の境内、参道の左側に湯殿山などの石碑と並んで建つ。碑面には、中央に「草木塔」その頭部に種子らしきものが見えるが判然せず。左側に「文久二戊年」右側に「八月初天」の文字を刻む。

③7 草木塔



材	質	花崗岩の自然石
所在地	西置賜郡飯豊町大字塩ノ畑	
建立年代	安政五年(一八五八)	
大きさ	高さ 一三五センチメートル 幅 九〇センチメートル 厚さ 二〇センチメートル	

塩ノ畑地内道路の北側に沿い水田の一隅にある。もとは少し北方のケヤキの下にあったが基盤整備工事に伴ない現在地に移されたものである。

碑面には、中央の「草木塔」の文字は明瞭であるが、風化磨滅が甚だしく右側の年号の読みについては、佐藤忠蔵氏は「享祿五年八月」、戸川安章氏は「享延享四年」(羽陽文化一〇〇号)にしているが、今回拓本をとって精査した結果「安政五戊午歳」が正しいことが判明した。



右端が草木塔(昭和58年現況)

③⑥ 草木塔

所在地 西置賜郡飯豊町大字広河原字原崎
 建立年代 天保十年（一八三九）四月八日
 高さ 八四センチメートル
 幅 七五センチメートル
 厚さ 上部一六センチメートル、
 下部二六センチメートル
 材質 安山岩の自然石



広河原部落の入口（北端）の橋を渡ってすぐ右手に建つ。古くはここが通路であつたらしい。昭和四十六年当時は今の道路沿いに一軒の住宅がありその裏手にこの塔が建っていたが、現在は住宅は完全に撤去され附近一帯はタラノキ、クマイチゴが生い繁り蔓草におおわれて塔の所在は全く判らず、ようやく藪の中に倒伏している大石を見つけ、裏返してこの塔であることをつきとめた。見守る者もないままに雪のため倒伏したものらしい。

碑面は中央に「草木塔」の大文字、右側に「天保十年」左側に「四月八日」の文字が明らかである。

小山田信一氏の豆本「草木塔」十七頁所載の写真は、これとは別のものである。



昭和58年10月17日、やぶの中から掘り起したもの



③5 草木塔

所在地	西置賜郡飯豊町大字小屋字小手屋
建立年代	文政十三年(一八三〇)三月十三日
大きさ	高さ 七二センチメートル 幅 三〇センチメートル
材質	安山岩の自然石

権平峠へ通ずる旧道のわかれ、土堤の上に馬頭観世音、湯殿山、庚申塔など六基の石塔が並立しているが、その左から二番目が草木塔である。

碑面には中央に「草木塔」右側に「文政十三年」左側に「三月十七日」の文字が明らかである。



左から2番目が「草木塔」

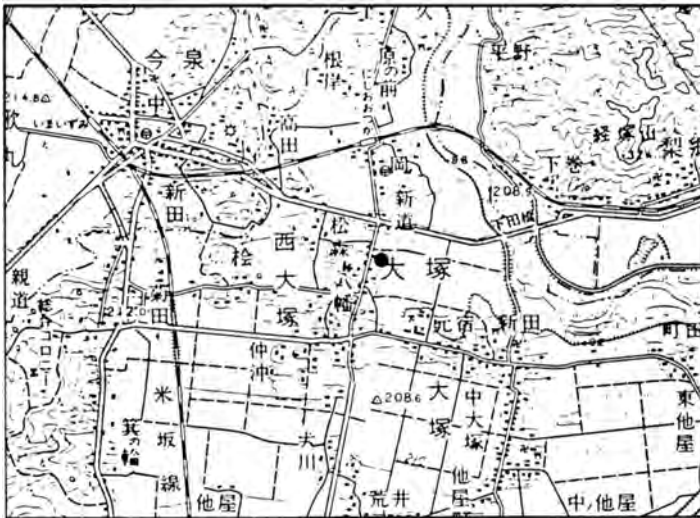
③4 草木供養塔



所在地 東置賜郡川西町大字西大塚
 (高橋通三郎氏宅地内)
 建立年代 昭和四十七年(一九七二)九月十日
 大きさ 高さ 一三五センチメートル
 幅 八〇センチメートル
 厚さ 三七センチメートル
 材質 花崗岩の自然石

昭和四十七年、自然保護の声がもつとも高まったころ、川西町自然保護の会の会長であつた高橋通三郎氏が独力で自宅の庭に建立したものである。

碑面には「草木供養塔」その左側に「草木を愛してそのめぐみに感謝し青い地球を守ろう」と刻んだ。裏面に「紀元一九七二年建立」とある。



③③ 草木供養塔



所在地	東置賜郡川西町時田
建立年代	大正八年(一九一九)十月二十三日
高さ	一三七センチメートル
幅	二一センチメートル
厚さ	一五センチメートル
材質	凝灰岩の加工

中郡駅から北へ約五〇〇メートルのところから西へ分かれる道をまた五〇〇メートルばかり登った墓地隣接の藪の中にある。角柱状の加工石で正面には「草木供養塔」右側面に「大正八年十月二十三日」左側面に「高橋弥平次 大木□弥 高橋□□ 大木平吉」を二行に刻む。



⑫ 草木供養塔



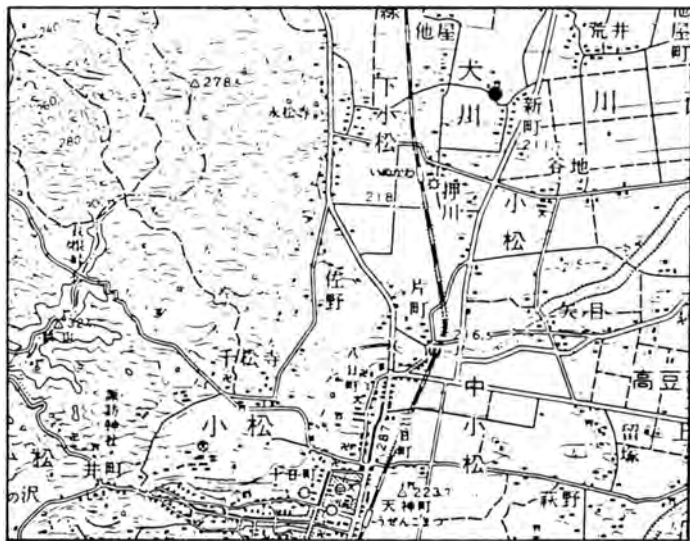
材 質

安山岩の表面加工
厚さ 二九〇三七センチメートル

所在地
建立年代
大きさ

東置賜郡川西町下小松（龍蔵神社境内）
明治二十五年（一八九二）十月
高さ 一三七センチメートル
幅 中央部五九センチメートル、
下部の広いところ七五センチメートル

龍蔵神社の境内参道の左側にあつて、凝灰岩の台座の上に建つ。よく磨かれた碑面には中央に篆書で「草木供養塔」右側に「明治廿五年歳在壬辰十月」左側下方に「度外老人書」とある。





③① 草木塔

所在地	東置賜郡川西町上奥田字飯坂
建立年代	明治九年(一八七六)
大きさ	高さ 六〇センチメートル 幅 二九センチメートル 厚さ 一七センチメートル
材質	凝灰岩 墓石形に加工



道路西側に大宮様という石の小祠がありその前方に二段の台石の上に建ててある。
 碑面中央には「草木塔」その下の横に「一村中」、右側に「明治九年」とあるが左側の月日は摩滅して不明である。

③〇 草木供養塔

所在地 東置賜郡川西町大字時田

(四柳清徹氏宅地内)

建立年代 明治二年(一八六九)三月

高さ 六〇センチメートル

幅 中央部で三五センチメートル

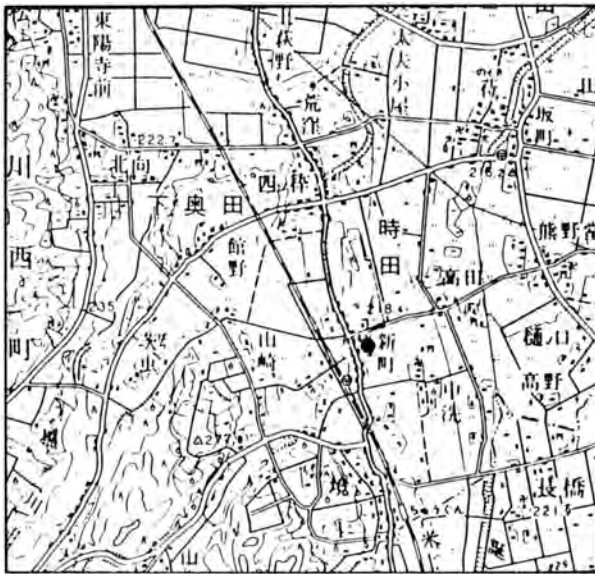
厚さ 一六センチメートル

材質 凝灰岩 前面加工



道路ぞいの八幡寺境内に隣接する四柳清徹氏住宅前に建立されている。

碑面には中央の「草木供養塔」右側に「明治二巳年」左側に「三月□□」とあり、かなり摩滅している。



②9 草木塔

所在地

東置賜郡川西町玉庭字御伊勢町

(瑞光寺境内)

建立年代

明治元年(一八六八)十一月

大きさ

高さ 四五センチメートル

幅 三〇センチメートル

厚さ 一〇センチメートル

材質

安山岩の自然石



瑞光寺境内庭園の一隅にある。
 碑面には「草木塔」のみ、裏面に「明治元戊辰年 十一月建立」と二行に、またその下に「宥寛、宥恵」が二行に書かれている。

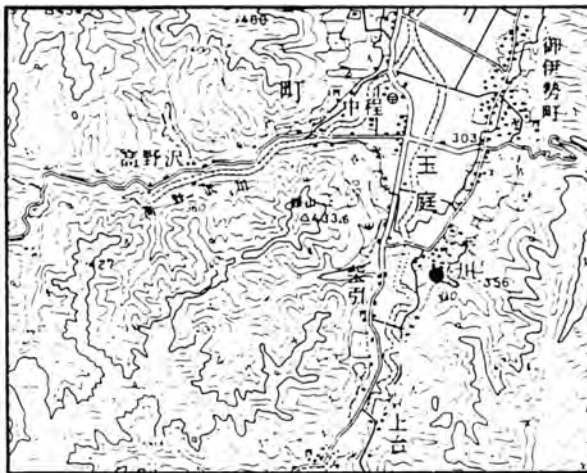
②⑧ 草木塔



所在地 東置賜郡川西町玉庭字犬川
 建立年代 慶応元年（一八六五）十月
 高さ 四六センチメートル
 幅 二四センチメートル
 厚さ 一二センチメートル
 材質 凝灰岩、加工

大川部落南端人家の裏手にあるが、このあたり旧道に沿っていたと考えられる。近くに砂防ダム工事場への道路ができて隔離され一層荒廃している。

□□：「」が幸うじて読みとれる。



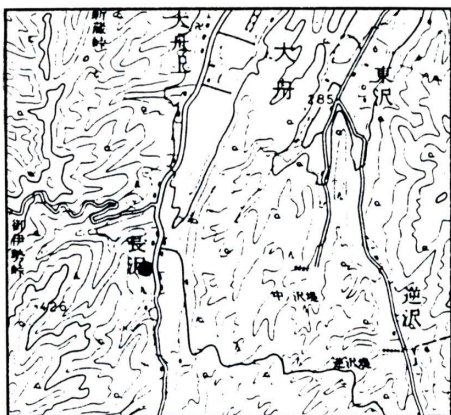
②7 草木供養塔

所在地	東置賜郡川西町大舟字長沢
建立年代	元治元年（一八六四）八月吉日
大きさ	高さ 六五センチメートル 幅 三〇センチメートル 厚さ 二一センチメートル
材質	凝灰岩で墓石形に加工



長沢部落の南端、道路の北側に沿い道路改修工事のためかやや後に傾むいている。碑面には「草木供養塔」右側面に「元治元子歳八月吉日」とある。凝灰岩の切石の二段の台座があり、その上段前面に「施主柳沢孫七」「上組中」が刻まれている。

なお、左方には地藏様の小祠があり、右方には銭神と云う石の小祠があり常に供物が供えられ旧暦三月十五日にはお祭りが行われるという。



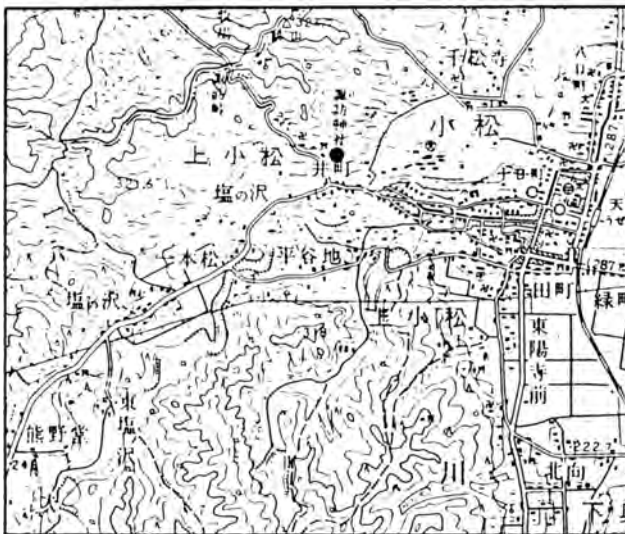
右側の布で被われているのが銭神

⑳ 草木供養塔



所在地	東置賜郡川西町上小松
建立年代	嘉永三年（一八五〇）三月十七日
大きさ	高さ 七六センチメートル
	幅 三一センチメートル
	厚さ 二一センチメートル
材質	凝灰岩で墓石形に加工

諏訪神社鳥居を入れてすぐ左側に山神塔、庚申塔、象頭山などの石碑とならびその左端に建つ。
 碑面に「草木供養塔」左側面に「嘉永三戊年三月十七日」の文字があり、凝灰石の二段の台座がある。





②⑤
草木塔

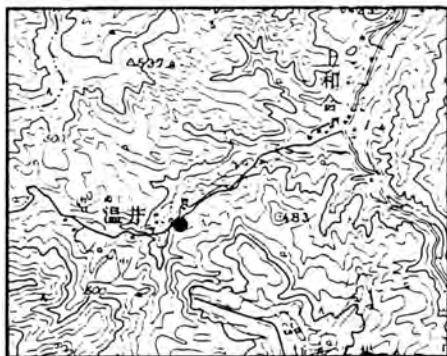
所在地
建立年代
大きさ
材質

東置賜郡川西町玉庭字温井
嘉永二年（一八四九）月日不明
高さ 八〇センチメートル
幅 三七センチメートル
凝灰岩質の硬い自然石で三個に砕けて
いる。

は「安永二年」と記録して
いるが、今回の調査では「
嘉永二年」が正しいことが
わかった。左側の月日は佐
藤忠蔵氏は八月九日と読ん
でいるが今次の調査では読
みとれなかった。



昭和58年10月14日現状撮影、右側のものは「飯豊山」



上和合から行つて部落
の入り口左側にある「飯
豊山」の巨大な石碑の立
つ台石の上に割れたまま
立てかけているが、もと
はその手前数十メートル
右側のお堂の前にあつた
もので、道路の改修工事
の際破壊されたまま放置
されていたものである。
碑面には「草木塔」の
文字が明らかであるが、
右側の年号は佐藤忠蔵氏

⑭ 草木塔

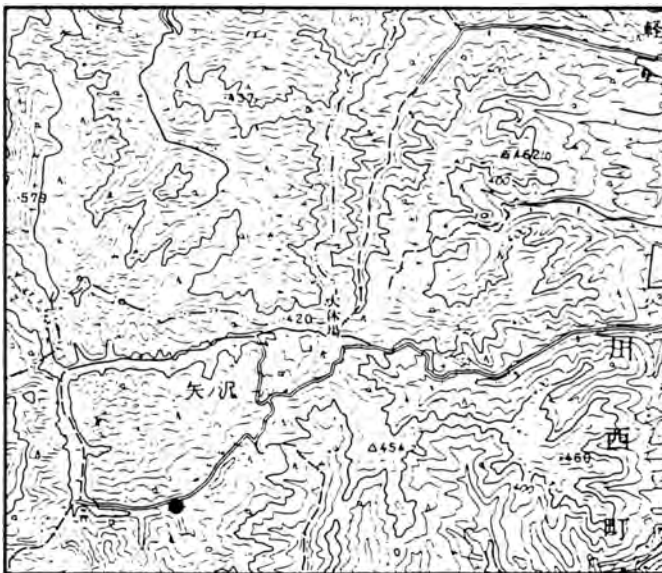


材質

安山岩の自然石

所在地 東置賜郡川西町玉庭字矢ノ沢
 建立年代 弘化二年(一八四五)三月吉日
 大きさ 高さ 八二センチメートル
 幅 底部がもつとも広く四七センチメートル、上部で三五センチメートル、その下のせまいところが三四センチメートル
 厚さ 上部で一九センチメートル、下部 三一センチメートル

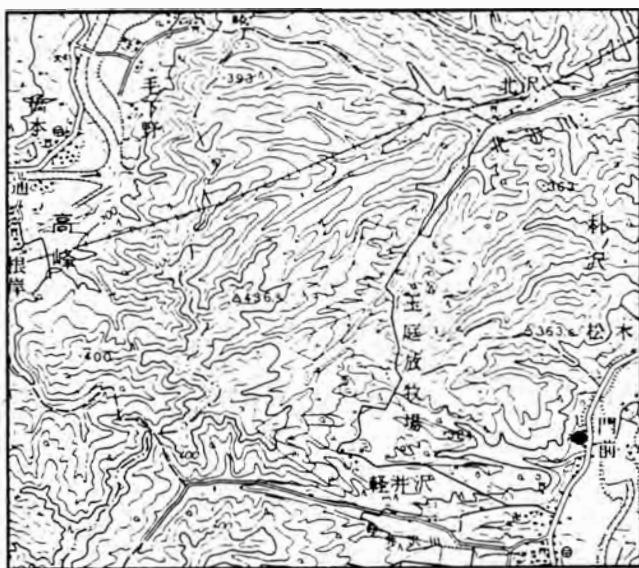
矢ノ沢はすでに廃村であるが、馬場からの車道と塚田から入る道(廃道に等しい)の交わる地点にある。
 碑面には、「草木塔」その右側に「弘化二年」左側に「三月吉日」と明瞭である。





②③ 草木供養塔

所在地	東置賜郡川西町玉庭字朴ノ沢
建立年代	天保七年(一八三六)月日不詳
大きさ	高さ 七七センチメートル 幅 底部で四五センチメートル
材質	凝灰岩で多少加工している



高国寺の門前で参道の右側の藪の中にある。もとここに薬師堂があったが、道路改修により堂は寺院本堂の南方に移築されたが、草木供養塔、古峯神社の石柱などはもとの位置に残されている。碑面は摩滅して中央の「草木供養塔」右側の「天保七申年」が辛うじて読みとれるが、左側下方に「日」の字が見えるがその他は不明。

②② 草木塔

所在地	東置賜郡川西町玉庭字高野沢
建立年代	文政十二年(一八二九)三月十七日
大きさ	高さ 六〇センチメートル 幅 四二センチメートル 厚さ 二〇センチメートル
材質	安山岩の自然石



高野沢部落東端、道路北側の一軒屋背後の丘陵にあるが、古くはここが通路であつたらしい。目下道路の再改修により碑の前約一〇メートルほどのところが開削され辛うじて現状が保たれている。

碑面には、太く「草木塔」の文字が刻まれ、その右側に「文政十二年」左側に「三月十七日」とある。

昭和四十六年九月には藪の中に倒れたまま放置されていたが、その後間もなく起して基部をコンクリートで固めたが、現在はそのまま生い繁る藪の中にある。

⑳ 草木供養塔



所在地	東置賜郡川西町大舟（新蔵峠への旧道）
建立年代	文化十三年（一八一六）八月
大きさ	高さ 八〇センチメートル
	幅 三六センチメートル
	厚さ 二四センチメートル
材質	凝灰岩加工



大舟上部落から新蔵峠への旧道をわずか登った路傍の一角に他の多くの石塔と共に建っているが、これらは前面の平野を通った旧道ぞいにあつたもので基盤整備の際にここに移されたものである。

二段の台石の上に建てられ、碑面には「草木供養塔」を刻み、右側面に「文化十三年八月吉日」とある。



⑳ 草木供養塔



所在地 東置賜郡川西町玉庭字柴引
(加藤隆一氏宅地内)

建立年代 寛政九年(一七九七)閏七月十四日

大きさ 高さ 六七センチメートル
幅 三八センチメートル、
底部四三センチメートル

厚さ 一七センチメートル

材質 安山岩の自然石



昭和58年10月、左端が「草木供養塔」

もとは前面(東方)の水田地帯を通る旧道の一里塚に建てられていたものであるが、基盤整備によって現在の道路西側に移されていた。それが道路の拡幅などによって倒壊のまま放置されていたものを、昭和五十八年八月所有者である加藤隆一氏が自宅南側に、六面幢や地蔵様の塔と共に移したものである。

碑面には中央に「○草木供養塔」とあるが、円内の種子らしいものは全く読めない。右側には「寛政九丁巳天」左側の「閏七月十四日」は明瞭である。



昭和52年道路ぞいにあった当時の状態
左端が「草木供養塔」

⑱ 草木塔

所在地	米沢市中央五丁目（猪俣市弥氏玄関前）
建立年代	昭和五十四年（一九七九）七月十九日
大きさ	高さ 六三センチメートル 幅 三四センチメートル
材質	厚さ 二五センチメートル 安山岩の自然石



多年染色業を営み、特に草木染に情熱をかたむけておられる箒園工房社長猪俣市弥氏が「草木の霊に感謝しその霊を慰めるため」建立されたものである。

碑面には、中央に「草木塔」その右側に「昭和五十四年己未天」左側に「七月十九日」を刻む。

⑲ 草木塔

所在地	米沢市中央五丁目（西蓮寺墓地内）
建立年代	昭和五十五年（一九八〇）十一月
大きさ	高さ 六六センチメートル 幅 四六センチメートル
材質	安山岩、表面加工

西蓮寺は、国道の大改修により境内を割愛し、本堂と墓地を現在地に移転した。そのとき杉の古木を多数伐採したのでその霊を慰めるために建立したという。

碑面には「ウム^{（光を）}草木塔」右側に「昭和五十五年十一月」左側に「明普西杏」と刻む。蓮弁を型どる立派な台座の上に立つ。





⑩ 草木供養塔

所在地	米沢市大字築沢字初神(渡部忠氏宅地内)
建立年代	明治三十九年(一九〇六)旧八月六日
大きさ	高さ 四五センチメートル 幅 二五センチメートル 厚さ 二一センチメートル
材質	安山岩の自然石

道路西側の渡部忠氏住宅の前右方にあり。碑面には、中央に「艸木供養塔」その右側に「明治三十九年」左側に「旧八月六日建」は明らかであるが、背面の「行屋」アト施木記念の一部不明、また右側面には「施主 岩瀬忠吉 年七十」とある。



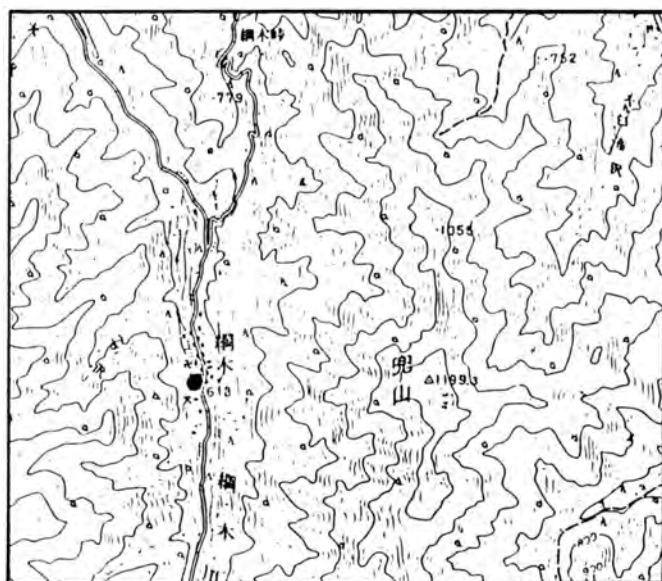


⑮ 草木供養塔

所在地 米沢市大字綱木（山の神社境内）
 建立年代 明治十二年（一八七九）八月十五日
 大きさ 高さ 一一〇センチメートル
 幅 上部六〇センチメートル、下部四〇センチメートル
 厚さ 一〇センチメートル
 材質 安山岩の自然石

山の神社鳥居の前の右側に、巳待供養塔の背後に重なるように斜に建っている。

碑面には、中央に「草木供養塔」右側に「明治十二年八月十五日」左側に「村中為安全建立 施主人中川新八、梅津豊吉」を刻む。





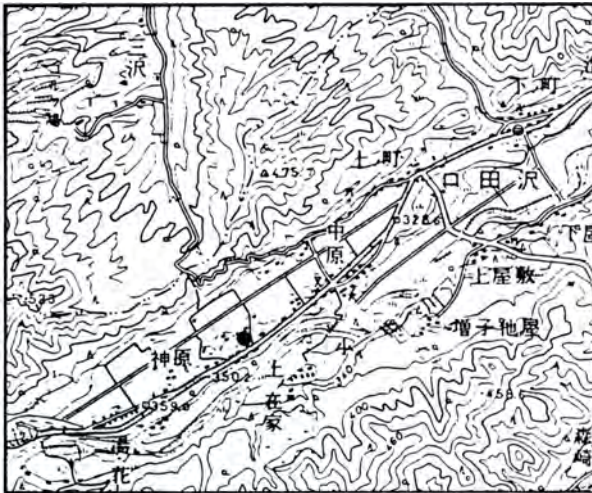
⑭ 草木塔

所在地	米沢市大字口田沢字上中原
建立年代	慶応元年（一八六五）七月二十日
大きさ	高さ 一五八センチメートル 幅 六七センチメートル 厚さ 四六センチメートル
材質	安山岩の自然石

上中原バス停留所から西方へ約一〇〇メートル、国道二二二号線に沿って約二〇メートルほど北側の松林の中にあるが、道路改修の際にここに移転されたものという。

碑面は、中央に「草木塔」その右側に「慶應元年七月廿日」左側に「三田沢講中」と、いずれも行書体にくずした字を刻む。

毎年五月二十日の早朝近在の人々が集まって清掃旗立を行った後、地元の田沢寺の住職によって供養を行い、関係者には「草木塔供養之御札」を配るならわしがある。



⑬ 草木塔



材質	凝灰岩質で前面やや加工
所在地	米沢市万世町笹籬
建立年代	嘉永七年(一八五四)十月一日
大きさ	高さ 二一四センチメートル 幅 一一五センチメートル 厚さ 三三センチメートル

国道一三号線万世大路の綱木から、天王川に沿って東方へ約三キロメートル、笹籬部落を出はざれたところ、山の神社社参道の右側にある。幅二メートル高さ四〇センチメートルの台座の上に建ち、草木塔としてはもつとも巨大なものである。

碑面には「草木塔」の大文字と右側に「一村中」が刻まれており、右側面に「嘉永七寅年十月二日」を刻む。





⑫ 草木供養塔

所在地	米沢市小野川町塔之原
建立年代	弘化二年(一八四五)
大きさ	高さ 六二センチメートル 幅 二九センチメートル 厚さ 二五センチメートル
材質	安山岩の自然石

小野川温泉対岸の甲子大黒天の社殿の背後の山腹に建てられているが、近年四キロメートルほど下流の赤芝町羽黒堂から移したものである。碑面には「草木供養塔」とあり、その右側面に「弘化二巳天」とある。



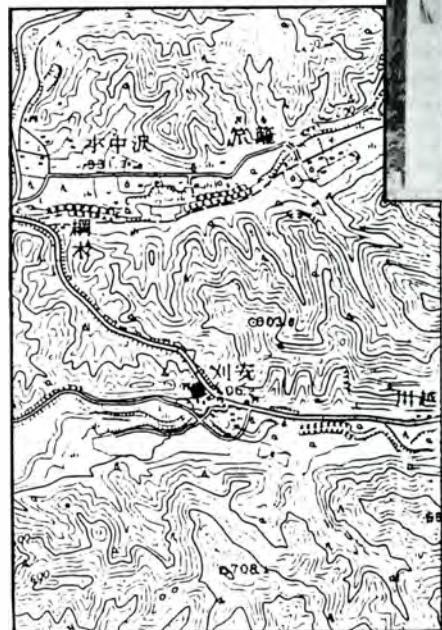
⑪ 草木供養塔



所在地	米沢市万世町刈安（山の神境内）
建立年代	弘化二年（一八四五）九月九日
大きさ	高さ 八〇センチメートル 幅 六五センチメートル 厚さ 二〇センチメートル
材質	凝灰岩質の自然石



鳥居右側の小さい方が「草木供養塔」である



刈安部落の入口（西端）、国道一三号線に沿う南側の山上に山の神の社殿があり、鳥居をくぐって百数十段のせまい石段を登るのであるが、その鳥居のそばに建ててある。

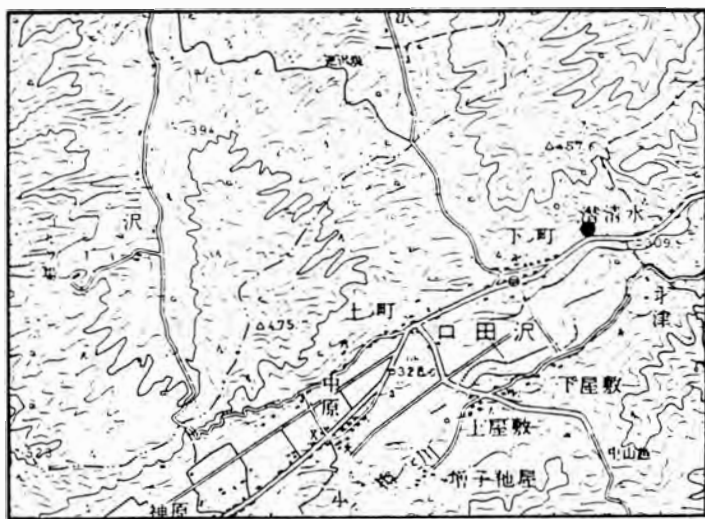
碑面中央に「^{（梵字）}バク 草木供養塔」とあるが基部埋没して塔の字がほとんどかくれている。右側に「弘化乙巳年」左側に「九月九日」とあり摩滅のため判読が困難である。なお小山田信一氏によれば、基部の埋没部に「東原寺」の文字があるという。



⑩ 草木塔

所在地	米沢市大字口田沢字塔婆沢
建立年代	文政九年(一八二六)八月十五日
高さ	八一センチメートル
幅	広いところ四七センチメートル
厚さ	三三センチメートル
材質	安山岩の自然石

国道一二一号線を潜清水から三〇〇メートルほど西へ進み、道路北側に沿って通称下の町墓地がある。その一隅道路に面して建つ。碑面は「草木塔」の力強い刻字だけであるが、右側面には「文政九 丙戌歳」、左側面に「八月十五日町方施主」とある。





⑨ 草木供養塔

所在地

米沢市大字口田沢字神原

建立年代

文政六年（一八二三）八月八日

大きさ

高さ 八〇センチメートル

幅 広いところで五〇センチメー

トル、三分の二上のくびれた

ところが三七センチメートル

厚さ 四〇センチメートル

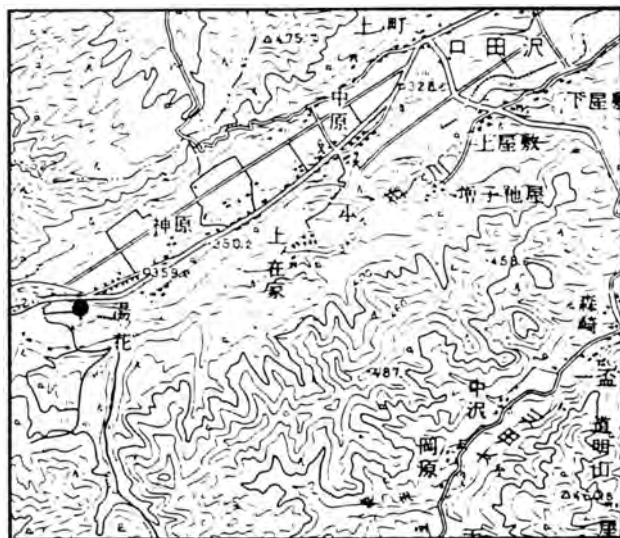
材質

安山岩の自然石、凝灰岩の台石の上に

やや後へ傾いて建つ

神原部落の西のはずれにある勝軍地藏尊の境内、社殿の向って右側にある。

碑面には、中央に「草木供養塔」、その右側に「文政六天」、左側に「八月八日 神原」と刻む。



⑧ 草木供養塔



所在地 米沢市大字築沢字大代原
 建立年代 文政六年（一八二三）二月
 高さ 一〇八センチメートル
 幅 中央の広いところ七〇センチメートル、底部五六センチメートル
 厚さ 五〇センチメートル
 材質 安山岩の自然石

米沢市立三沢東部小学校の校庭の一隅に道路に面して建立。碑面は、中央に「草木供養塔」その右側に「文政六年二月」左側に「三築沢村」

右側面に
 寛政六甲寅歳鈴木権右
 エ門情野忠右エ門与兵
 衛為後年不時之資請官
 府以鹿之沢助之沢屋敷
 沢越戸沢為留山矣後來
 之邑長継三子之志示厚
 左側面に
 也故樹木繁茂而資不
 可舉而數也於是因供粮

裏面に
 草木記三子之功以示後世云

世話人
 清野信右エ門 加藤孫右エ門
 佐々木次兵衛 遠藤六郎兵衛
 鈴木佐右エ門 遠藤七郎兵衛
 鈴木新兵衛 遠藤源兵衛
 加藤喜右エ門 土屋門三郎
 鈴木甚五右エ門 同 金蔵

以上のように建立の由来を刻んでいるのはこの碑だけである。

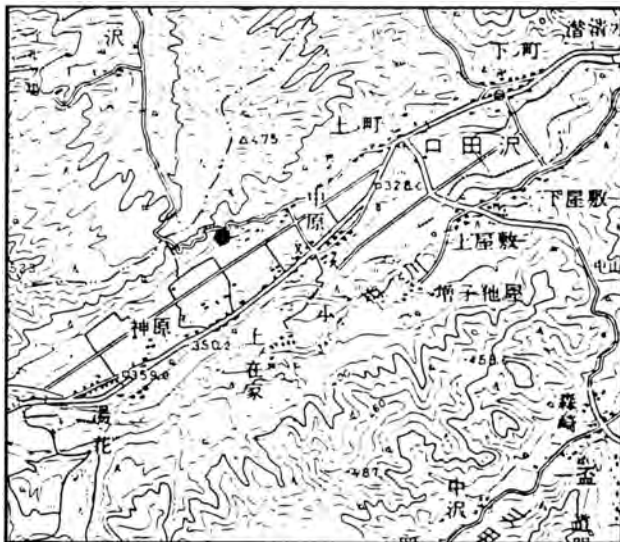


左側面の刻字

① 草木塔



所在地 米沢市大字口田沢字中原
 建立年代 文政六年（一八二三）八月
 大きさ 高さ 八四センチメートル
 幅 四五センチメートル
 厚さ 二四センチメートル
 材質 安山岩の自然石

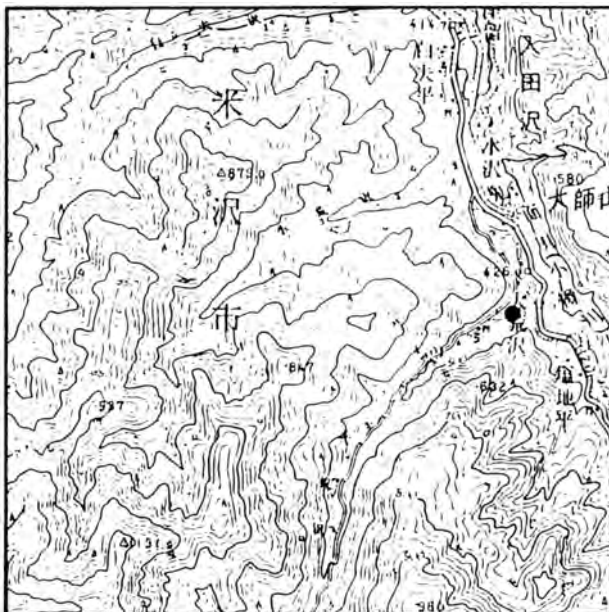


川西町へ通ずる県道（口田沢川西線の南側崖下の子安地藏尊を祀る地藏堂の右側斜面にある。大正一〇年に道路が改修される前は旧道がここを通っていたという。
 斜に傾むいているが、碑面には「草木塔」右側面に「文政六年八月」が明らかである。この碑建立以前のはすべて「草木供養塔」であるから「草木塔」と刻む最古のものといえる。



⑥ 草木供養塔

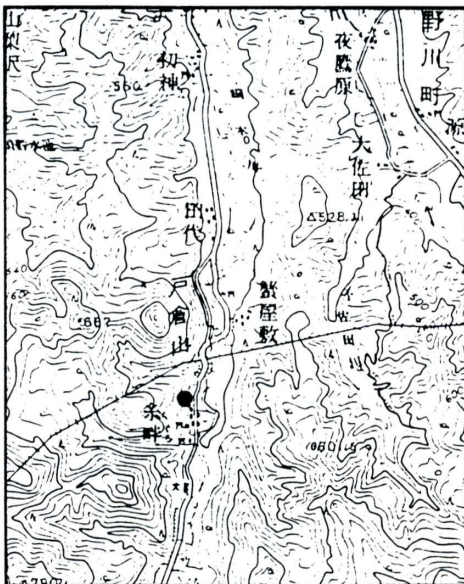
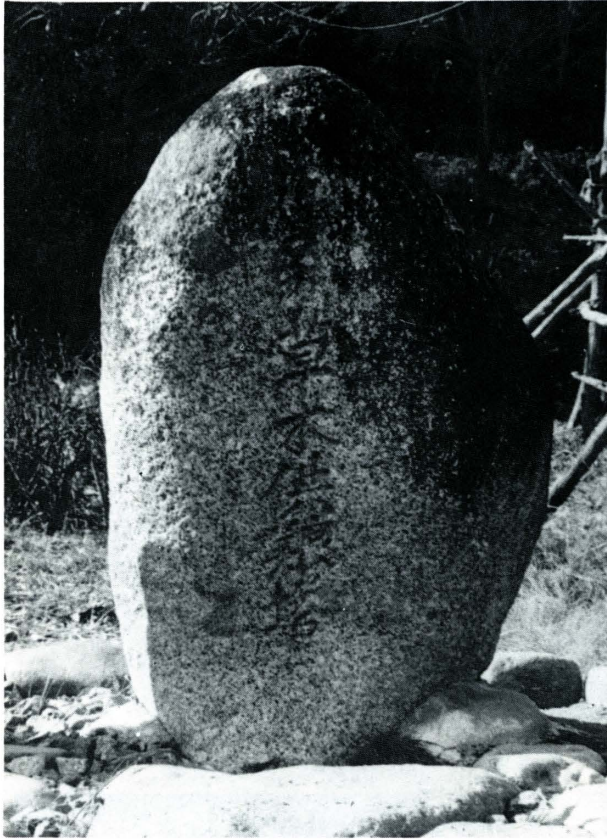
所在地	米沢市大字入田沢字大荒沢
建立年代	文政元年（一八一八）八月
大きさ	高さ 九〇センチメートル
	幅 三七センチメートル
厚さ	三〇〜一七センチメートル
材質	安山岩の自然石



国道一二一号线から大荒山不動尊への旧道を水路に沿うて約一〇〇メートルほど入った路傍の杉の根方にあり基部埋もれて塔の字ようやく見える。
 碑面には、中央に「草木供養塔」、その右側に文政元年八月」左側下方に「村中」の文字がある。

⑤ 草木供養塔

所在地 米沢市大字築沢字糸畔
 建立年代 文化十三年（一八一六）四月七日
 大きさ 高さ 一一六センチメートル
 幅 広いところで七九センチメートル
 厚さ 二七〇二九センチメートル
 材質 花崗岩の自然石



糸畔部落の北端、道路西側に沿って建てられているが、以前は反対側の東側に西面してあったものである。

碑面には、中央に「ウム（地字） 草木供養塔」右側に「文化十三年」左側に「四月七日」を刻む。

建立年号の刻字は一部摩滅して読み取りにくい為に、戸川安章氏の「草木塔管見」（羽陽文化一〇八号）には「文化十癸酉年、四月廿日」とあり、小山田信一氏の豆本「草木塔」には「文化六年四月」とあるが、今次の調査で拓本をとり精査した結果、以前佐藤忠蔵氏が記録した「文化十三年、四月七日」が正しいことが判明した。

③ 草木供養塔

所在地	米沢市大字口田沢字上屋敷(薬師様境内)
建立年代	寛政十二年(一八〇〇)八月十五日
大きさ	高さ 七六センチメートル
	幅 三五センチメートル
	厚さ 二九センチメートル
材質	安山岩の自然石



公民館と同居するお薬師様社殿のそばにある。
 右に傾むいているが碑面には中央に「バク」^(梵字)「草木供養塔」右側に
 「寛政十二申天」左側に「八月十五日 導師瑞林寺」とある。



② 草木供養塔



所在地 米沢市大字入田沢字白夫平
 建立年代 寛政九年（一七九七）八月十三日
 大きさ 高さ 一二〇センチメートル
 幅 九〇センチメートル
 厚さ 二〇センチメートル
 材質 安山岩の自然石

国道二二号線の西側に沿い約二メートルの高処に建つ。すぐ背後に住宅が建つて甚だ景観を損ねている。碑面には、中央に「**花** 草木供養塔」、その右に「一佛成道観見法界」さらにその右側に「寛政九丁巳年」、左側には「草木国土悉皆成佛」さらにその左側には「八月十三日 中通」を刻んでいる。経文と併記されているものはこの碑だけであり、草木塔の信仰的背景をたどる上からも貴重なものがある。

なお、この碑の左隣に寛政九丁巳天、八月十三日の「飯豊山供養塔」が建っている。



右側に同年同月建立の飯豊山供養塔がある。

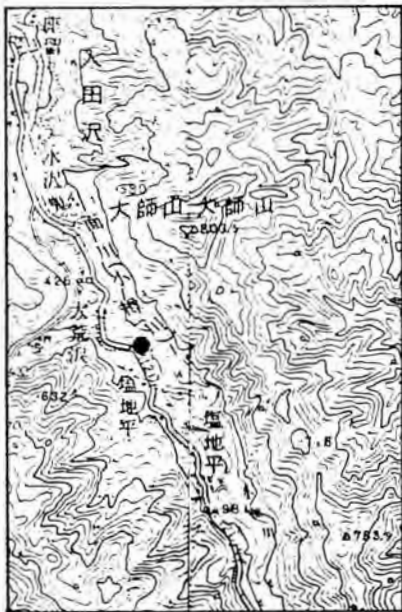
① 草木供養塔

所在地	米沢市大字入田沢字塩地平
建立年代	安永九年(一七八〇)七月十九日
大きさ	高さ 一二〇センチメートル 幅 四八センチメートル 厚さ 二二センチメートル
材質	安山岩の自然石



塩地平部落入口の国道二二号線に沿う東側の墓地内にある。不動様の粗末なお堂のそばの藪の中に前のめりに半ば埋まっております。碑面には中央に「草木供養塔」右側に「安永九子天」左側に「七月十九日」の文字が、辛うじて判読される。

現在発見されている草木塔としては最古のものである。



六、
草
木
供
養
塔

地図は地理院発行五万分の一を使用

考えるようになり、そこから伸びゆく生命を人間の役にたてるために伐採された草木の霊を慰めようという考えが生まれたのではないかと考察され、草木塔の発生はこのような信仰を鼓吹した宗教者乃至宗派の信仰的背景によるものであることが述べておられる。

佐藤忠蔵氏は、安永元年二月、江戸の大火で上杉家の上屋敷が類焼したので、竹俣家老が直ちに帰藩して数百人を動員し、田沢村に小屋がけ宿泊して御林を伐採して江戸へ送り、いち早く上屋敷を再建することができた。このとき伐採された樹木に感謝し霊をなぐさめるために安永二年にはじめて草木供養塔を建てたと述べておられるが、安永二年建立となされた温井のもの²⁵は嘉永二年と改めるべきものであるし最古の塩地平のもの^①は安永九年であつて、御林伐採とは必ずしも結びつかないようである。

他に口碑の語るものに、白鷹町十王の明治二十四年建立の「草木供養塔」^②がある。もとこのあたり一帯が上杉藩の領地であつたが、明治になつて人手に渡り二ヘクター余の美林が伐採された。このとき伐採の業にあたつた五十峯惣吉氏は、この美林に斧を入れることをためらつたというが、伐採後その霊を慰めるためにこの碑を建てたと伝えられている。なお口碑は草木供養塔類似のものとしてとりあげたものに多く残されており、南陽市池黒の「大木大明神」^②は、五十アールにわたつて枝を張る大ケヤキが風倒したあとに建てたものというし、山形市津金沢の「大杉大明神」^③は、今に残る大スギ（雌スギ）と対をなしていた雄スギを伐採したところ疫病流行のたたりに遭い、その霊を慰めたものと伝え、南陽市寺坂峠の「大杉大明神」^{⑤⑥}は、峠の一本スギを伐り倒したところ赤い血を流したのでその霊をとむらつたものと

いう。

また、大荒沢不動尊境内の明治三十二年建立の「植立杉供養塔」^⑧からは、いかにも植林したスギの生育を希うものが読みとられるし、上山市阿弥陀地の「大杉碑」^⑩には、明治三十五年の暴風によつて倒れた大スギをとむらつたものであることが明記されている。

しかしながら、多くの「草木供養塔」「草木塔」は黙して語らず、またその所在地が全国的にみても極めて限られた地域に集中していることについても、今後の検討の余地が残されており甚だ興趣をそそる課題でもある。

とは云え、この発生については、戸川安章氏が述べられているとおり、宗教的な背景のもとに特定の宗教家によつて創建されたものが、山に生きる人々の素朴な信仰と自然崇拜に支えられ、地域的に伝播しまた継承されてきたものであつて、今日的な課題である「自然保護」の原点にかかわる貴重な石造文化財であることは疑う余地のないところである。



米沢東部小学校東方の六面幢



神原、戸長里間の路傍にある「草木国土悉皆成仏」碑(中央のもの)

五、建碑の由来について

建立の由来について碑面に明記されているものは、米沢市大字築沢、市立三沢東部小学校校地の一角にある「草木供養塔」^⑧唯一基である。塔の左右の側面に九行九十一字を刻んでおり「寛政六年鈴木権右エ門、清野忠右エ門、与兵衛の三名が不時の災に備えるために、藩に願ひ出て鹿之沢助之沢屋敷沢越戸沢を留山とした。その後代々の庄屋がその志を継いで山林の育成につとめた結果、樹木がよく繁栄しその資たるや莫大なものになった。そこで草木を供養すると共に三人の功を記して後世に伝える」というもので、すでに村内諸所に建てられていた草木供養塔を碑名に選んだが、むしろ先人の功績をたたえる顕彰碑としての色彩が濃い。また明治十二年建立の米沢市綱木の「草木供養塔」^⑨には「村中為安全建立」とあるが、現実的な素朴な願いを托しているとは云え草木塔建立の本質的な説明にかかわるものではない。

これらのものに比して重視しなければならぬものは、米沢市白夫平の「草木供養塔」^⑩であろう。寛政九年と第二番目に古く「バク草木供養塔」の両側に「一佛成道観見法界」「草木国土悉皆成佛」を刻んでいるものである。その為に米沢市立米沢東部小学校東方の六面幢や、単に右の経文だけを刻む国道二二一号線の神原と戸長里間の路傍にある石塔（安永九年）との関連が考えられる。この点に関しては戸川安章氏の解説（羽陽文化一〇四号）にくわしく、氏は草木国土悉皆成佛ということばから、のちには草木供養ということにウェイトをかけて

草木塔」とし、戸川安章氏は文化十癸酉年（羽陽文化一〇四号）と記しておられるが、これは佐藤忠蔵氏の文化十三年（一八一六）が正しいことを確かめることができた。また米沢市刈安の「草木塔」⑪は、小山田信一氏が豆本『草木塔』ではじめて報告したものであるが、この建立年代文化二年は弘化二年（一八四五）が正しいことなど今次の調査によって明らかにすることができた。

年代別一覧表を見れば、昭和になつてからの七基と年代不明のものを除く四十九基の年代分布は、文政年間や元治、慶応にやや集中しているが、ほぼ均等であつて、明治時代の十四基、大正時代の二基にいたる百三十年にわたり、地域住民の間に建立の精神が連綿として受けつがれてきたことがわかる。

四、碑名について

五十八基のうち「草木供養塔」二十五基と「草木塔」の三十基で大部分を占めているが、「材木供養塔」「財木供養塔」「奉供養草木塔」各一基がある。

最も古い米沢市塩地平のもの①から文政のはじめまでの古いものは、すべて「草木供養塔」であつて、「草木塔」は文政六年の米沢市中原の⑦が最初である。その後は両者交々ではあるが「草木塔」の方が多くなる。なお地域的に両者の分布を見た場合、飯豊町（旧中津川村）所在のものがことごとく「草木塔」であることは一考に値するようである。

白鷹町橋本の「材木供養塔」⑤と「財木供養塔」⑥は、年代では前者が文化七年（一八一〇）後者が慶応二年（一八六六）で、かなりのへだたりはあるが、所在の位置はわずかに二百メートルと近接している。このあたりは藩政時代から実測川の上流から伐り出される材木の集散地であり、盛んに「木流し」が行われたのでとくに「材木」を冠したことが考えられる。

これまで草木塔について解説をなされた方々の多くは、米沢市立東部小学校東方の鉄道線路ぞいにある六面幢（年代不明）で、一側面に「大乗妙典一万部」「草木国土悉皆成佛」の二行を刻むものと、国道一二一号線の神原と戸長里のほぼ中間の路傍にある「ウム（住字）一佛成道観見法界草木国土悉皆成佛」（安永九年）の碑を「草木塔」として取り上げ、さらに天童市乱川橋のたもとの「南無妙法蓮華経」（嘉永六年）の碑も、左側面に「草木国土悉皆成佛」を刻むので「草木塔」とする向きもあるが、本稿ではこれらを「草木塔」と見なさず除外することにした。しかし、これらのものも米沢市白夫平の「草木供養塔」②（寛政九年）のように、唯一基だけではあるが、「一佛成道観見法界」と「草木国土悉皆成佛」を「草木供養塔」の両側に併刻したものがあり、その関連において草木塔発生の背景を探るためには見のがせない貴重なものと考えられる。

四	三	二	一	一八八〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	一八七〇	九	八	七	六	一八六五				
	明治一六			明治二二				明治九						明治二	慶応四	慶応二			慶応元				
	飯豊町川内戸			米沢市綱木				川西町飯坂 高島町太田 太田						川西町時田	川西町御伊勢町	白鷹町橋本			米沢市上中原 川西町犬川 飯豊町宇津沢				
	④〇草木塔			①五草木供養塔				③一草木塔 ⑤五草木塔 ⑤六草木塔						③〇草木供養塔	②九草木塔	⑤一草木供養塔			①四草木塔 ②八草木塔 ③九草木塔				
八	七	六	五	四	三	二	一	一九〇〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	一八九〇	九	八	七	六	一八八五
	明治三九						明治三四						明治二八		明治二五	明治二四		明治二二		明治一九		明治一八	
	米沢市初神						飯豊町白川						飯豊町遅谷		川西町龍蔵神社	白鷹町十王		飯豊町宇津沢滝ノ沢		飯豊町広河原		飯豊町小坂	
	①六草木供養塔						④五草木塔						④四草木塔		③二草木供養塔	⑤二草木供養塔		④三草木塔		④二草木塔		④一草木塔	

二	一	一八四〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	一八三〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	一八二一		
		天保一〇			天保七							文政一三	文政一二		文政九		文政七					文政六		
		飯豊町広河原			川西町朴ノ沢							飯豊町小屋	川西町高野沢		米沢市塔婆沢		南陽市萩		〃 神原		〃 大代原	米沢市中原		
		③⑥草木塔			②③草木供養塔							③⑤草木塔	②②草木塔		⑩草木塔		⑤③草木供養塔		⑨草木供養塔		⑧草木供養塔	⑦草木塔		
四	三	二	一	一八六〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	一八五〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	一八四三
元治元	文久二				安政六	安政五							嘉永七		嘉永二	嘉永三								弘化二
川西町大舟長沢	飯豊町白川寺				福島県熱塩	飯豊町塩ノ畑							米沢市笹籬		川西町温井	川西町上小松								米沢市刈安 〃 小野川 川西町矢之沢
②⑦草木供養塔	③⑧草木塔				⑤⑧草木塔	③⑦草木塔							⑬草木塔		②⑤草木塔	②⑨草木供養塔								⑪草木供養塔 ⑫草木供養塔 ⑭草木塔

三、建立年代について

年代分布一覧表（不明のもの⑬・⑭を除く）

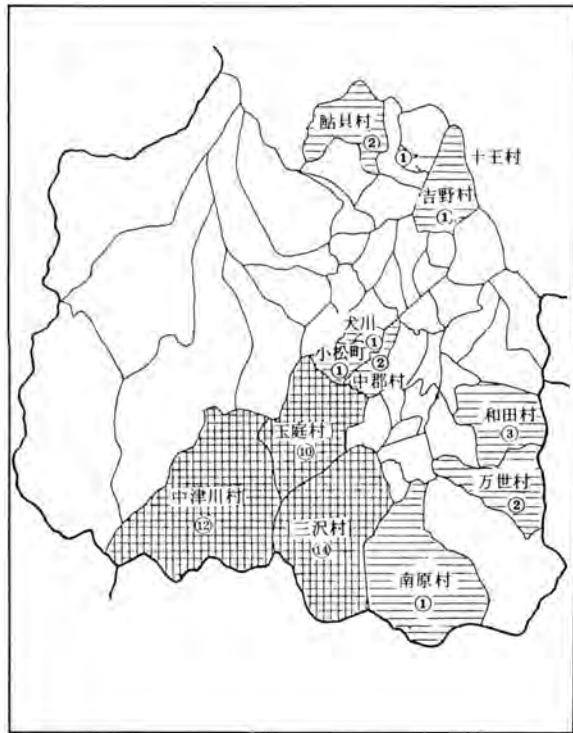
西 曆	年 号	所 在 地	碑 名
一七八〇	安永九	米沢市塩地平	①草木供養塔
一七九〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七九〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			
二			
三			
四			
五			
六			
七			
八			
九			
一七八〇			
一			



県内の所在地図

所在地別(基)	(昭和のものを除く)	
米沢市	19	17
川西町	15	14
飯豊町	14	12
小国町	1	
白鷹町	3	3
高島町	3	3
南陽市	1	1
大江町	1	
福島県	1	
計	58	50

旧市町村別(昭和のものを除く)	
三沢村	14
中津川村	12
玉庭村	10
和田村	3
万世村	2
中郡村	2
鮎貝村	2
南原村	1
小松村	1
犬川村	1
吉野村	1
十王村	1
計	50



旧市町村別の所在地図

○	米沢市東部小学校東（六面幢）	草木国十悉皆成佛	（不明）	一五	一五	②	除外
○	米沢市大字口田沢（大明神）	草木国十悉皆成佛	安永九年（二七八〇）				除外
○	飯豊町高峰洗尾	草木供養塔	（不明）	一八	一八		不明
○	飯豊町高峰毛下野	草木供養塔	安永六年（二七七七）	一九	一九		不明
○	川西町上小松（諏訪神社境内）	供養碑	安政六年（二八五九）	一七	一七		除外
○	中津川町飯豊登山口	草木塔	（不明）	三三			不明
○	川西町矢之沢	草木塔	文政六年（二八二三）				不明
○	米沢市 招湯苑	草木塔	昭和五十年（一九七五）			④④	未調査

〔その他記録されたもの〕

⑨ 西置賜郡白鷹町大字山口字越場
 ⑩ 上山市阿弥陀地（阿弥陀堂境内）

大杉碑
 大杉碑
 明治四十二年（一九〇九）
 明治三十六年（一九〇三）

二、所在について

五十八基の所在地は次表のとおりで、福島県の一基を除けばことごとく山形県内である。さらに西村山郡大江町の一基を除けば置賜地方に限られることになる。福島県の一基も、飯豊町と県境をはさんで隣接する耶麻郡熱塩加納村にあるもので、この発生は飯豊町との交流によるものであることは確かであり、大江町のもは昭和十五年の建立であるから一応考慮の外におくとすれば、「草木塔」「草木供養塔」の所在は、現時点では山形県の置賜地方に限られると断定してはばからないものと考ええる。

なお置賜地方にあっても小国町からは全く発見されていない。表に示す一基は昭和五十六年飯豊町森林組合が植林記念に建立したもので小国町地内ではあるが、飯豊町との境界にあるもので、実態は飯豊町である。

試みに昭和になつてからのもの七基と福島県のものを除いた五十基の所在を、旧町村別に示すならば次表のとおりで、旧玉庭村、三沢村、中津川村に集中していることがわかる。このことは草木塔の発生が山村に住む者の生活に係わるものであることと、多くのものが旧街道ぞいの目につき易い所が選ばれたためと考えられるが、多分に地方的流行の色彩が濃いことも否めないようである。

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	⑤⑧	⑤⑦	⑤⑥	⑤⑤	⑤④	⑤③	⑤②	⑤①	⑤①	⑤①	④⑨	④⑧	④⑦	④⑥	④⑤	④④	
米沢市大字入田沢字大荒沢 (不動尊境内)	上山市狸森	〃	南陽市竹原寺坂峠	長井市五十川字野際 (お薬師様境内)	山形市大字津金沢字熊野堂 (熊野神社境内)	南陽市池黒	飽海郡遊佐町大字杉沢字上田本	福島県耶麻郡熱塩加納村赤崎	西村山郡大江町大字柳川	〃	〃	東置賜郡高島町大字上和田字太田 (大日堂)	南陽市大字萩 (萩小学校校地内)	〃	〃	大字深山字橋本	西置賜郡白鷹町大字深山字橋本	西置賜郡小国町大字大石沢字松茂	〃	〃	〃	〃	〃	大字遅谷字高稲場 (十二神社境内)
植立杉供養塔	松木塔	大杉大明神 先祖代々供養 大杉大明神	大杉大明神	松之木供養 明覚院法師	大杉大明神	大木大明神	法華經供養 千本松植也	草木塔	草木供養塔	草木塔	草木塔	奉供養草木塔	草木供養塔	草木供養塔	草木供養塔	材木供養塔	草木塔	草木塔	草木塔	草木塔	草木塔	草木塔	草木塔	草木塔
明治三十一年 (一八九九)	万延元年 (一八六〇)	嘉永七年 (一八五四)	文政八年 (一八二五)	文化十三年 (一八一六)	文化十二年 (一八一五)	文化十二年 (一八一五)	永享五年 (一四三三)	安政六年 (一八五九)	昭和十五年 (一九四〇)	明治九年 (一八七六)	明治九年 (一八七六)	(不明)	文政七年 (一八二四)	明治二十四年 (一八九一)	慶応二年 (一八六六)	文化七年 (一八一〇)	昭和五十六年 (一九八一)	昭和五十一年 (一九七六)	昭和二十九年 (一九五四)	大正三年 (一九一四)	明治三十四年 (一九〇一)	明治二十八年 (一八九五)	明治二十八年 (一八九五)	
													二〇	三三	二〇			二七	二七	三一	三一	三一	三一	
④⑥													③⑤	③⑤	③⑤			④⑤	④②	④①	③⑨	③⑦		
																								林道改修によりここに移建 六角峠にあったもの

〔草木塔に類似するもの〕

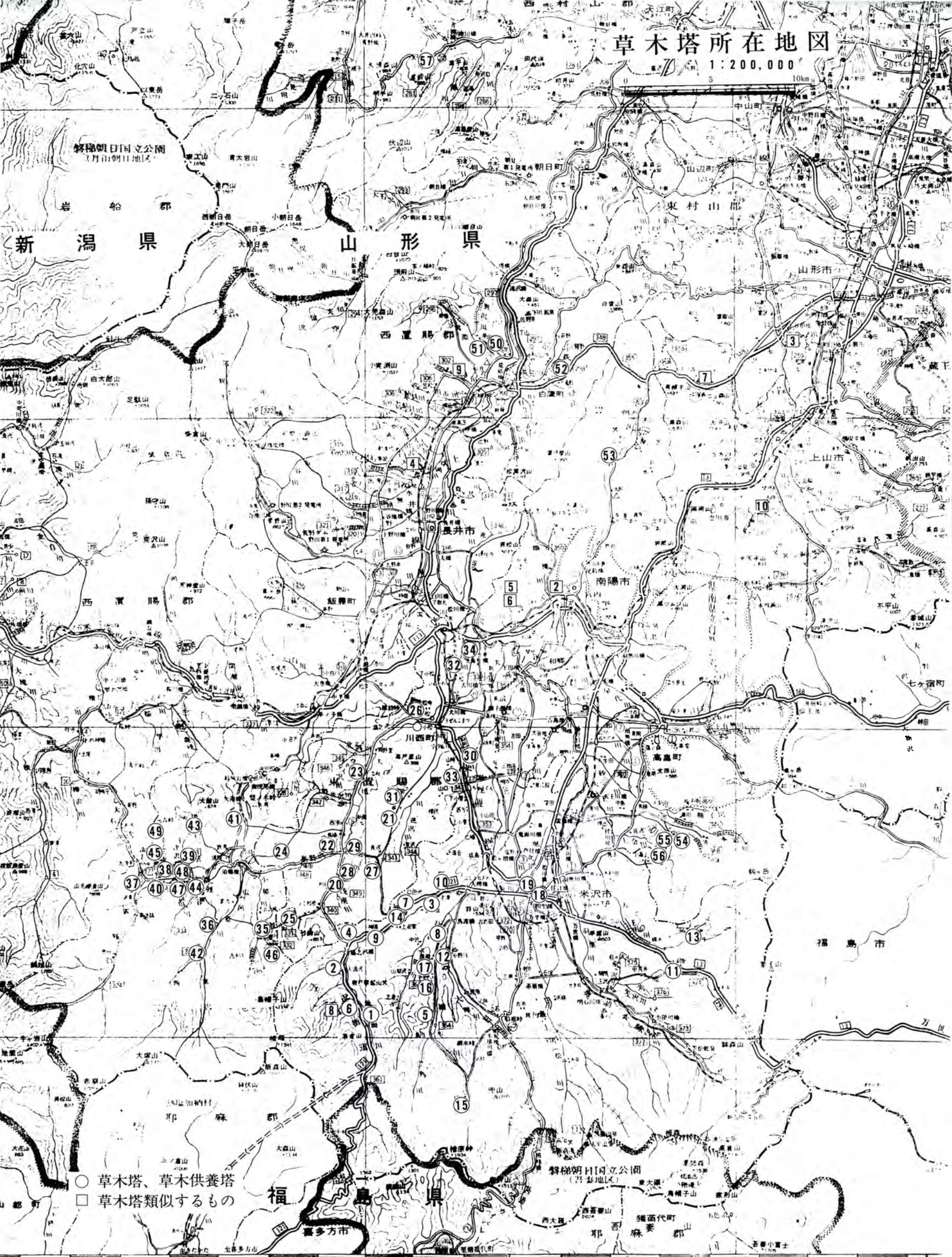
④	旧道の一里塚にあったもの	寛政九年(一七九七)	草木供養塔	東置賜郡川西町玉庭字柴引(高橋隆一氏宅地内)	②①
⑨	水田地帯の旧道ぞいにあったもの	文化十三年(一八一六)	草木供養塔	大舟字大舟上(新蔵峠への旧道ぞい)	②②
⑩		文政十二年(一八一九)	草木塔	玉庭字高野沢	②③
⑪		天保七年(一八三〇)	草木供養塔	玉庭字朴ノ沢(高国寺境内)	②④
⑫		弘化二年(一八四五)	草木塔	玉庭字矢ノ沢	②⑤
⑬		嘉永二年(一八四九)	草木塔	玉庭字温井	②⑥
⑭		嘉永三年(一八五〇)	草木供養塔	上小松(諏訪神社境内)	②⑦
⑮		元治元年(一八六四)	草木供養塔	大舟字長沢	②⑧
⑯		慶応元年(一八六五)	草木塔	玉庭字犬川	②⑨
⑰		慶応四年(一八六八)	草木塔	玉庭字御伊勢町(瑞光寺境内)	③①
⑱		明治二年(一八六九)	草木供養塔	時田(四柳清徹氏宅地内)	③②
⑲		明治九年(一八七六)	草木塔	上奥田字飯坂	③③
⑳		明治二十五年(八九二)	草木供養塔	下小松(龍蔵神社境内)	③④
㉑		大正八年(一九一九)	草木供養塔	時田	③⑤
㉒		昭和四十七年(一九七二)	草木供養塔	西大塚(高橋通三郎氏宅地内)	③⑥
㉓		文政十三年(一八三〇)	草木塔	西置賜郡飯豊町大字小屋字小部屋	③⑦
㉔		天保十年(一八三九)	草木塔	大字広河原字原崎	③⑧
㉕		安政五年(一八五八)	草木塔	大字塩ノ畑	③⑨
㉖		文久二年(一八六二)	草木塔	大字白川字屋敷裏(白川寺境内)	④①
㉗		慶応元年(一八六五)	草木塔	大字宇津沢字馬神沢	④②
㉘		明治十六年(一八八三)	草木塔	大内川内戸字中原	④③
㉙		明治十八年(一八八五)	草木塔	大字小坂	④④
㉚		明治十九年(一八八六)	草木塔	大字広河原字大元(山の神社境内)	④⑤
㉛	羽越水害後付近の河床から拾いあげたもの	明治二十二年(一八八九)	草木塔	大字宇津沢喜波山	④⑥

一 覽 表(市町村別年代順)

番号	所在地	碑名	建立年(西紀)	川崎浩良 「浩良自話」	佐藤忠蔵 「置賜文化」 三十八号	小山田信一 「豆本」 「草木塔」	備考
①	米沢市大字入田沢字塩地(墓地内)	草木供養塔	安永九年(一七八〇)	六	六	①	
②	大字入田沢字白夫平	草木供養塔	寛政九年(一七九七)	五	五	③	
③	大字口田沢字上屋敷(お薬師様境内)	草木供養塔	寛政十二年(一八〇〇)			⑤	
④	大字入田沢字戸長里	草木供養塔	文化四年(一八〇七)			⑦	
⑤	大字築沢字糸畔	草木供養塔	文化十三年(一八二六)	一〇	一〇	⑧	
⑥	大字入田沢字大荒沢	草木供養塔	文政元年(一八一八)	二	二	⑩	
⑦	大字口田沢字中原(子安地藏尊境内)	草木塔	文政六年(一八三三)			⑫	
⑧	大字築沢字大代原(米沢市立三沢東部小学校)	草木供養塔	文政六年(一八三三)	一	一	⑪	
⑨	大字神原(勝軍地藏堂境内)	草木供養塔	文政六年(一八三三)	四	四	⑬	
⑩	大字口田沢字塔婆沢(墓地内)	草木塔	文政九年(一八二六)	二	二	⑯	
⑪	万世町刈安(山の神社社参道)	草木供養塔	弘化二年(一八四五)			⑥	
⑫	小野川町塔之原(小野山公園)	草木供養塔	弘化二年(一八四五)			⑬	
⑬	万世町箕籬(山の神社社境内)	草木塔	嘉永七年(一八五四)	七	七	⑭	
⑭	大字口田沢字上中原	草木塔	慶応元年(一八六五)	三	三	⑰	
⑮	大字綱木(山の神社社境内)	草木供養塔	明治十二年(一八七九)			⑱	
⑯	大字築沢字初神(渡部忠氏宅地内)	草木供養塔	明治三十九年(一九〇六)			⑳	
⑰	大字築沢字屋敷(山林内)	草木供養塔	七十年ほど前と伝える			㉑	
⑱	中央五丁目(猪俣市弥氏宅玄関前)	草木塔	昭和五十四年(一九七九)			㉒	
⑲	中央五丁目(西蓮寺墓地内)	草木塔	昭和五十五年(一九八〇)			㉓	米沢市赤芝町羽黒堂から移す

草木塔所在地図

1:200,000



- 草木塔、草木供養塔
- 草木塔類似するもの

したのであった。

翌昭和四十六年、県立博物館に職を転じたので、館の調査業務の一部に取りあげてもらい、学芸員の吉野智雄氏、嘱託の布施隆氏と共に調査をつづけることになり、昭和四十八年に一応の資料を整えたのであった。

時、たまたま高度成長に伴なう公害や自然の破壊が大きな社会問題として叫ばれるにいたり、マスコミは草木塔こそは自然保護の原点に係わるものとして取りあげたために、にわかに関心を呼び、新たな情報の提供もあつてさらに数基を加えることができた。また川西町西大塚の高橋通三郎氏が邸内に立派な草木供養塔を建立して大いに話題をにぎわしたのもこの頃であつた。

一方、民俗学の立場からは、戸川安章氏の「民俗資料の調査と集収」(羽陽文化一〇〇号)や「草木塔管見」(羽陽文化一〇四号)、大友義助氏の「草木塔の謎」(公論やまがた昭和五十一年一月)、「草木供養塔について」(置賜民俗五〇号)などの発表があり、建立の意義に係わる考察が行われている。そして昭和五十五年七月、多年調査研究をつづけておられた米沢市の小山田信一氏は、よねざわ豆本『草木塔』で、四十八基を記載すると共に、置賜地方における発生の背景などを手際よくまとめて刊行された。

県立博物館は、これらの方々の業績に照らし、以前の調査資料の不備を補い、新たに追加する必要も生じたので、昭和五十八年秋、学芸員金山耕三と研究員高橋信弥が参加して十数回にわたり再調査を実施した。その結果、小山田氏の豆本『草木塔』の四十八基にさらに十四基を加え、一方米沢市大字口田沢(通称大明神)(豆本番号②)は経文だけであ

るため、川西町矢ノ沢(同⑬)は探し当らず、米沢大荒沢不動尊境内の(同⑭)は類似の項にうつし、米沢市招湯苑(同⑮)は未調査のため除外した。また建立年の誤りを正し次の一覧表のとおりに整理した。その総数五十八基であるが、別に「草木塔類似」の項を設け十基を付記することにした。なお、白鷹町教育会編さんの『しらかの歴史をたずねて』(昭和五十六年刊)の一一五頁に、草木供養塔として写真をそえて記している中山三十三観音入口にある巨大な石碑は、碑文の読み誤りであつて草木塔とは無関係のものである。

草木塔の調査報告

一、草木塔をたずねて

山形県の置賜地方に多く残されている「草木供養塔」または「草木塔」なる石造物が、極めてユニークな民俗資料であることに着目し、その調査に先鞭をつけられたのは、米沢市門東町の故佐藤忠蔵氏であった。佐藤氏は昭和二十八年七月から老軀単身自転車を駆って調査に専念し、昭和四十一年『置賜文化』第三十八号に「草木供養塔」と題して三十六基の所在を報告した。この佐藤氏の業績を最初に紹介したのは、昭和二十九年七月発行『羽陽文化』二十三号の「緑化文化の草木供養碑」の記事であつて、ここでは九基の発見を掲げている。その後川崎浩良氏はその著『浩良百話』（昭和三十六年）の中に、「県内に残る草木供養碑」としてやはり佐藤氏の調査によるもの三十三基を記載した。

私は、昭和四十一年七月二日、飯豊町谷地平の植物調査の帰途、はからずも塩ノ畑の草木塔を見、さらに白川を渡る上覧橋のたもとの草やぶの中に前のめりに倒れているものを見て強く打たれるものがあり、

結 城 嘉 美（山形県立博物館嘱託）

その調査を思い立ったのであるが、その方途もないままに時を過し、佐藤忠蔵氏を米沢市門東町に訪ねたのが昭和四十五年九月のことであつた。当時七十八才という小柄なご老人との初対面であつたが、いだいた名刺を見て意外にも若柳流の舞踊のお師匠さんと知つて驚いた。氏は草木塔のほかにも郷土史関係のいろいろな業績をまとめておられたが、草木塔については、前記『置賜文化』に発表されたものの原典ともいうべきものを示され、心よく閲覧をゆるされたのであつた。これは昭和四十四年までの調査であるために『置賜文化』の三十三基にさらに柴引の草木供養塔一基を加えられ、一基毎に写真を貼布し見取図を書きそえたものであつた。

この資料に基づき、早速佐藤氏の足跡をたどつてみることにし、十月二十七日当時県立博物館の準備室におられた吉野智雄・布施隆両氏の協力を得、長井市の清野正氏の運転する車で川西町と飯豊町の調査に入ったが、所在地付近の住民に尋ねてもほとんど知る者はなく、草やぶの中に倒れたまま放置されてあつたり、飯豊町洗尾や毛下野のようについてに所在をつきとめることができなかつたなど、佐藤氏の労苦が改めて思い知らされると共に、その再確認の急務であることを痛感

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

山形県立博物館研究報告 第5号

発行者 山形県立博物館

山形市霞城町1-8

TEL(0236)45-1111

印刷所 アベ印刷

